
IS 何回か転生(?)する人の物語

起源はきっと厨二病の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 何回か転生（？）する人の物語

【Nコード】

N7031Y

【作者名】

起源はきつと厨二病の人

【あらすじ】

何処にでもいるような一般ピーポーが突然テレビからのなぞの光で別世界に来た！そして、その世界で「五臓六腑撒き散らしても生き残ってみせる！！」と頑張る物語

プロローグ的な(前書き)

はじめまして起源はきつと厨二病の人です

この作品が処女作となります

誤字脱字がかなり多くなってしまいましたが暖かい目で見守ってくださいとうれしいです。

なおこの作品は厨二病てきなものがありこんなの〇〇じゃないなどといったものがあると思いますがそれが嫌な人は戻ることをお勧めいたします(汗

それでもよければぜひともご覧ください

プロローグ的な

皆はよくネットで見るような二次創作のように自分が転生や憑依、トリップを試してみたいと思ったことはあるだろうか？

俺もつらやましいと思っていたが・・・まさか、何処にでもいそうな一般ピーポーの自分が経験するとは思ひもしなかった、

さかのぼること数時間前・・・

今日も仕事が終わリ自分が一人暮らししているアパートへ帰宅してPSS3を起動し、A C f aを始めて1時間ぐらいすると急にテレビが光り、気がついたら知らない部屋にいた

くそして現在く

ここに来て(？)から建物内をちよつと調べているとここはどこかの軍事関係の建物ということがわかった。

「なぜ、人が1人も見当たらないんだ？」

(それにしてもさつきから妙に体に違和感があるな、どうしたんだ・・・?)

などと思っただけでも実際に体に怪我などをしているわけではないが

妙に違和感がある

「なんか目線が低いような・・・」

とぼそりとつぶやいた瞬間、ふと勘づき急いで近くのトイレに駆け込み鏡を見た

そして、そこには・・・昔の自分がいたのだ

「なんじゃこりゃあああああああああああ！！」

（なぜ今まで気づかなかった！？）

彼はもう一度鏡で自分の姿をみて心を落ち着かせるためにゆっくりと深呼吸をし改めて今までの状況を整理してみた

A C f a を始める リリウムたんマジ可愛いよ テレビからなぞの光が！ 知らない天井だ 俺、若返りました 今ここ

「面倒なことになった・・・」

「悩んでいても仕方ないな、建物内をさらに調べるか」

彼はまた建物内を散策しそして一番奥のどでかい扉の前に来た横にはタッチパネルのようなものがありそこには手形のグラフィックがある

（なんだ、これは？

映画によく出てくるような手を触れてやるやつかな？

試しに触ってみるか）

そう思い彼はタッチパネルに手を触れてみると画面にCOMPLETEという文字が浮かびどでかい扉が重たい音を立てながら開いた

(なんか開いちゃったよ！)

そしておそろおそろ入っていくとそこにあっただのは・・・

・・・見覚えのある巨大なロボットだった

「なんだ、これは？」

「ものすごく見覚えがあるんだが、まさかな・・・」

彼は内心とても驚いている。

なぜならそこにある巨大ロボは・・・昔、自分がPSS2でやっていたACLRの機体にあまりにも似ているのだ

「まさか、ACの世界に来たとは信じたくないな」

彼はそう言つとため息をつき、呟いた

「面倒なことになった・・・」

プロローグ的な(後書き)

最初から駄文ですいません……

これから頑張っていきたいのでよろしくお願いします

第1話（前書き）

すいません今回も駄文です；；；

戦闘の描写が下手だったりしてわかりにくいかもしれませんが許してください（汗

あと独自解釈や独自設定が入るかもしれないがそこら辺はご了承ください

第1話

第1話

俺はとりあえずあのAC中に乗ってみることにした

そして不思議なことに身体が覚えているように次々とコクピット内を操作することができた

その感覚を元にいろいろな情報を見てみるとこの建物の持ち主とこのACの所有者欄にレイジ・クゼと書いてあるのだ

ちなみに俺の名前は元の世界では久瀬 零治という名だ

要するに俺はいつの間にかこのでかい建物とACを手に入れてたらしい

なんともまあ良くできたご都合主義なことだ

そう思っているとコクピット内からpipipiと音がする音をしたらほうをみてみるとそこには携帯端末らしきものがおいてあり画面には依頼主と書いてあった

(マジかよ・・・)

と心の中で呟きながらその携帯端末に手を伸ばしたときふと思ったのだ

この世界に来たということは戦場にたつかもしれないということ、すなわち死と隣りあわせということである

そう思うと携帯端末にを取ろうとしている自分の手が急に重くなったのだ

実際はその手に何か重いものが乗ったわけでもなんとも無いのだ

だが彼は一向にてを動かさないでいる。いや、動かせないでいるのである

そして次第に彼の鼓動は早くなり息も荒くなり体がかすかに震え始めている

さっきAC内のデータを見た限りでもそれなりに依頼をこなしていた、その中には襲撃の依頼も含まれていた

要するにこつちの世界での自分は少なくとも一人以上は殺しているのだ、もしかしたら殺した相手の家族や親しいものが復讐をしに来るかもしれない、いくら戦場だからといっても人殺しは人殺しだ戦場だったからなどの言い訳は通用しない

ならば自分は生きるためにたとえ無様に這いつくばっても足掻くしかないのだと自分に必死に言い聞かせる

なんにせよ兵器というものを持っているからには戦場からは逃れられないそう考えていると汗が彼の額から目のほうに垂れてきてふと思考の渦の中をさまよっていた意識が我に戻る

そうすると彼はやっと決心して携帯端末を手に取る

そして携帯端末からは男性の声が聞こえた

「どうした？随分と遅いんじゃないか、死んじまったかと思っただぜ」
ガハハつと相手の男は笑いながら言った

「すまない、少し仮眠をとっていたものでな」

「おいどうした？いつもなら皮肉のひとつでも返すのに今日はやけに大人しいななんかあったのか？」

「いや大丈夫だ、少し夢見が悪かっただけだ」

「ほう、お前が夢を見るとは珍しいな。まあなんとも無いならよかったが」

「ああ、気づかいは無用だ。で依頼するために連絡をしたんじゃないのか？」

「おお、そうだったそうだった」

と男はまるで今思い出したかのように笑った言った

(どうやらこの電話の男とこっちの俺は知りあいようだな)

「お前さんへの依頼内容を渡したいからいつもどおりのマールに2時間後に来てくれ」

「わかった2時間後だな」

「おうよろしく頼むぞ」

そういうと男はまた軽快にガハハと笑いながら電話を切ったのだ

「なんとかやり過ごせたか・・・」

そういうと彼は自分の携帯端末など建物内のあらゆるデータを見ることにした

そして2時間後

彼はマールという酒場のような場所に来ていた

最初は何処にあるんだろうかとあせっていたが携帯端末内に地図もあり看板もでかいためすぐに見つけることができた

(それにしても色々と情報を整理してみるとどうやら国家解体戦争の最初のほうみたいだな

まだ新兵器のネクストのも目撃例もないみたいだな)

そう思っているとこちらに向かってくる身長が2メートルぐらいありそうな大柄の男が来た

「すまんすまん、待たせたか？」

とさっきの通信越しで聞き覚えのある声が軽く笑いながら言った
「時間通りだ問題ない」

とあくまで冷静なようにかえした

「そうかそうか、ならいい」

といいながら男は席に着く

「ほら、これが今回の依頼内容だ確認してくれ」

そういうと男はデータチップのようなものを渡してきたおそらく携帯端末のものであろう

それを受け取るとレイジは携帯端末に差し込み依頼内容を見た

依頼内容は簡単に言えばアメリカにある大企業の兵器開発工場を潰すことであつた

（大企業の兵器開発工場ということはネクストG Aあたりのネクストを作っているところか？

まあ何にせよいつネクストが出てくるかわからないからなんともいえませんが）

レイジがそう考えていると

「どうした？何か不明なところでもあつたか？」

と男が聞いてきた

「いや、大企業の兵器開発工場というのが少し不安だな

敵の新兵器でも出てくるんじゃないかと思っただけだ」

「ああ、そのことか

それについてなんだがゴジマなんかやらを動力源として動かすACを作っているみたいだ」

「っ！」

（もうすぐネクストがでてくるのか！？できたらすぐにお陀仏じゃないか！）

「その新兵器に対しての情報はるか？」

「あるにはあるんだが不確かなもので向こうに潜らせてる奴からの

情報では7〜8割程度完成しているという話だ、完成したら理論上では最強の戦力になるらしいが、まあ要するにそんな化け物みたいな兵器を作られる前に壊してしまおうということだ」

レイジはまだギリギリ完成していないと聞くと内心ほっとした

「そうか、それならいい」

「あとほかに不明な点はあるか？」

「いや、無いな。悪いが今日はもう帰らせてもらおう」

そういうとレイジは席を立ち帰ろうとすると男が

「今度は、ゆっくり酒でも飲もうか」

とニカツと笑う男に対して自然と笑みがでて

「そうだなと・・・」

というとレイジは踵を返し出口へ歩いていった

あれから自分の家(?)に帰ってきたレイジはすぐさまACのシュミレーターを使い必死に訓練していた

(やはりこの体が本能的に覚えているらしいな・・・)

それにしてもまさかこの機体とはなんともいいがたいな向こうの世界でアセンをまじめに組んでおくんだった・・・)

そう、彼の機体はみんな大好き”ピンチベック”をもとにして右腕武装に N I O H 左腕武装に W L O 2 R - S P E C T E R というなんとも微妙なアセンである

(昔の俺は何をしたかったのだろうか・・・)

と内心ため息をつきながらもしっかりとシュミレーターで訓練をしているのであった

あれから数日がすぎ依頼当日

（これが初の戦場になるんだ、ゲームじゃない本当に命を懸けることになるんだ・・・）

レイジはもう一度依頼内容をしっかりと確認して心を落ち着かせようとしていた

（もうすぐ時間だな・・・）

と思うとコクピットの通信からあの男の声が出た

「時間だ、はじめてくれ」

それを聞くとレイジは「了解」と静かに言いブーストをふかし戦場にかけていった・・・

大企業職員 side

今日はコジマ粒子を動力源とするネクストの開発をしている、何とかネクストは9割ほど完成したのはいいがそれに乗る奴が過去の実験でほとんど使い物にならなくなっている

残念なことにAMS適正が低い奴しかここには渡されていないこんなじゃ最強の兵器を作ったって宝の持ち腐れにしか過ぎないんだがな

「もっといい素材を渡してほしいもんだ」

と彼が呟くと施設の警報がなり響いた

side out

レイジは最初に背中 of グレネードを打ち次々に建物の主要施設である場所を破壊をしていった

半分以上を破壊したところにMTなどができたがどうやら奇襲には成功したらしいMTからの攻撃を次々に避け左腕武装のWLO2R - SPECTER をMTたちにあてていき破壊していく

そして一番重要そうな建物まできて扉を破壊して中に入ったそうするとそこにはネクスト次世代ACがあった

(後はこいつを破壊すれば終わりか・・・)

と心の中で呟き右腕武装のNIOHでコア部分を四回ほど打ち込み破壊した

(これで終わりか・・・)

そう思うとレイジは壊滅状態になった工場を見渡す、するとあたりは火の海である

死体や怪我をしてる人たちがあふれかえってその中には必死に助けてや死にたくないなどと言うものもあり、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものであったそれをみると急に手が震えだし汗が溢れてきた(俺が殺した・・・この手で俺が)

そう思っていると建物の瓦礫の影からボロボロのノーマルACがこちらに向かって銃口をむけ攻撃をしようとしている姿があった

レイジはとっさに殺されると思い左腕武装のWLO2R - SPECTER でひたすらに相手を撃った

相手のノーマルACの搭乗者は撃たれながらもオープン回線で

「ちく、しょう・・・よくも、俺の仲間を殺してくれたな・・・」
そういうとノーマルACは完全に沈黙した

彼は依頼主の男からの輸送用の乗り物に乗り

いまだに震えている自身の手をしっかりと握るようにはしていたそして最後に倒した敵の言葉や悲鳴などが残っておりあの地獄絵図を思い出してしまい急い胃の中のものこみ上げてきて嘔吐してしまった
(これが戦場・・・生きるために人を殺して、躊躇えばその先にあ

るのは・・・)

“ 死 ”

そう思うと彼は改めて自分は死と隣り合わせの場所にいることを実感したのであった

第1話（後書き）

次回も下手くそな文章が続いてしまいますがお許しを

そついや主人公設定など書いたほうがいいですかね？

第2話（前書き）

頑張って投稿してみました！

だけど相変わらずの駄文；；

心理描写や戦闘描写を上手く書きたい！

誰か教えてください！（ ; ）

オリキャラ的なのがいるのはあまり突っ込まないでください（汗
あと何とか4のキャラを出したり4の主人公になるであろう人物を
出してみましたか・・・なんというか

第2話

第2話

あの初(？)の依頼から一週間ぐらいすぎた頃に携帯端末が鳴り響いた

(また、依頼か)

そう思うとレイジは携帯端末を手に取った

「依頼か？」

「ああ、なんと今回は僚機をやったぞ」

「僚機？」

「ああ伝説のレイヴンだそうだ」

(伝説のレイヴン？まさかLRの主人公か？)

「わかった、依頼内容の受け取りはいつもの場所か？」

「いやすまんが今は手がはなせなくてな、今回はデータをそちらにメールとして送らせてもらう」

「そうか、珍しいななんかあったのか？」

「いや、いろんな依頼を整理していてなちょっと忙しいだけだ」

「ならいい、無理はするなよ」

「……」

「ん？どうした」

「……っああ、お前さんこそ珍しいなと思ってな、いつもは心配すらしないのに」

「なに、ただの気まぐれさ」

「では後ほど依頼内容を送らせて貰う」

「ああ、頼んだ」

そういうとレイジは携帯端末の通信を切った

依頼主の男 side

「ああ、頼んだ」

という言葉と共に携帯端末の通信が切れると男は

「・・・すまない」

と静かに呟いたその声はまるで懺悔をするかのような声であった

side out

携帯端末の通信が終わってから数分後、端末から pipipi と鳴るとレイジは端末を手に取り依頼内容を確認する

今回の依頼内容はスウェーデンにある企業が管理する基地を襲撃するといったものであった

(スウェーデンというと北欧のあたりか?)

そして今回も依頼内容もネクストは居ないらしいそして下のほうにスクロールしていくと僚機についての情報が書いてありそれを見つめる

(なるほどどうやら情報を見る限りLRの主人公みいだな、頼もしい限りだ

さてミッション開始時は4日後だな今から現地の方へ行つて合流するでしょう)

そう思うとレイジはすぐさま行動にでた

2日後、彼は上手くスウェーデンのほうに入ることができた
そして自分の僚機になる者に合流をしいったのだ

レイヴン side

作戦決行まで2日前のこの日に俺は今回の作戦でのパートナーとなる男と会うことになった、たとえ今回しか仲間にならなかったとしても顔を知っておくぐらいはしようと思ったのだ、そして俺がこちらの喫茶店の奥のほうに座って待っていると自分と同じぐらいの青年がこちらを見て一直線に歩いてきて彼の座っている奥のテーブルの前に行くところだがあらかじめ端末通信で教えておいた軽いハンドサインをしてきたのでこちらもハンドサインを返した

(この青年が今回のパートナーかそれにしても若いな、いや俺と同じぐらいか?)

そう思っていると青年が話し始めた

「はじめましてだな、伝説のいや、最後の鴉といったほうが良いかな?」

と軽く笑いながら喋る青年に対してレイヴンは

「いや、どちらでも構わない」

と冷静に返した

side out

「いや、どちらでも構わない」

と表情をまったく変えずにそっけなく返されたレイジは内心焦ったのだ

(まずいな、急になれなれしく声をかけすぎたかな?)

本人にしちゃ昔のこといちいち言われたくないのに失礼なことをしてしまったかな?)

とレイジが焦っているとレイヴンのほうも昔オペレーターから自分

は無表情で口数も少なく目も釣り目みたいな感じだから相手に怒っているような印象を持たせるとよく言われていたの思い出し

(いつもの悪い癖が出てしまったか・・・)

と後悔していた、するとレイジが

「昔のことを他人に触れてほしくないよな気に障ったようだな、すまない」

と謝ってきたのだ。それを聞くとレイヴンは

「いや、そのことは気にしていない」

こちらこそなんか怒っているみたいだな印象を与えてしまったようだすまない」

とあわてて返してきたのだ。そして二人は互いのその光景に面をくらい思わず笑ってしまった

「おっとすまないそういえば俺の自己紹介をしていなかったな、依頼内容のところで知ってると思うが俺の名はレイジ・クゼだよろしく頼む」

そういうとレイジは右手を差し出しレイヴンは

「まあ短い間ではあるかもしれないが、俺の名はレイヴンと呼んでくれ」

と言い差し出された右手を取り握手を交わした

「ああ、よろしく頼むレイヴン」

こうして後にアナトリアの傭兵と呼ばれる男との初の対面だった

そして初めてレイヴンと会ってから二日後、作戦開日

「こちらレイジ作戦開始時間となった、戦闘を開始する」

「こちらレイヴン、了解したこちら也开始する」

そう通信するとレイジはブースターで移動をし始めた

(二回目の戦闘だつて言うのに前回より心が断然なれてるな、一回でなれるとかどうやら俺の心は異常みたいだな)

と思っていると目的の建物が見えてきた

レイジは戦闘に集中して建物に向かって背中中のグレネードを発射した

戦闘を開始してから約10分ほどたち基地はほぼ壊滅状態となり作戦完了と思つた瞬間発砲音とともに隣にいたレイヴンの乗るACの右腕部が吹き飛んだのだ

何事かと思ひあたりをセンサーでさがすとそこには・・・ACネクストが三対もいたのだ

(なっ！まさかネクストだと！？どうしてこんなところに！？)

と思つていると通信から依頼主の男の声が聞こえたのだ

「偽りの情報すまん、悪いが俺はこの戦争に国家側の勝ち目はまったく無いと思つてお前らの情報を買つて安全を保障することにしてもらつたんだ」

彼は淡々と語る

「安心しろお前一人で死ぬわけじゃない、そのレイヴンも一緒に死んでもらうことになつていいるからな、まあ運が悪かつたと思つてあきらめてくれ・・・じゃあな」

と言つと通信は切れて目の前にいるネクストからのオープン回線で喋り始める

「そういうわけで残念だつたなあ、時代遅れの鴉どもめ。このエリート俺が葬つてやるよ喜べえ！」

ハハハと気がふれてるように笑つて言った

しかしレイジはそんなことを気にせずにレイヴンに通信を送つた

「レイヴン大丈夫か？」

「なんとかな、しかしACの右腕が一撃で吹き飛んだぞ何なんだあれは？」

「新兵器AC・NEXTだあれは化物だ、勝ち目が無い」

「それは本当か？これからどうするんだ？」

「二手に分かれて逃げよう、近くに洞窟があるその付近でACを乗り捨てて逃げるんだ。」

いくらネクストでもそこに入り込まれたら探し出すことはほぼ不可能だ、一緒に逃げてもまとめ殺されるだけだ。安心しろ俺が劣り役に

なるお前は先に行け」

「そんなことしたらお前がただじゃすまないだろ！？しかも相手は三体いるだろ！」

「まかせろレイヴンが逃げる時間ぐらい稼げるさ、俺のほうがお前よりネクストのことを知っている」

そう言ってもレイヴンは一向に自分だけが生き残ることを選択しようとしないうとするとレイジは

「いいから早く行け！！お前はこんなところで無様に死ぬのか！？違うだろ？お前は誇り高きレイヴンだろ！なら生きてレイヴンは誇れる存在だと、俺たちのためにも生きてくれ！！」

それを聞くとレイヴンは

「すまない」

とつぶやきオーバードブーストをふかし去っていくのを見て

敵ネクスト、赤色のアリーのパイロットは

「おい！なに逃げようとしてんだよ！？」

というと右手に持っている04-MARVEをレイヴンのACに向けて発砲しようとした瞬間に鈍い発射音と共に横からグレネードが

打ち込まれた

「ああ！？てめえなにしゃがんだ！！」

彼は自分の行動を邪魔されたことに異常な苛立ちをあらわにした

「ふっ、エリートは後ろから撃つのが好きな臆病者のことを言うのか？」

と小ばかにしたように言うと

「てめえ、なめた口を利くんじゃねぞ屑が！！おいベルリーズ、ア
ンジエてめえらはこいつとさつき逃げた奴には手を出すなよ！俺が
始末してやるっ」

と言うと二人からは「好きにしろ」との言葉が返ってきた

(これでこいつ一体なら何とか時間を稼げるか？)

「てめえ、いまから絶対に殺してやるからなあ！！」

「へえ、そいつは楽しみだ」

「死ねえ！！」

その言葉と同時に04・MARVEが撃ち込まれた、そして左腕部
が吹き飛ばされレイジは急いで建物の瓦礫など入り組んだ場所に逃
げた

「おい！さっきの威勢はどうした？逃げるのかあ！？」

ヒヤヒヤヒヤと不気味な声を上げながら喋っているのに対してレイ
ジは

「射撃を当てたぐらいで喜んでるとはくだらないな、レーザーソー
ドでも当ててみるよ三流」

とまたも挑発すると

「てめえ今言ったことを後悔するなよ？お前のACの四肢を切って
最後にじっくりコアを焼ききってやるよ！！」

そついうと彼は右手から04・MARVEをすてて左手の02・D
RAGONSLAYERだけとなった

(下らん挑発にのるとは本当に馬鹿なのか？それともAMS適正で
頭のネジが吹っ飛んだか？どちらにしてもこちらにチャンスはでき
たわけだ)

そう思うとレイジは右背のグレネードをパージして相手の目の前に
でた

「やっと観念したか屑野郎めが」

そっぴいこちらに向かつて突っ込んでくる赤いアリーヤそれに向か
い左背のグレネードを下半身に撃ち込む

するとアリーヤはバランスを崩した。いくらネクストにPAフラインバルアーマーなどがあっても安定性が無ければノーマルが持つバズーカにすら一時的に硬直するのだ

するとレイジはその硬直の隙を見逃さず左背のグレネードをパージしてOBオーバードブーストをふかし相手に向かつて突っ込む

すると敵も一時的な硬直が終わり再び左手の02-DRAGONS LAYERを振るった

だが02-DRAGONS LAYERが直撃することは無かった、なぜならば02-DRAGONS LAYERはほかのレーザーブレードよりリーチが短いため、自身の武器の特性すら完璧に把握できてない三流リンクスが振るったところで一撃必殺にはならなかった。だがレイジの乗るACの頭部に掠ってしまい頭部が吹き飛んだがレイジはとまらずに

「おおおおおおおおおおおおおお!!」

と叫び相手のアリーヤのコアに右腕部のNIOSHを撃ち込むと

「ガアアああアアああアああ!!」
と相手のリンクスはAMSから激的な痛みが伝わってもがき苦しんでいる

レイジはその隙を見逃さずに立て続けにNIOSHを3回撃ち込むと赤いアリーヤは完璧に沈黙したのだ

(これでもう戦うための武装は無いな、だがレイヴンが逃げること

ができるぐらいの時間は稼げただろう」

そう思うとレイジはボロボロのACを残りの2対の前に移動し自身ももうレイヴンの時間稼ぎをまだ行つかのように立っていた

それをみたベルリオーズは

「なるほど、そんなになつてまで仲間を助けようとするか

その行為はほかの奴らから見たら無意味や無様などと言われそうだな
なのになぜそんなことをする？死ぬことを受け入れたのか？」

「いいや、死ぬのは怖いさ、そしてなんもなく無意味に死んでいく
のはもつと怖い、

自分が生きた証を立てずに死んでいくのはそもそも生きていないの
とあまり変わらないと俺は思っている」

と今にも気を失いそうな自分の体に鞭を打ちそうこたえた。すると
アンジエが

「ならばなぜ今このときも逃げようとしない？充分にあのACが逃
げる時間は稼げただろう？」

と不思議そうに聞いてきた

「逃げる？それもいいかもな、だが前を向かぬものに勝利は無いと
思っただけさ」

その後、まあ生きることが勝利なら俺はもう負け確定だけどな
と加えて言った

それを聞いたベルリオーズは

「ほう、いい戦士だ。お前にもう一度チャンスをやろう」

レイジはその言葉がどういう意味かをわからずに自分の意識を手放
したのであった

第2話（後書き）

ベルリオーズやアンジエ、4の主人公はこんなんじゃないねえ！

と思われるかも知れませんがそこから辺はつつこまないでくれるとありがたいです（・・・；）

そして次も頑張りたいと思います

第3話（前書き）

え、前回の話でネクストに勝ってますがそこら辺はご都合主義という形で保管してもらえるところらしいです（汗）

そして今回も微妙なですけど是非読んでください

第3話

第3話

「知らない天井だ・・・」

と言うと最初に目に入ったのは白い天井である

(俺はあの後、死んだのか?)

そう思っている病院で嗅ぐ様な薬品の臭いが鼻を通ってきて、ぼやけた意識を覚醒させていく

(ここは天国じゃないと病院か?)

そう考えると体を起こし周りをみると自分の体に点滴やら医療用のチューブなどが繋がっているのを見る

(まさか気を失っている間に“ナニカサレタヨウダ”ってことになったのか!?)

などと考えていると見知らぬ男が入ってきた

「どうやらやっと目が覚めたらしいな」

と聞き覚えのある声

「あんたはまさかあの新型ACに乗っていた人か？」

(もし、そうならこいつの名は

「そうだ、私の名は

“ベルリオース”

だ。おぼえておいてくれ」

「ああ、それよりどうして俺は助けられたんだ？」

「ふむ、興味がわいたと言ったほうがいいのか？」

「興味がわいただけで助けるのか？まあ、助けてくれたことには感謝する。それとあのとき最後になんか言ってたがどういう意味だ？」

「言葉のとおりだ。お前にもう一度チャンスをやる、自分が生きた証を立てることができる、すなわち、もう一度戦場に立つチャンスをやると言っただ。」

「あなたはなぜそこまでしてくれるんだ？それこそあなたが言っていたように他人からみて無意味な行為など言われんじゃないのか？」

「そうかもしれないな。まあ個人的にだが、よい戦士だと思っただ、見てみたくなっただのさ」

なにをとは言わなかったがそれはレイジもなんとなく“それ”を理解したのだ

「そうか、そういうえば外の状況はどうなっているんだ？」

「ああ、それなら」それならすでに企業側が圧倒的な勝利を収めて終わった」

とベルリオーズの言葉を扉から入ってきた女性がさえぎり、口にした。するとレイジは

「あの後、たった一日でか！？」

(いくらネクストが圧倒的に優れているといえ一日ですべてを潰したのか!?)

と驚愕の表情をし聞いてくると

「一日？なにを言ってるんだ？すでに一週間と数日はたっているぞ。」

と呆れたように答える女性

「俺は一週間以上も眠ってたのか!？」

とまたも驚愕の表情で聞いてくるレイジ。それを聞くと女性は

「まったくいちいちうるさい奴だ、いいかよく聞け、お前は私たちと戦った後なぜか知らんがそこにいるベルリオーズに助けてもらいこの療養施設に運ばれて、お前が眠っている間に企業側が圧倒的な勝利を収めて戦争は終わった。そして今日お前が目を覚ましたというわけだ。まったくなんでこんな奴を助けたんだ・・・」

と呆れたように肩をすくめて言う女性の言葉に対してベルリオーズは「よい戦士だと思っただ、興味がわいたんだ。そういう君もまっ

たく興味がないわけではないだろう?」

そう言われると女性は「ふん」と言いそっぽを向いてしまった

「そういえば彼女の名を言ってなかったな、彼女は「アンジェだ」・

・それとまだ、お前の名前を聞いていなかったな」

「ああ、言うのを忘れていてすまない、俺の名はレイジだ。もう一度言わせて貰うが助けてくれたこと、感謝する」

と言うとレイジは軽く頭を下げた

「なに、あまり気にするな。そしてさっきお前にチャンスをやると言ったことについてだが、AMSを移植してもらうがいいな?」

と聞くとレイジは

「どのみちそうでもしなきゃこの先、戦場では生きていけないんだろう? 移植するなら今からでも俺はかまわん」

と笑って返した

「理解が早くて助かる。ならば私についてきてくれ」

と言うとベルリオースが部屋を出て行き、レイジはそのあとについていった

あれから俺はAMS移植手術をして数ヶ月後、はれてリンクスとなっていた

そしてレイジは助けてもらった恩を返すために2年程レイレナー社のリンクスとして動くことになった

因みにレイジのAMS適正は下の上、良く言えば中の下という微妙なものである

(どうやら神様は俺に厳しいらしいな・・・ん?でも確か、AC4の主人公のAMS適正は最悪だったよな、ならうじうじ文句は言ってられないか)

と思い今日もまたシュミレーターでネクストを動かし、少し休憩している

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」

とアンジエが言ってきたのだ

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しくらいましにならなかつたら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな と自嘲気味に返した

「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

「そうだな、よろしく頼むよ」

そう言い再びシュミレーターに乗り込んだ

アンジエ side

彼女は今日、珍しく、数ヶ月前に新しくリンクスになったレイジのシュミレーターの成績を見ている

正直、彼は彼女が思っているよりも成長の度合いが早かった。

(あいつのAMS適正は下の上であり低いほうだったな、なのにこれだけの成長速度・・・いや、むしろ速すぎるぐらいか)

と思っているとレイジがシュミレーターからでてきて近くのいすに座った

(ふむ、試してみるか・・・)

そう思い彼が座っているほうに歩いていき

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」

と言うとレイジは

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しくらいましにならなかつたら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな と付け加えて自嘲気味に返してきた
「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

と彼女はシュミレーターに指をさしながらレイジに言う

「そうだな、よろしく頼むよ」

と言い彼は再びシュミレーターのほうに歩き出し乗り込んだ。それを見て彼女は

(ふっ、これまでの力、試させる手もらうぞ)

と思いきやもう一台のシュミレーターのほうに歩き始めた

side out

シュミレーター内の仮想空間の戦場

そこにはアンジエが乗るネクスト・オルレアとレイジが乗るネクスト・アノーニモがいる

オレルアの武装は左腕武装に01 - HITMAN 右背武装にSULTAN 肩に09 - FLICKER そしてなによりも彼女の代名詞と言っているほどの特徴のある右腕武装“07 - MOONLIGHT”である彼女の振るう剣は誰よりも美しく、勇ましいものであり剣姫と言う名がふさわしく思えるものである

それに対してアノーニモの武装は右腕武装に03 - MOTORCOBRA 左腕武装に04 - MARVE 左背武装にTRESSOR
というなんとも特徴の無いアセンになっている

そして二人のコクピットに開始の合図がでる

すると先に仕掛けたのはアンジエの乗るオルレアである

真つ先に肩の09 - FLICKERを撃つと同時に07 - MOONLIGHTで切りかかってくる

レイジはとつさに左にQBでよけるが07 - MOONLIGHTが
少しかすりPAをこつそりと削られる

そしてレイジはすかさずQBを使い多少距離をとるとQTで体勢を

立て直し左手の04 - MARVEをまだこちらに向ききっていない
アンジエに対して（もらった！）そう思い撃つ

しかしその行動を予めよんでいたかのようにQBで難なく避けたのだ
だがレイジもすぐさまにQBを使い、アンジエに張り付くように移
動し、右手の03 - MOTORCOBRAと左手の04 - MARV
Eを撃つ

それに対してアンジエも左手の01 - HITMANで撃ち返しなが
ら右手の07 - MOONLIGHTで切り裂こうとどんどん近づ
いてくる

レイジも相手の必殺の間合いに入らぬようにQBを使い均衡を保つ
ていた

しかしすぐさまその均衡をやぶったのはアンジエであった、アンジ
エはレイジの一瞬の隙をみて二段QBで一気に詰め寄り右手の07
- MOONLIGHTを振るった・・・が完全には切り裂いていな
かったレイジの突発的な二連QBでなんとか致命傷を避けたのだ

（ほう、今のは完全に決まったとおもったんだがな、にしてもなか
なか当ててくるじゃないか。なら次は強引にいかせてもらおう！）

そう思いながらアンジエは攻撃の手を休めずにいた。そしてレイジは
（危なかった、何とか致命傷にはならなかったがAPとPAをアーマーポイントごっ
そり持つてかれたな、にしてもさっきから攻撃がどんどん鋭くなっ
ているな・・・しかたないここは賭けに出るか）

と考え左手の武器を背中のTRESSORに切り替えアンジエに向か
いQBをすると

アンジエは好機と考えレイジに向かい07 - MOONLIGHTで
切りかかった

するとレイジは07 - MOONLIGHTがあたる直前でTRES
ORを撃つと同時に右にQBをしたが避けきれず07 - MOONL
IGHTがほぼ直撃してしまったのだ、するとアノーニモのAPは
0となりLOSEと言う文字がレイジのシュミレーターに浮かび上
がった

(やっぱりかー！)
と思いレイジはシュミレーターをでた

アンジエ side

(最後のあいつの一発もし直撃していたら私は負けていたかもな。
強いな・・・この先が楽しみだ)

と心の中で言うと彼女は自分でも気づかぬうちに笑っていた

(やはりベルリオーズの見込んだとおりかもな、よい戦士になりそ
うだ)

そう思いシュミレーターからでた

side out

アンジエがシュミレーターからでるとレイジは

「 やっぱりアンジエは強いな、勝てんな 」

「 ふっ、お前も予想より強くなつたじゃないか 」

と珍しくレイジのことを褒めたのだ

「 そうか、ありがとう。だが次は勝てるようになってやるぞ 」

「 よく言う、簡単には勝たせやしないさ 」

そう言うとアンジエはシュミレータールームを去っていく

そして扉をでると

「 君が褒めるなんて珍しいな。いいことでもあったのか？ 」

と聞くベルリオーズに対して

「 そうか？ まあ、あいつはお前の言ったとおり、よい戦士になるか
もな 」

そう言うと彼女は廊下を歩いていった
するとベルリオースは彼女の言葉に対して「ほう」と言うとシュミ
レータールームに入っていた

そしてこのあとレイジはリンクスNo.29をもらい
シュミレーターでベルリオースにぼこぼこにされるのであった

第3話（後書き）

相変わらずベルリオーズやアンジエはこんなじゃねえ！と思われ
ますよね・・・orz

あとリンクスNo.29ですが実際はAC4開始前に倒されている
らしいんですがそこら辺は少し独自設定的なものを入れさせてもら
いました

次も頑張って書きたいと思います

早く時間を進めたい・・・

第4話（前書き）

え、今回も無駄に長いし駄文です

いろいろとキャラが安定してなく読みづらと思います、すみません（汗）

そして、IS出てこないやん！と思われる方もいらっしゃると思いますが

ISの世界に転生するのはもう少し先になりました

一応今週中にはISの世界にいくつもりでありますのでどうか温かい目で見守ってくださいm（；）m

第4話

第4話

レイジ side

「リンクス、お疲れ様です。そちらに輸送用のトレーラーを回しますので、それに乗り帰還してください」
「と言いオペレーターからの通信が切れるとPAをきり、肩の力を抜くと今までのことを少し思い出していた」

昔は戦場なんてものはアニメや漫画、ゲームでしかありえないと思っ
ていったのに自分が今この場にいること馴染んできているのが非
常に不思議に感じる。今でも夢を見ているんじゃないかと思うぐら
いだ、最初のミッションであの地獄絵図を見たときガタガタ震えて
嘔吐をしてしまったのに今ではその地獄絵図の状態で敵の兵士
などが命乞いをしても躊躇わずに引き金を引けるほどまでに自身の
心は変わってしまったていると考えると複雑な気持ちになる。

アニメや漫画、ゲームの戦争の殆どは主人公達がいてその主人公達
と敵対するものがほぼ必ずと言っていいほど世界を混乱に陥れるた
めにだの言い主人公達のほうに必ず大義名分があるようになってお
り、しかも事情があったり、悪に利用されて戦っている人達や事情
を知った主人公達はその人達を殺さないで事情を解決したり悪を倒
してハッピーエンドとなるようになってる。

だが実際の戦場と言うものはそんなものではない。戦うものにはそ
れぞれの思惑があり片方が絶対的な悪というのは存在しないのであ

る。誰かが正義と思っていることは他の誰かからみれば悪になるかもしれないのだ。そして戦場^{いくさ}では一瞬でも引き金を引くことを躊躇えばその先に待つのは“死”というものだ。例え相手が家族を人質にとられて戦うしかないとしてもだ。そういう悲劇的な相手に対しても命を奪う非常さがなければ生きていくことは難しいのだ。

そう考えている間に遠くに輸送用のトレーラーが見えてきてレイジは考えることをやめて帰還の準備をした。

side out

そしてレイジは輸送用トレーラーで近くのコロニーに帰ってきて町を歩いていると大きな荷物を必死に持っている少女がいた、見ていると今にも転びそうでも危なっかしい様子である。

(ふむ、手伝ってやるべきか？だがいきなり見ず知らずの他人が手助けしようとしても、不審者にしか見られないからなあ)

そう考えていると少女がとうとう転んでしまい中にあるものをばら撒けてしまい近くにいた軍隊のような服装をした男達3人ほどの集団に当たってしまったのだ。

すると少女は

「ご、ごめんなさい！」

と慌てて誤る。しかし男は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちゃったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と因縁をつけてきたのだ。だが少女は必死に謝ることしかできない

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！
ともう一度謝るが

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」
と、さらに怒鳴りつける

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけ許
してもらえらと思ってるのか？」

と他の男が言いそれに続きさっきの男が

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今
すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

そうは言っても子供が10万などという大金を持っているはずがな
く払えるはずがないのだ。しかし男達は無理に要求してくる

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに催促してくる

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持ってないです！！」
なみだ目になりながらも必死に訴えてる少女。

「へえ〜」

と言いながらその少女をなめまわすように見ると

「じゃあ悪い子にはちよつと、お話しないとね」

と言うと強引に少女の手を引き路地裏の暗いほうへ連れて行くこと
とする。少女は助けを周りに求めるが通行人は見てみぬふりである

まあ軍人みたいな相手だと自分の身がかわいくて誰も助けることは
しないだろう

（なんつうか、アニメや漫画でありそうな光景を目の当たりにする
とは思わなかったが、まあ俺も流石に子供を見てみぬふりをするほ
ど腐っちゃいないからな、全く面倒なことになった・・・）
そう言っていると男達がいるほうへ歩いていった

今日は、おつかいに来ました。そして今日のおつかいはいつもより荷物がいっぱいでも大変です。けどほかの子のみんなのためにいっしょうけんめい運んでいます。するとつまづいてしまい途中で転んでしまいました、やっぱり一人で来ないでお姉ちゃんに手伝ってもらえばよかったです。少し後悔しました。

わたしは急いで散らばった荷物を拾おうとしました、すると男の人たちがこちらをにらんでいます。わたしはおそろおそろ男の人たちを見ましたすると荷物の中にあつたジャムが男の人たちの中の一歩背が高い人の靴にかかってしまっているのを見てあわてて

「う、ごめんなさい！」

と急いで謝ります、ですが男の人は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちまったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と怒鳴られてしまいました。わたしは必死に謝ります

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！」

ですが男の人は

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

とさらに怒鳴りつけてきます。すると

「俺はこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけ許してもらええると思ってるのか？」

と二番目に背が高い男の人が言ってきました。どうしよう、偉い人なのにと必死に考えてると

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

とさっきの男の人から弁償をしろと言われます。そんなこと言われなくてもそんな大金は持っています。ですが男の人は

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに言ってきました。ですがわたしは孤児でたとえ孤児院に帰ってもらってくることもななてできません

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持ってないです！！」
と、わたしは泣きそうになるのを必死にこらえ言いましたすると男の人は

「へえ」

と言うと私のことを気持ち悪い目でじつと見てきます。すると

「じゃあ悪い子にはちよつと、お話ししないとね」

と言うとわたしの腕をつかみどこかに連れて行くこうとしてきます。

わたしは必死に抵抗しましたが大人の力には勝てず、どんどん引きずられていきます。わたしは必死に周りの人に助けを求めますが周りの人たちはみんなこちらをチラッとみるとすぐにどこかに行ってしまう。わたしを助けてくれる人が誰もいないのだと、そう思うと今まで抵抗してた自分の力がゆるみもう駄目だなと思うと

「おい、下衆どもその手をさっさと放してとつと消えうせろ」

と黒い髪に黒いコートを羽織った男の人が言いました。するとわたしをつかんでいた男の人が

「なんだ、てめえ？お前は関係ないだろすつこんでろ！」

と怒鳴りました。すると黒い男の人は

「さっきの会話からするにたかが10万払えばいいのだろう？」

と言うと財布のなかからお金をわたしをつかんでいる男の人にむかって放り投げました。すると

「さっき払えなかったから利子がついて合計100万払えば許してやるよ！なんせ俺は偉いからなあ！」

と笑いながら無茶な要求をしてきました。すると黒い男の人が

「そうか、貴様は自分が偉いとか思ってるのか？やれやれ、とうとう脳みそまでもカビたか・・・」

と言うとわたしをつかんでいた男の人が急に黒い人に向かって殴りかかりました。わたしは思わず目をつぶってしまい。鈍い音がして、おそろおそろ目を開けると殴りかかった男の人がおなかの辺りを必死に押さえつけています。すると二番目に背の高い人が

「おい、てめえこの人はリンクスだぞ！てえだしてただですむと思っ
てんのか？」

わたしは、それを聞いて、とてもあせりました。リンクスという人は戦場で戦うとても強い人だと聞いたことがあります。そんな人
手を出して大丈夫なんでしょうか・・・

「ほう、そいつはリンクスカ、笑わせる。俺もリンクスだがそいつ
のような奴は見たことが無いんだがな、因みに俺のリンクスN.O.
は29なんだがな」

そう言うと二番目に背の高い人は顔を真っ青にして

「ほ、本物のリンクス」

と言うとうずくまってる男の人ともう一人の男の人と一緒に急いで遠くに行ってしまう。そして黒い人はこちらのほうを向くと近づいてきました。そして黒い人はわたしの頭に手をのせると

「大丈夫か？よく我慢したな」

と言いました。するとわたしは急に涙がでてきて泣いてしまいました。思わず黒い人に抱きつき声を上げて泣いてしまいました。すると黒い人は「もう怖くないから安心しろ」

と言いわたしをそつと抱きしめてくれました。黒い人は外見は真っ黒だけど絵本に出てくるような白馬の王子様のようにみえました。

s i d e o u t

あのあと少女は多少落ち着いたらしく泣き止んだ

「どうだ？もう大丈夫か？」

「は、はい。その、さっきは助けてありがとっございます！」

「なに、気にするな。そっぴゃお譲ちゃん、買い物してたみたいだが大丈夫か？」

「あ！どうしよう・・・」と言うと少女は俯き肩を沈める

「ふむ、買うものはまだ憶えてるか？」

突然の発言に少女はビツクリし

「ふえっ？」と素っ頓狂な声を発してしまった。そして

「はい、一応憶えています・・・」そう答えると

「そっか、これも何かの縁だしな。俺が代わりに買ってやるよ」

「で、でも助けてもらったうえにそこまでしてもらっつのは・・・」
と、ためらう少女

「だけどまた親御さんにお金をもらいにいくのも大変じゃないか？」

「あ、えっと、その、わたし孤児院に住んでいて、親がいないんです・・・」

と少女はだんだんと声を小さくしながら言っつのを聞くと

（やってしまった・・・あまりにもデリカシーの無いことをしてしまった・・・）

そう思い、レイジはどうにかしようと考え

「じゃあ、俺が君の住んでいる孤児院にお金を寄付するということでもいいね」と言っつが

「で、でもそれは、」とまだ言おうとするのに対して少女の頬を軽く引っ張り言葉をさえぎると

「まあ、いきなりあつた見ず知らずの人を信用しろと言っつのはなんだが、もうちよつと年上の人を頼っつていいんじゃないか？」

と優しく語り掛けると少女は小さく　こくんと頷くとレイジは頬から手を放し

「やはり、子供は素直が一番だ」と言い笑つた。すると少女は手に軽く力をいれ

「あ、あの！わたしは、リ、リリウムといます！お、お兄さんの名前を教えてください！」と力強く聞いてきた

「そっぴゃ、言っつてなかつたな。俺はレイジ・クゼだ、よろしくな」

そう言うつと席を立ちリリウムという少女と買い物をしにでかけた

そして買い物途中

「そういえば、レイジさん、お金は大丈夫なんですか？」

「ああ、全然問題ないな。リンクスは高給取りだからな」

「リンクスですか、その、怖くないんですか？戦うことが・・・」

「怖いといえば怖いかな・・・けど、もう慣れてきてしまったかな

？それに、もうこれしか生き方が無いからな」

「で、でも他のお仕事だって頑張ればみつけれられるんじゃない」

「まあ、できないことも無いだろうが、戦うことしかしてきてないからな、他の仕事につくのは難しいだろうな」

(レイジさん、なんかとても寂しそうな目をしてる)とリリウムが思っている

「ほら、こんなくらい話はやめよう！子供には関係ない話だ。」

と言いいりりウムの頭をわしゃわしゃとなで「ふむ、綺麗な髪の毛しているな」と言う

「孤児院のお姉ちゃんがいつも丁寧にとかしたりしてくれるんです

！」と嬉しげに話す。するとリリウムはふと足を止めとある商品棚に置いてある百合の花の髪留めを見ていた。それを見てレイジは

「どうした、それが欲しいのか？」と聞くと

「い、いや、とても、綺麗だなと思って」

「ん？欲しくないのか？」

「そ、それは・・・ほ、欲しいですけど・・・」と「じよじよ」と答えるリリウム

「よし、俺からのプレゼントだ、買ってやる」

「い、いえ大丈夫です！そこまでしてもらうのは」といいつつやはり欲しそうに少し目を輝かせている

「遠慮するな、リリウムも女の子だ小さいころから髪留めの一つや二つみにつけないと将来もてないぞ」

といい髪留めを買いリリウムに渡すと、とても満面の笑みだった。

そして残りの買い物も無事に終わりリリウムを孤児院に送っていくと去り際に「縁があつたらまた会おう」と言いレイジも帰ることにした

そしてそれから数ヶ月後レイレナード社にレイジは来ていた

（ベルリオーズと呼ばれたが、どうしたんだ？二年間だけといったがそのあとも一応、レイレナードのリンクスとしているからな・・・）

と考えているとレイジが待っていた部屋の扉が開きベルリオーズが入ってきた、すると・・・

「世界を私たちとともに変えないか？」

第4話（後書き）

今回もびみようでした・・・

そしてリリウム登場させてみましたが、正直、無くてもいいんじゃないかね？って感じですが作者があまりにもリリウムたんと、きゃっきやつ、うふふつて感じのを書きたいがため頭の中の妄想を垂れ流しました（ ……

そして次から一気に時間を進めていきどうにか今週中にはISの世界にいけるよう努力いたしますのでよろしくお願いしますm（

— ;) m

第5話（前書き）

え、いつの間にか5000PVと10000ユニークを超えてました！

皆さん読んでいただき、本当にありがとうございます！

評価してくださったり感想を書いていただいた方にとっても感謝感激です。

自分は小説を初めて書く身なのでとても嬉しいです。

今回の話で時間をかなり進めました。

なので予定通り今週中にはISの世界に入ることができそうです。

そして後書きのほうにアンケートみたいなものをしておりますので是非ご協力をお願いします。

第5話

第5話

約三ヶ月前、G Aにコロニアアナトリアから傭兵が売り込まれた。そう、リンクス戦争へのカウントダウンの始まりだ。アナトリアの傭兵は次々と戦火をあげ、さらに、マグリブ解放戦線の出来事により瞬く間にその存在が知れ渡ったのだ。

そして約一週間前に、G Aグループ内である事件が発生することになる。G A Eが秘密裏にアクアビットと提携しG Aグループを離脱するという事件だ。そして、そのことがわかったG AグループはG A Eに対して、アナトリアの傭兵に粛清の意味を込めて“ハイダ工廠”で開発中の巨大兵器諸ともの破壊を要請したのだ。このことにより今まで水面下で対立していた企業間の争いが表面上に浮き出てきたのだ。

そして先ほど

「世界を私たちとともに変えないか？」

とのベルリオーズからの突然の申し出にレイジは驚きを隠せないでいた。

「なぜ・・・俺なんだ？」

「あれから、お前を見てきたが、私の予想通り、いやそれ以上によい戦士になっている。だからお前の力を借りたいと思ったのだ。」

そう言うベルリオーズに対してレイジは

「それは買いかぶりすぎだ、ベルリオーズ、俺なんかよりいい戦士は他にいるだろう？俺はあなたの言うような、よい戦士でもなんでもないただのリンクスさ、だからせつかくのお誘い悪いが、断らせ

てもらう・・・すまない。」

レイジは唇を噛み本当に申し訳なさそうにベルリオーズに告げる。
だがベルリオーズは

「そうか、やはりな。お前ならそう言うと思ってたぞ」

と言うベルリオーズの言葉を聞き

「なっ、あんたは俺が断ることわかっていたのか？」

「まあな、だが本当にお前のことはよい戦士だと思っているぞ。まあ、返事が変わることがあれば私に連絡してくれ」

ベルリオーズはそう言い静かに笑うと部屋を出て行った

するとレイジは「本当にすまない・・・だが、あんたの“答え”は俺がしつかりとみとめてやる」

と誰もいない部屋で言った

ベルリオーズ side

やはりレイジは、自身のことを過小評価しすぎだな、己を過小評価しすぎると自滅してしまうからな。だが私の思った通りだな。まあ、あいつが加わらないことは残念に思えるが。たとえあいつがいなくても私たちが世界を変えてみせる。

ふっ、それにしても私の“答え”を見届けるか、やはりよい戦士だ。

side out

そしてリンクス戦争は、次第に拡大していった。そして数カ月後、レイレナード本社はアナトリアの傭兵により壊滅し、アクアビット社はジョシユア・オブライエンの襲撃により壊滅。こうして主戦力たる二社が壊滅に陥りインテリオルグループは停戦を提議し、リン

クス戦争は幕を閉じたのだ。しかしこの戦争により企業はかつてないほどに消耗し、無秩序に地上のコジマ汚染はいつきに拡大し、多くのコロニーが消滅した。

それにより、人々は汚染された地上を捨て、人類の過半数は清浄な空でクレイドルと呼ばれる巨大プラットフォームで生活をするようになった。

一方で国家解体戦争で企業が支配体制を確立した原動力アーマド・コア“ネクスト”と、その搭乗者“リンクス”その圧倒的な力の個体依存性に危機感を抱いた企業により、企業機構“カラード”管下の傭兵として地上に残されることとなる。

今や、企業軍の主力はアームズ・フォートであり、かつて戦場を支配したネクストたちは、この薄汚れた地上で延々と続けられる経済戦争の尖兵と成り果てていたのだ。

そして、リンクス戦争が終結してから約二年後

あの後レイレナードの多くの者達がオーメルサイエンス社に取り込まれていき、レイジもその中の一人であった……

「リンクス、実験を開始します」と通信がはいり

「了解」そう短く応えたとレイジは、ヴァンガード・オーバード・ブーストVOBがネクストにちゃんと接続されているかを確認しOBのスイッチを入れるすると次第に加速していきある程度加速するとVOBが点火しいつきに超加速をする。

レイジは、超加速によるGに耐えながらVOBの数値を確認していく、すると突然コクピットから警告音が鳴り響く。それはVOBに異常が発生しているという警告音だった。

(やはりな……)

とレイジは冷静に思う。それもそのはずだ。

レイジはもとはレイレナードの出身、リンクス戦争に敗退しオーメルに取り込まれたのはいいが、オーメルから見れば自分達がレイレナードを潰したようなものだ、もしかしたら復讐されるかもしれない。だがレイジは今までオーメルの新兵器の実験などになんもなく普通に受けていた。そう、別にレイジは復讐しようだのなんだのは全く思っていない、ただ実験の依頼が来たからそれをこなすというにしか考えていなかった。だが逆に、なにもしなすぎたのがオーメルから見れば不安だったのだ、以前はベルリオーズなどと一緒にいることが多かったので、実は何か企んでるのではと思い、事故を装いレイジを抹殺することに決めたのだ。

（俺は、こんなところで死ぬのか。今までの行いからみれば、まあ、当然か・・・）

と頭で自身の死を思っても本能は生きようと必死にVOBのパージをしようとしている。考えていることは全く別の行動をとる体に対して思わず笑ってしまう。

（ふっ、そうだったな・・・俺はどんなに醜くても生きようとすると奴だったな。なら足掻いてみるか）

そう思いどうにかVOBをはずそうと必死に操作する。やっとの思いでVOBをはずすことに成功したがその直後、VOBが爆発を起こしその爆発に巻き込まれる。するとレイジの乗るネクストはボロボロになり落下する。そして中のレイジも爆発の衝撃が凄まじくそのダメージを受けていた

「がはっ！ははっ、やっぱりこうなる運命なのかね・・・まったく、ついて、ない、な・・・」

吐血し、そう言うとレイジは意識を手放した

とある扇動家 side

私は今日、とある企業の実験場に来ている。

(やはりな、彼のことを事故を装い抹殺しにかかったか。ふむ、企業としては正しい判断だな。企業の人間の9割は彼が死んだと思っ
ているだろう。だが彼はおそらくだが生きているだろう。まあ、こ
ちらには都合がいい。さて、あの人がよい戦士と認めた人物だ、接
触を試みるか・・・)

そう思うと、とある扇動家は移動し始めた・・・

side out

レイジはふと目が覚めると目に映るのは白い天井である

「知らない天井だ・・・」

(あれ?なんかこんな状況前にも経験が・・・)

そう思っているときドアが開き、そちらのほうに顔を向けると一人の
青年が立っていた

「どうやら目が覚めたみたいだな」

「お前が助けたのか?」

(どっかで見たことある顔だな?どこだったかな・・・そしてど
となく雰囲気があいつににているしな、こいつもしかして・・・)

「ああ、そのとおりだ。まず名前を伺ってもいいか?」

「名はレイジだ、お前の名は?」

「私の名は“マクシミリアン・テルミドール”だ」

「お前、もしかして昔、何回かベルリオーズと一緒にいたことある奴だろ？」

「なんだ知っていたのか」

（やはりな、レイレナード時代にたまにベルリオーズと一緒にいるところを見たことがあるしな）

「いや、思い出しただけだ。で、わざわざ助けたからには何か用があるんだろ？」

「まあ、用はあるが、まず先に話をしてみたくてな」

「話？俺なんかにか？」

「ああ、あの人が高く評価していたから気になってな」

「あいつは俺のことを高く評価していたが、実際そんなたいそうな人間じゃないさ」

（ふむ、聞いたとおり自身のことを過小評価しすぎているな）

「まあ、絶対にありえないが、俺が加わって戦況が変化するほどのものだったら、俺は、あいつの誘いを断り、見殺しをしたようなもんなんだぞ？」

「戦況が変わるかはわからないとして、見殺しにたと言うのは少し違うのではないか？あの人から聞いたぞ、あなたが断ったのを聞いて部屋をでたあと“答え”を見届けると言っていたらしいじゃないか。確かに他の人間からすれば見殺しにしたのと同じになるだろうだが少なくとも私は、そうは思わない」

レイジは今回の実験も自分が事故に装い殺されるであろうと、わかっている。でもそれは自身の贖罪だと思えば受け入れようとしていた。もしあのときベルリオーズの手をとっていたら、ベルリオーズやアンジエ、友と呼べる者が死なずに違う未来が訪れたかもしれない。だが自身はそれを拒んでしまった。そして友と呼べる者達が死に、気づいたときには遅かった。“答え”を見届けると言っても他人から見ればしょせんは自己満足からでた言葉なのである。だが目の前の

男はそのことも理解したうえでレイジの行動を否定せずにいてくれた。もしかしたら利用するために言ってるのかもしれない。だが、そのことがレイジにとってどこか救われるような気がしたのであった。するとレイジは「ありがとう」と静かに呟いた

「感謝される覚えはないんだがな、受け取っておこう。」

(ベルリオース、やはり彼は、あなたの見込んだとおりかもしれない)

「ふむ、話はこれぐらいにして。本題に入っただいいいか？」

「ああ、かまわない」

「まず私たちがやるうとしてしていることはクレイドルの前提を覆す明確な反逆行為だそれを理解したうえで聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめています。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ。

それをよしとしないのであれば、是非、私たちと共に世界を変えな
いか？」

「ふつ、いいだろう。こんな奴でよければ、仲間になる。」

「そういう不適に笑ってみせる」

「じゃあ俺はこれからどうすればいいんだ？」

「そのことだが、もう一度、カレードに特定の企業に深く関わらないリンクス、つまり独立傭兵として加わり行動してもらおうがいいか？」

「かまわないが、大丈夫なのか？俺は一度、殺されそうになった人間だぞ？そんなやつがまた表舞台にたつたら面倒なことになるんじゃない？」

「やないか？」

「大丈夫だ。そのことも折り込み済みで君にはもう一度、表舞台に立ってもらおう。まあ、死んだことになってるから名前などは変えてもらうことになるかな」

「わかった」

「では、新たな名前を決めてくれ。そうすれば私のほうで手をまわしておこう」

（名前か・・・ふむ、少し皮肉をいれてみようか、ならば・・・）
「きめたぞ、新たな名は“ジョン・ドウ”だネクストのほうは“ネームレス・ワン”で頼む」

「“ジョン・ドウ”と“ネームレス・ワン”か・・・ふっ、ずいぶんという意味ありげな名前だな」

「そうだろう？では、これから俺のことはジョン・ドウ、略してジャックとよんでくれ」

「そうか、よろしく頼む。ジャック」

そして、この日からレイジは新たな名、ジョン・ドウとなりORCA旅団に加わったのだ

第5話（後書き）

一応、この後は首輪付きは首輪付きで出します

そしてアンケートみたいなのですが、ISの世界に転生させる人で主人公とリリウムを入れる予定でいます

その他に首輪付きも入れようかと思っているんですが

入れてもありじゃないか？と思われる方は 1 で

首輪付きを入れるなんて絶対に許さない！みたいな方は 2 で

感想の一言のほうにお願いします。

締め切りは一応土曜の昼の12時までとしますのでご協力お願いします。
m (| | ;) m

第6話（前書き）

アンケートにご協力の方本当にありがとうございます。
アンケートのほうは、明日の昼の12時までとなっておりますので
ぜひ他の方もご協力おねがいします。

そして今回も時間をそれなりにすすめた感じがします。
なので結構無理やりな点がいくつかあると思いますがそこは見てみ
ぬふりをお願いします（汗）

第6話

第6話

レイジがジョン・ドウと名乗りORCAに入ってから約2年がたつ

新人リンクス side

俺は今、企業連からのラインアーク襲撃の依頼を受けた。

力をちらつかせた交渉は、我々の本意ではない、ねえ〜うん、絶対嘘だな。でもまあこれをやらなきゃカラードに登録されないだろうしな。

「おい、ミッション開始だ。下らんことを考えてないでさっさと行け。」

「了解」

いま通信で厳しいことを言ってきたこのバブ「貴様、ミッションが終わった」ゲフンゲフン！この綺麗なお姉さんは、俺のオペレーターをしてくれてるセレン・ヘイズだ。

俺は約一年前に拾われてから、独立傭兵のリンクスとなるべく鍛えられてきた。

そして今回、カラードに正式に登録するために企業連のこの依頼をこなすわけだ。

ちなみに今、俺が乗っているネクストは旧レイレナードの03-A ALIYAHをベースにしたのをストレイドという名でセレンさんが用意してくれた。

どうやって手に入れたのか気になり一度、聞いてみたんだが…

「なに、ちょっと話をしたら譲ってくれたぞ。」

とかなんとか言っていた。しかも話し相手は顔を真っ青にしてたら

しいとのことだ、恐ろしい…

「企業のネクストだと？」

「畜生、こんなときに限って！」

（さて、さつさと終わらせるか）

そう思うと次々と守備部隊をに倒していく

「目標、残り約半数」とセレンから通信が入る

「クソツ、効いているのか？」

「プライバル・アーマーだ、まずはプライバル・アーマーを減衰させるんだ！」

そう言いながら必死に抵抗してくる相手をさらに倒していく

「目標、残りわずかだ」とまた通信が入る

「通常兵器では太刀打ちできん！」

「ノーマルはまだなのか！ノーマルは！」

相手の言葉を気にせずに残りの敵を排除していく、最後の敵を排除したかと思うと

「敵、増援を確認。ノーマル部隊だ、油断だけはするなよ」と通信が入った

（めんどくさ！さつさと終わらせよう）

そう思い、増援できたノーマル部隊を殲滅していき。すべて倒すと

「よくやったな、ほぼ完璧だ…とは言え、あまり調子付くなよ。敵が弱すぎたのだからな。」

とミッション終了の通信が入った

（やっと終わったか…あれ？でもこのまま戻ってもさっきのことで俺、セレンさんに殺されるんじゃない？でも、ミッションはほぼ完璧だったから見逃してくれるかな…無理だな、あきらめよう。）
（そう思い帰還を始めるのであった。）

side out

そして、ラインアーク襲撃のあとカロードに新たなリンクスが登録される。そう…このあと次第にカロード全体を騒がせることになる後の首輪付きである。

そしてラインアーク襲撃から2ヶ月ほどたつころ、ジョン・ドウスピリット・オブ・マザーウィル
(レイジ)はカブラカン撃破の依頼を断り、SOMの撃破の依頼を受けることになっていた。

(オーメルからの依頼か、まあ俺は構わんが…メルツェルめ、何を考えている?)

そう思いながらもオーメル仲介人の説明を受ける

(VOBの使用か、また小細工して爆発されそうだな…まあ、いいか)

などと考えている間に仲介人の説明も終わっていた。

(それにしても、あの仲介人の話し方、イラツとするな…俺だけか?)

とくだらないことを考えながらも依頼を遂行するべく準備をしていた

そして数時間後、ミッション開始時間

「では、リンクス。ミッションを開始してください。」

「了解」そう言いレイジはOBを起動する。すると次第に加速していきVOBが点火し、いつきに超スピードになる。

(どうやらVOBに異常はないみたいだな)

そう思いながらも迫り来るSOMの砲撃をかわしながら彼我の距離をつめていく

「VOB使用時間、限界近いです。通常戦闘の準備をお願いします。」

「そう通信がはいり、少しして

「VOB使用限界です。パージします。では御武運を」

「そう言い通信が一旦、切れると同時に

「どりゃああああああ」

と場違いな声が出たほうを見ると、ギルドーザーが突っ込んできたのだ

「場をわきまえない解体家が、悪いがお前に構っている暇はないんでな」

「そう言うとレイジはOBをふかしSOMの懐に入り、次々に迫り来るミサイルをQBをうまく使いかわしていき右手の03-MOTORCOBRAと左手の051ANNRで発射口を潰していく

「ふむ、ミサイルの発射口はすべて潰したか、なら次はあの馬鹿でかい砲台か」

「そう呟いていると

「どすこおおおおおい」

とまたも場違いな声が出る

「しつこい奴だ、まあミサイルの発射口はすべて潰したからないだろう、相手になってやる」

「そう言い右背をEC-0300に左背をDEARBORN03に切り替えギルドーザーに対して撃ち、QBを使い死角へと回り込むと03-MOTORCOBRAと051ANNRでひたすらに撃ち続ける。」

「そしてギルドーザーは両手のGAN01-SS-WDを当てようと突っ込むが難なく回避され銃弾の雨を浴びせられさらにボロボロになる。」

「めんどくさくなってきたな…もう終わらせるか。」

「そう言うと両手の03-MOTORCOBRAと051ANNRを捨てて格納してあるレーザーブレードのEB-0600で死角

から確実にコアを切りつける。するとギルドーザーは
「やっぱりかああああ！」

と叫び声が聞こえると沈黙した。

「さて、予定より時間をかけてしまったな。さっさと砲台を壊しに行くか」

そう言い、砲台に近づき一閃、二閃と切り裂き、もう一つの砲台も同じように切り裂き破壊するとSOMが崩壊し始める

「総員、地上装備！総員退避！退避しろ！マザーウィルが崩壊するぞ！」

そうSOMの隊員が言うのを聞き、OBをふかし爆発に巻き込まれないように離脱する。そして安全圏まで離脱すると

「こちらネームレス・ワンだ、SOMを撃破した。」

「マザーウィルの撃破確認しました。速やかに帰還してください、お疲れ様です。」

そう聞くと通信を切り帰還する。

そしてほぼ同時刻、レイジが断ったもう一方のカブラカンを撃破するミッションは首輪付きがこなしていたのであった

カロードside

「あの無名のリンクスが、あのマザーウィルを…？」

「はい、間違いありません、ローディー様、カロードは情報の精度を確認しています」

「・・・」

「仮にもリンクス、本来そういうものだろう」

「だといいがな…それよりアルテリア襲撃犯はどうなっている？堂々とクレイドルの要諦を狙われ、すべて不明、全く打つ手無しなど、管理者の存在意義が問われるだろう」

「その通りだ、ルールを守れないのであれば、静かに退場してもらう他はない。それがラインアークであれ…レイレナードあたりの亡霊であれ…」

side out

リリウムside

私は今回のマザーウィルが撃破されたことに興味を持っていました。いえ、マザーウィルが撃破されたほうではなくて、撃破したリンクスについて興味をもっていました。もしかしたらあの人ではないかと、そしてマザーウィルを撃破したリンクスは、あの人が死んだと言われてから数日の内に急にカレードに正式に登録をされ、その内容はあまりにも自然すぎるもので、私は、あの人は実は生きているのではないかと…そして今回のことでよりいっそう真実に近づけたと思いました。

side out

ORCA side

「カブラカンをおとすか。どうして、なかなかいるものだな」

「ああ…モノによつては、首輪をはずそうと思う」

「ハリのように、か？それもいいがなメルツェル」

「案ずるなよ、ジュリアス」

「間もなく、マクシミリアン・テルミドールは我々に戻る…それで準備は終わりだ」

side out

カブラカン撃破から約1ヶ月後、首輪付きのもとへ企業連からホワイト・グリント撃破の依頼が来て首輪付きはそれを受託する。そしてレイジの方にはラインアークから依頼が来て、それを受託した。

「これで、後は計画通りやればいいのか…」
そう言い、依頼の為に準備を始めるのであった

そしてラインアーク防衛戦が始まる。企業連側は、ランク1のステイシスと首輪付きのストレイド2機に対して、ラインアーク側はランク9のホワイト・グリントとネームレス・ワンの2機で応戦する。戦闘は最初から激しかった、そして中盤に差し掛かった頃、最初に落ちたのはネームレス・ワンである。ステイシスのレーザーバズーカER-0705により戦闘不能となり海中に没する。そして次にステイシスは距離をとるためか、OBを使い移動し、それをホワイト・グリント逃がさんとはかり追う。結果ホワイト・グリントの撃った弾丸がステイシスのメインブースターに直撃し水没し、1対1になり、ホワイト・グリントもすでに疲弊しきっているにもかかわらず2機の戦いは凄まじかった、そして最後に勝ったのはストレイドであった。

ラインアークの最も重要な戦力、ホワイト・グリントは失われ、オツダルヴァとジョン・ドウも水中に没する。こうしてラインアーク

クでの戦闘はただ一人のリンクスだけが生き残って終わる。そしてクレイドルは、安定期に入った。誰もがそう考え、企業は来るべき経済戦争の激化に備えはじめる。だが、まさにこのとき、濁り水はゆっくりと流れはじめていたのだ。

ORCA side

「ホワイト・グリントは戦闘不能。ステイシスとネームレス・ワンは海中に没し、オツツダルヴァとジョン・ドウは生死不明、か」

「これはちょっとな」

「ああ、やりすぎだな、メルツエル」

「よく言う、誰が手間を掛けさせたのか」

「すまん、完璧主義者なんだ」

「…まあいい、これでやっと元に戻ったんだ。時期もある、クローズ・プランを開始しよう」

「そのことだが…少しだけ待てないか？」

「パートナー、か」

「ああ、強いだけの阿呆でもないようだ、試す価値ぐらいはあるだろう。」

「…状況は既に手遅れだが、同時に緩慢だ。今更焦ることもあるまいよ」

（さて、あの首輪付きは俺たちのところに来るかね…？）

side out

そして数日後、首輪付きのもとへとある依頼が届いたのであった…

第6話（後書き）

このペースで行くと明日にはA C f aの世界が終わり、I Sの世界に突入することができそうです。

なので一生懸命頑張るので、よろしくお願いします。

第7話（前書き）

更新が遅くなってまことに申し訳ありません

リアルの用事がかなり伸びて家に帰ってくるのが遅くなり更新が遅りました。

すいませんm(;)m

いろいろ独自設定みたいなものを加えたルートとなっております。

そして、一応今回の話でACの世界は終わります。

そして無駄にながいですがどうぞご覧ください。

第7話

第7話

首輪付き side

首輪付きのもとへ、一件の依頼がくる。依頼人は“ORCA”そして依頼内容は

「初見となる。こちらマクシミリアン・テルミドールだ。

GAのアルテリア施設、ウルナに侵入しすべてのアルテリアを破壊してほしい。

この作戦は、クレイドルの前提を覆す、明確な反逆行為だ。それを理解した上、で私の言葉を聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ…それをよしとしないのであれば、私の依頼を受けてみないか？

勿論、報酬は払おう…期待して待っている。」

との内容のことであった。そして、首輪付きはこの依頼を受けることにした…

そしてアルテリア・ウルナ破壊ミッション、開始。

「ミッション開始、目標は遙か上だ、登っていくぞ…」

わかってるな？自分がやろうとしていることの意味が…」

「わかってるよ、セレンさん。今からやろうとしていることによつてどうなるかは…」

俺は、今まで他人から言われたままにしか行動しないでいたけど、今回は違う。

確かに扇動されたと言われればそれでおしまいかもしれないけど、

俺は今、自分自身で出した“答え”によってここにいてもりだよ」

「そうか…」

セレンはそう呟くと、そこで通信がいったん途切れた。

そしてストレイドは、最短ルートで上昇していき目標までたどり着くと、周りの防衛部隊を壊滅させ、目標を次々と破壊していく、そして最後の1つを

「これが、俺の出した“答え”だ」

そう言つと、いつもより重く感じる引き金を引いた。

そしてミッション終了後

「君の答えは、見せてもらった、ようこそORCA旅団へ」

と連絡が入り、このときをさかいに首輪付きは、ORCA旅団へ加わったのであった

そして首輪付きがアルテリア・ウルナを破壊してから約1週間後
レイジと首輪付き、二人にはほぼ同時刻に依頼がはいる

レイジ side

「さてクローズ・プランを開始する。ジャック（レイジ）、君にはアルテリア・カーパルスを首輪付きとともに襲撃してもらいたい。」

「首輪付きと一緒にか？別にかまわないが、あいつ一人でも充分だろ、保険だとしても後方で待機していればいいと思うんだがな」

「まだ、完全に彼の力を把握しきれないからな……」

「ふむ、そういうことにしておこう。それにしても、ずいぶんとあいつのことを気に入っているみたいだな」

「ふっ、まあな……」

「では、俺は行かせてもらおう」

「ああ、最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ、派手にいこう」

side out

首輪付き side

「マクシミリアン・テルミドルだ、クローズ・プランを開始。主要アルテリア施設に対し、ネクストによる同時攻撃をかける。

君のターゲットは、大規模アルテリア施設、カーパルスだ、防衛施設の要、ノブリス・オブリージュをジョン・ドウのファンタズマとともに撃破してくれ。

施設には多数の防衛部隊も展開している、ノブリスの到着前にこれを叩くことができれば、その後の戦闘が幾分か楽になるだろう。

最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ。諸君、派手にいこう」
(ジョン・ドウ？ラインアークのホワイト・グリント撃破のときのやつか：まさか生きてたのか？どちらにせよ今回は味方らしいから、まあいいか)

首輪付きはそう思うと、ミッションの準備をしにかかった

side out

アルテリア・カーパルス襲撃ミッション開始

「ミッション開始、カーパルスを制圧する。

ノブリス・オブリージュが戻る前に、可能な限り防衛設備を破壊しておけ、それだけ楽になるのだからな」

とセレンからの通信が入る

「お前が、噂の首輪付きか。今回のミッションをともにする、ジョン・ドウ、ファンタズマだ。よろしく頼む」

「ああ…なあ、あんたは」とレイジに質問をしようとする

「すまんが、聞きたいことがあるならこのミッションが終わった後にしてくれ」

とレイジの言葉にさえぎられる

そして二人は次々とカーパルスの防衛設備を破壊し、約2分ほどで全て壊滅させる、するとセレンから

「敵ネクスト反応、急速接近。くるぞ！本番だ。敵ネクスト、ノブリス・オブリージュを排除する」

と通信が入る

「ほう、意外と早かったじゃないか。いくぞ首輪付き、まあ見物するならするで構わんがな」

そう言いながらリーダーを確認するレイジ。すると

「空き巣とは、なんとも情けない…匪賊には、誇りもないのか？生き易いものだな、羨ましいよ」

と言いながら、ノブリス・オブリージュがOBで突っ込んでくると右手に持っているMR-R102を撃ってくる

「さあな…たとえあつたとしても貴様に教える気は無いがな」

レイジはそう応えながら右手の03-MOTORCOBRAと左手の051ANNRで応戦する

そして首輪付きは、右手の063ANNARと左手の01-HITM

ANでレイジにあたらないようにノブリスを横から撃っていく

「そうか、2対1でいどんでくるとは…さらに情けないな」

「ジェラルド・ジェンドリン、貴様は勘違いしているぞ。これは決闘ではなく戦争だ、戦争に2対1で卑怯などとは言ってられないんだよ。それなのに誇りだのなんだのと言ってたら無様に死ぬだけだ」

「なんだと…？」

「ふむ、いいだろう。貴様が望むように1対1で勝負をしてやろう。まあ、貴様の誇りなんぞ興味無いがな」

「その行動…後悔してもらおう」

「てことで、すまんな首輪付き」

「いや、構わない」

そういうと首輪付きは攻撃をやめ離れる。そして真っ先に動いたのがノブレスである

右手のMR-R102で弾幕を張りながら左背のEC-O307ABを確実に当ててこようとする。だがレイジはそれを、QBを使い難なくよけていき03-MOTORCOBRAと051ANNRで撃ち返し確実にノブリスのAPを削っていく。

「どうした？そんなものか…誇りだのなんだの言っついてその程度とはな、だったらそんなもの（誇り）、狗にでも喰わせておけばいい」

「貴様っ…!!」

ジェラルドは珍しく、怒気を含んだ声で言い、左背のEC-O307ABをパージし地面に落とすと、左手のEB-O305でレイジに切りかかる。

が、レイジはそれをあっさりと避け右背のEC-O300でノブリスのコアを確実に撃ち抜く。

「信じられん…ノブリス・オブリージュが、こうまで押さえられんとは…」

そう言い、ノブリス・オブリージュは沈黙した

「ネクスト、ノブリス・オブリージュの撃破を確認」

とセレンから通信が入る。

「身勝手な行為、すまなかつたな。首輪付き」

「気にするな、こっちは楽できたと思えばいいさ」

そう会話していると

「やはり敗れたな…ジェラルド・ジェンドリン。貴族の務めなど、大層な御託の割に…クククツ。まあ、俺が尻拭いをしてやるとするか」

と声がする。するとセレンが「増援か、なるほどな。」とどこか納得したように言い

「二機でかかればよいものを…敵ネクスト、トラセンドだ。これも排除する。」

別行動を後悔させてやれ」と続けて言った。

「了解。じゃあ、さっさと終わらせちまおう」

「了解した」

そう言うとう首輪付きとレイジはトラセンドに向かっていき銃弾の雨をひたすらに浴びせる。トラセンドは必死に振り切ろうとするが全く振り切ることができず一方的にやられた

「フツ…勝って、勝って、最後に負ける運命か…お前らも同じだ。」

それまで、精々浮かれてるがいい…」

素晴らしい残すとトラセンドも沈黙する

「ネクスト、トラセンドの撃破を確認。ミッション完了だ。…クローズ・プランのはじまりか」

と言い、首輪付きだけに

「後悔するなよ、お前の選択だからな」と通信を入れる

「わかってるよ、セレンさん」

こうしてアルテリア・カーパルス襲撃のミッションは完了した

7月、多くにとって突然に、それは起こった。

正体不明の、複数のネクスト機による、アルテリア施設の同時襲撃、その殆どは成功し、クレイドルは、拠って立つエネルギー基盤を大きく揺るがされた。

そして、ORCA旅団と、旅団長マクシミリアン・テルミドールの名で、ごく短い声明が、世界に発信される。

“ To Nobles Welcome to the Earth
h”

それは、すべての空に住む人々への、明確な宣戦であった。

企業は、安全な経済戦争を放り出し、狂気の反動勢力にたいすることを余儀なくされ、

人々は、覚束ない足元にはじめて気付いたかのように、それを恐怖するしかなかった。

ミッション終了後、首輪付きとレイジはとある部屋で話していた

「なあ、あんたは、ラインアークで俺と戦ったやつで間違いないよな？」

「その通りだ」

「なんで、ORCAに入ったんだ？俺みたいにテルミドールに誘われたのか？」

「そうだ、と言っても俺の場合は、ずいぶんと前に企業に殺されそうになってな、瀕死のところをあいっくに助けてもらっただけだな」

「企業に殺されそうになって、じゃあ企業に復讐のためにいるのか？」

「違うぞ。まず、俺は復讐なんてものは考えたことがない。俺がここにいるのは企業が支配するこの世界に未来はないと考えるのと、ある意味、贖罪のためだと言ってもいいな」

「贖罪？」

「そうだ、贖罪だ…自分の友を、見殺しにしたとも言えることをしてしまったからな」

「でも、戦場だったなら仕方ないんじゃない？」

「確かに、そう言えば楽かもな…だが、戦場だったからなと何かを理由にして自分の罪から逃れようとしてはいけない。たとえ自身の罪から目をそらしたところでその罪は消えないんだ。だからこそ自身の罪と向き合い生きてかなければいけない。少なくとも俺はそう思っている…お前も自身の罪から目をそむけないようにな」
そう言うとレイジは部屋を後にした

そして三日後、

レイジのもとへ衛星軌道掃射砲防衛の依頼がはいる

「衛星軌道掃射砲の存在が、企業側に漏れた」

「なるほど、企業連は全力で潰しにかかるだろうな。で、クローズ・プランの要諦である衛星軌道掃射砲を守ればいいんだらう？単独でか？それともパートナーをつけてくれるか？」

「話が早くて助かる、銀翁と共に守ってくれ。そしてすまないが、銀翁以外に追加の戦力を用意することはできない」

「そうか…ん？首輪付きはどうした？」

「彼には、オールドキングを粛清しにいつてもらおう」

「なるほど…やはりオールドキングは、クレイドルを落とそうとするか」

「なんだ、気づいていたのか？」

「まあな、じゃあ、さっそく準備をさせてもらおう。前のミッションで手に入れたものも試してみたいからな」

「そうか、では、頼む」

そして通信が終わるとレイジはネクストのある格納庫へ歩いていった

衛星軌道掃射砲防衛ミッション開始

「この作戦のパートナーは、お前さんか、期待させてもらうぞ。あと私は、アサルト・キャノンを使う、くれぐれも巻き込まれるなよ。君だと手、無事では住まんのかな」

「了解した。」

レイジはそう短く応えたとOBを使いAF・イクリプスの上に取り付き右手の03・MOTORCOBRAと左手の051ANNRをひたすらに撃つ。

そうすると、あっという間にイクリプスがボロボロになり撃破される。

「アンビエント、目標を確認しました。問題ありません、作戦を開始します」

と言いながら、攻撃してくるネクストを確認する。するとレイジは「っ！」

と、思わず驚きの声をあげようとしてしまう。それもそのはずかもしれない…なんせ、目の前にいるのは昔、自分が助け、髪飾りをプレゼントした少女。そう、リリウムなのである。

レイジはどうしようもなく叫びたかった。なぜ、なぜ、こんな所（戦場）にいるんだ！と、だがここで冷静さを失えば全てが終わってしまうと考え必死に冷静さを取り戻した。

（どうする？どうすれば殺さずにすむ？どうすれば…）

彼は今、自分の中の矛盾に酷く焦っていた。そう例えどんな相手だろうと戦場に生き残るために殺すという考えでいて、今回も心を非情にしてそうしようと思っても、なぜかそれができないのである。もしここで選択を間違えたら取り返しの付かないことになるかと直感的にわかっていた。

（今までさんざん自分に非情になれ。そう言ってきたのにな、笑わせるだが…たとえ矛盾で、身勝手な自己満足で他人から偽善者と罵られようといいさ、今回は俺のやりたいようにやるさ）

そう決断すると先ほどまでアンビエントの攻撃をほぼ避けるだけでいたレイジは03・MOTORCOBRAと051ANNRで応戦しはじめる。

レイジはアンビエントの死角に必死に回り込み腕か足の間接部とコアをあまり大破させないようにメインブラスターなどを攻撃していくのだが相手はランクはNo.2である。いくら政治的な理由でNo.2とされたからといって弱いわけではなくしつかりと強いのである。ただ倒すだけであつたら何の問題もないだろうが、今回は殺さないようにとしているのである。

そしてアンビエントとファンタズマが激しい攻防を繰り返していき消耗戦になると思われたが、突如均衡が崩れたのである。

遠距離からネオニダス（銀翁）のネクスト月輪の左腕のプラズマライフルFLUORITEが撃たれリリウムが慌ててそれを回避しようとし隙ができるレイジはその隙を見逃さず左手の051ANNRを捨てて格納されているレーザーブレードEB・0600でアンビエントの片足を確実に焼き切り、バランスを崩したところをすかさず03・MOTORCOBRAで追い討ちをかけ行動不能状態にする。「アンビエント、戦闘不能、作戦は失敗です。」

すみません、王大人。リリウムはご信頼に背きました」

そういつてると突如、弾丸が飛来し、その弾丸は、アサルトキャノンサイレント・アバランチを破壊するために撃った直後でありP

Aが回復しきつてない月輪のコアにあたる

「ぐっ！」

「遠距離射撃…まさかストリクス・クアドロか！銀翁、大丈夫か！」
「ほう、さすがに気づくか。よい勘をしている」

「なんとかな、にしても密かに狙撃とはな、実にあの男らしい」

そう言いながら月輪がストリクス・クアドロに近づいていき交戦を始める。すると王小龍は

「リリウム」と呼びかけ言葉を続ける

「貴様は私が貴様に信頼しているのだと思っっているが勘違いをするな、私は今まで一度も貴様を信頼だのとは思ったことが無い。それにしても役に立たない駒だったな。ネクスト一機すら落とせずにいるのだからな。まあ貴様の代わりなどいくらでもいるからなもう用は無い、消える」

そう言うとりリリウムは

「そん、な…」

と今にも消え入りそうな声ので喋る

そして王少龍は動けないアンビエントに対しコアに狙いを定め引き金を引いた

だが弾丸が到着する前にレイジのファンタズマが間に入り盾となる

「下種野郎が…」

レイジはそう言うつと両背のEC-O307ABをストリクス・クアドロに向けて撃つと相手の左腕を吹き飛ばす

そして立て続けに月輪がHLR01-CANOPUSを当てると

「ふむ、やはり私ではこの程度か」

そう言うつとストリクス・クアドロは撤退していく

「尻尾を巻いて逃げるがよいよ、王小龍。戦場に陰謀家は不似合いだ。

それにしても、どうやらわしもここまでのようだな」

「銀翁、すまない…」

「なに、気にするでない。もともと長くない命だ、なに、作戦は果

たせた悔いはない。君が気負うことではない。この後のことは頼んだぞ？」

「ああ、まかせろ」

「そうか、遂げるよメルツェル。」

そう言うと銀翁からは通信が一切返ってこなくなった

そしてレイジはアンビエントに近づきファンタズマを降りコクピットのハッチを外部のスイッチで強制的にあける。すると中にいたリウムはレイジのことを見ると

「あなたは…レイジ、さん？よかった、また、会うことが、できた…」

そう言うとリリウムは気を失う。するとレイジはリリウムを自分のネクストに乗せ帰還した。

そして衛星軌道掃射砲防衛の作戦の翌日

「作戦の翌日ですまないが、さっそくミッションの説明をさせてもらおう。」

ミッション内容はインテリオルIIオーメルの最新型AF・アンサラを撃破してくれ」

「あの、最新コジマ技術の塊か」

「ああ、他のAFと比べても、圧倒的な戦闘力を持っている」

「だが、それを制すれば、一気に最終段階、だろ？」

「その通りだ、そしてメルツェルの予想だと相手はこれにさらに追加の戦力、恐らくネクストあたりを入れてくると思っっているらしい」「アンサラーともにか？」

「ああ、どうやら使い捨てをするつもりようだ」

「なるほどな、いかにも企業連らしいな」

「確かにな、そしてこのミッションの開始は6時間後だ、頼んだ」
「わかった」

そう言いレイジは自分の部屋にいったん戻った

リリウムside

「ここは…」

リリウムは目を覚ますと目の前には白い天井がある。

そして上半身を起こし周りを見てみるとリリウムには見覚えが無い部屋だった。

そしてリリウムは、起こった出来事を思い出そうとしていった。

(そう、私は王大人に捨てられたのでしたね…でも最後に気を失う寸前にレイジさんが助けに来てくれたような気がします。たとえ夢だったとしてもまた会えて嬉しかったです)

そう思うと。リリウムは急に涙を流し始める。

すると、扉が開き部屋に誰かが入ってきた。そして

「どうした、泣いているのか？なにか怖い夢でもみたのか？」

そう言ってくる人を見ると、その人はレイジだった

side out

レイジはテルミドールからミッション内容を聞くとリリウムを寝かせている部屋にいき、そしてドアを開けるとリリウムは泣いていた
「どうした、泣いているのか？なにか怖い夢でもみたのか？」

そう言つとリリウムはこちらを向き

「レイジ、さん？」と言う

「ああ、久しぶりだな、リリウム」

レイジはそう言いリリウムの頭を撫でる。するとリリウムは「会いたかった、ずっと、ずっと会いたかったです…！」
そう言うとしりりウムはレイジに抱きつき涙を流す。そしてレイジは泣いている妹を落ち着かせるかのようにして頭を優しくそっと撫でるのであった。

そしてリリウムが落ち着くと、二人は今までのことを話していた。レイジはリンクス戦争のあと自分がどうなり、どうしてORCAに入ったのかを、そしてリリウムのほうもウォルコット家に迎え入れられてからんどを、そしてあつという間に時間がすぎ、ミッションの時間が迫る

「レイジさんは、だからORCAに入ったのですか…」

「ああ、他人からみたら笑える話だろ？」

「そんなことないです！少なくとも私はそうは思いません！」

リリウムはそう力強く言う

「そう言ってくれるか、ありがとう」

そう言い微笑みながらリリウムの頭を撫でるとリリウムは少しうつむき頬を赤らめる

するとpipipiと携帯端末から電子音がし、見てみるとミッション開始の2時間半前であることをアラームが知らせてくれた。

「悪いが、今からミッションなのでな私は行くとするか」

そう言い椅子から立つとしりりウムが袖をつかむ

「さっきも言ったが、ミッションには連れて行けないぞ」

「大丈夫です。だから考えました、私をオペレータとしてください
！」

「オペレータはいなくても大丈夫なんだがな…」

「いえ、今回のミッションはとても危険なんですよね？でしたらリリウムが引き受けます！」

「だが、オペレーターの知識は」と言おうとしたところをさえぎられ
「いえ、ウォルコット家の教育の中にオペレーターとしての教育も
あったので、完璧にすせてあります」と言う

それを聞きレイジは自分のこめかみを軽く押さえ考え込む。すると
リリウムが

「私は、不安なんです。もしかしたらレイジさんがまた急にどこか
遠くへ行ってしまふのではないかと…」そう静かに言う。それをレ
イジは見て

「わかった、よろしく頼む」

「はい！」とリリウムは力強く返事をした

そしてAF・アンサラー撃破ミッション開始

「ミッション開始です。AF・アンサラーを撃破してください」

「了解。さてあれをどうするか…」

「そうですね…もしかすると、あれほど巨大なものを浮かしている
ということは、無理をして浮かしているかもしれない。どこでも
構わないので外装を破壊していつてください。そうすれば何れもた
なくなり、崩壊するはずです」

「わかった、助かる」

そうレイジは、言うどアンサラーに近づいていき外装部分を左腕の
“07-MOONLIGHT”で切り落としていく。そう、この
“07-MOONLIGHT”は先日ミッションから帰還後に真改か
ら、ずいぶんと昔、アンジェが死ぬ前にレイジに渡すように伝えら
れてたらしく左腕の“07-MOONLIGHT”を受け取ったのだ
「まず一枚目」

そういいながら次の外装部分を破壊していく、すると

「作戦エリア全域に高濃度コジマ粒子確認！これではPAがやくにたちません、こちらだけPA無しと言うことになります。それにしてもこのあたりは閉鎖空間ではないはないんですよ！企業はこの地上をどうするつもりなんでしょうか…」

「さあな、それを考えるのは後にしよう」

そう言っているあいだも無数のミサイルがまた襲ってくる

（やはり、このミサイルの発射口から潰していくか）

そう考えるとレイジはミサイルの発射口を潰しにかかる。そして天辺の発射口を潰しにかかる

「中心に大規模コジマ収縮、離れてください！消し飛ばされてしまいます！」

とリリウムが焦りながら言うレイジは急いで退避し直撃はしなかったものの少しくらってしまふ。そこに追い討ちをかけるかのごとく無数のミサイルが来る。それをなんとかQBを使い避けようとするがいくつか当たってしまう。

「AP40%減少！」

その言葉を聞き必死に発射口を潰す。

（これでミサイルの発射口はすべて潰した、次だ！）

そう思い次々に外装を破壊していく

「アンサラー、そろそろ限界です。アンサラー落ちます、巻き込まれないでください」

そういいQBを使いその場を離れるレイジ

「アンサラーの大破を確認しました。…っ！そちらに高速で何か接近してきます！これは…プロトタイプネクスト！どうしてそこに！？」

（やはり、ORCAだけではなく企業側ももっていいいたか）

「おそらく企業のだろう、そいつも破壊する」

「無茶です！すでにAPが半分をきっています、撤退してください！」

「心配するなリリウム、俺を信じろ」

「わかりました…必ず、必ず帰ってきてください」

「ああ」

レイジはそう言うとプロトタイプネクスト、00 - ARETHAアレサに向かつていく

プロトタイプネクストはレイジの乗るファンタズマを確認すると右腕のガトリングでうってくる

それをなんとかかわしながら右手の03 - MOTORCOBRAで撃ちながらどうにか隙をついて左の07 - MOONLIGHTで切り刻むがプロトタイプネクストはまるで消えたかのような速さのQBを使われせいぜいかすらせることしかできない、そしてガトリングによりどんどんボロボロになるファンタズマ

（もう限界が近いか…だが確かやつは、コジマキャノンを使う前に動きを止めるはず、そこにかける！）

そう思い必死に避けるレイジ、そしてついにプロトタイプネクストは動きをとめコジマキャノンを使うとする。するとレイジはプロトタイプネクストに対して突っ込み左手の07 - MOONLIGHTで切りかかる、するとプロトタイプ・ネクストはコジマキャノンを発射する。だが直撃はせず、ファンタズマの右腕と右背のEC - 0307ABが吹き飛ぶ。だがレイジはそれでもとまらずに左手の07 - MOONLIGHTを振るうとプロトタイプネクストのコアを完璧に焼き切った。するとプロトタイプネクストはコジマ粒子を漏らしながら爆発していった。すると

「レイジさん！大丈夫ですか！？レイジさん！」

リリウムが泣きそうな声で通信をしてくる

「ああ、なんとか、終わ、った…そして、すま、ない

俺は、もう、駄目、みたい、だ…」

「そんなことつ、そんなこと言わないでください！…通信越しに必死に叫ぶリリウム」

「いや、いい、んだ、最後、に、お願い、が、あるん、だが」
「大丈夫、です。なんでも言ってください」と泣きながら答える
「俺、の、死を、気負、わないで、くれ、そして、つよく、生きて、くれ……」

（テルミドール、先に逝って待ってる、首輪付き、成し遂げるよ……
そして、ベルリオースにアンジェ、今、そっちに逝くよ……）

その言葉を最後にレイジからは一切、返答が返ってこなくなった……

第7話（後書き）

前回の話みたいに結構無理やりなところがありますがそこら辺はできればスルーの形でお願いいたします（汗）

なんはともあれこれでISの世界に飛び立つことになります。
そしてアンケートの結果ですが

首輪付きもISの世界に突っ込むことになりました

アンケートにご協力してくださった方本当にありがとうございます。

ぜひ、これからもよろしくお願いします。 m ((m

第8話（前書き）

はい、前回ACの世界で死んだので
今回からISの世界にきました。がまだIS本編にはなりません
本当に申し訳ない。

次からはだんだんとISに関わるようになっていきますので、
よろしく願います。

第8話

第8話 真・プロローグ的な

冷たい雨が降っているなか、とある少年が目を覚ます。

「ここは…」

そう言いあたりを見回すとどうやらどこかの路地裏みたいだ。

「なんで、こんなところに…俺は死んだんじゃないか？」

そうぼそりと呟くと、はっと気づいたかのように自分の体を見ると驚きの声が隠せなかった。

「なん、だと…？」

それも、そのはず。彼の体は5歳ぐらいの少年になっていた。

（あれか？コジマの力か？それともスタンドの能力か？もしかして某少年探偵コソンの黒ずくめのあの薬か？）

そう冗談まじりに思いながら自分の服装を確認する。

彼の服装は、ボロボロの長ズボンに、長袖か、そしてこのでかいマントのようなボロボロの布切れである。

そしてその服装から自分がどのような状況を推察してみることにした。

（おそらく、また別の世界に来てしまったのか？そしてあれか、この世界では親に捨てられたかなんかか？それとも誘拐事件などに巻き込まれたか？まあとりあえず人通りのあるとこにでてみるか）
そう思い、めんどくさそうに片手を首に軽く当てると手に違和感を感じ慌ててもう一度手で触り確認する、しかし触れば割るほどとも覚えのあるものだった。

「まさか、AMSか？鏡を使って見ないことにはなんともいえないが、おそらくそうだろうな」

そう愚痴りながらも人通りのあるほうへ歩いていき、路地裏をぬけ

ると目の前の光景に少し驚く。

「まさか、俺は戻ってこれたのか？」

そう、目の前には少し変わっているが自分はずいぶん前に、日常的に見ていた日本の光景であるからだ。

「あたりに所々置いてある店の看板も日本語だ」

そう言いながら突っ立っていると行き交う人々からかるく視線を感じると自分の姿がのこふと思い出す。すると慌ててその場から離れるためにどこかに走っていき、ある程度離れると止まり、辺りを見渡す。どうやらいつの間にか人通りの少ないところに来てしまっただけようであった。すると体の力が急に抜け倒れてしまう。

「あれ？力が、はいんない…？」

そう、さっきまでは無我夢中で動いていたが、この体はおなかの極限にまで減っており、栄養不足とも言わんばかりの状態であった。

「これって、まずいんじゃないか？はあ…転生そうそういきなりこれとは、運が無いなまったく…」

そう言いたただボーっと何も無いような景色を見ていた。すると

「孝弘さん、子供が倒れてるわ！」

と言い慌てて駆け寄ってくる女性。すると男性が近づいてきて

「君！大丈夫か！？今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張ってくれ！」

そう言うと孝弘と呼ばれる男性はレイジを車に乗せ移動していった。

とある男性 side

僕は三嶋 孝弘といい、とある町の小さな病院の院長だ。

今日は、病院の皆が、娘の由利香の誕生日だからと言って妻の裕子と共に早く帰るようにと気を使ってくれたから、そのお言葉にあま

えて妻と一緒に帰ることにした。そして帰り道の途中に妻が急に「孝弘さん止まって！」

と言ったので慌ててブレーキをおもいつきり踏んだ。すると道の端の方に人のような大きな大きさのものがあつた。すると妻は慌てて車を降りて駆け寄っていく。僕も降りようとすると

「孝弘さん、子供が倒れてるわ！」

と聞くと僕も急いでその子の近くにいき声をかけた。

「君！大丈夫か！？今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張ってくれ！」

僕はそう言つと妻と共にその子を車に乗せると病院にむかいアクセスを踏んだ。

side out

「……ここは？」

そう言い目を開けるレイジ

(何度目だろうか？この状態になるのは……)

そう考えると扉の開く音がして白衣姿の男性が入ってくる。そして男性はレイジが目を覚ましてるのを見て

「よかつた、目を覚ましたんだね」

と安堵の表情で言った。

「あなたが助けてくれたんですか？」

「そうだよ、僕の名前は三嶋 孝弘っていうんだ、この病院の院長をやっているんだよろしく。でも驚いたよ、僕が帰る途中に妻が倒れてる君を見つけたんだ」

「そうですか、ありがとうございます。あっ、あと俺の名は久瀬零治です」

「零治君か、よろしく。」

そう微笑みながら言うと

「あと、起きたばかりで悪いけど質問をしてもいいかな？」

と少し真面目な表情になる孝弘。

「ええ、大丈夫です」

と零治が言うと

「まず君の親御さんはどうしているかわかるかい？」

「いえ：わかりません」

「そうか：次に、なぜあんなところに倒れていたんだい？」

「気づいたら、路地裏にいてそこから途方もなく歩いていたら、

急に体に力が入らなくなっ

てことは、その路地裏にいた前の記憶はないということかな？」

（やってしまったな、名前はおぼえてるのにそれ以外が都合よくぬけているとなると、あやしまれるだろうな、さてどうする…）

そう自分のミスをどうフォローしようか必死に考えていると孝弘は「ふむ、過去の出来事はとても思い出したくなくて自分の名前以外を思い出さないようにしているのか？それとも…」

などと、ぶつぶつと独り言のように喋っていき

「多分、君は本能的に嫌なことを思い出さないようにしているんだろうな」

と零治の状態を告げたのであった

（まさか、納得したのか？まあ何も追求されずにすむならそれでいいが…）

と思っていると

「最後に1つだけいいかな？」

「はい」

「首のところに埋まっている機械は、なにかな？」

そう言われると零治は一番聞かれたくないことを聞かれて一瞬、とても驚くがすぐさま冷静に落ち着き

「首…？」

と知らなかったかのように言い、自分の首を触りまるで初めて気づいたかのように演じた。それを孝弘はみて

「どうやら知らなかったようだね、すまない。もしかしたら君はそのことが嫌で記憶を閉ざしたかもしれないのに」
と申し訳なさそうに言う。

「いえ、驚きましたけど記憶が無くてなんとも感じないので大丈夫です」

「そうか、ありがとう。で、今の君にこんなことを言うのもあれだが…さつき警察の知り合いに聞いたんだが、どうやら最近は何の捜索願も出されて無いらしくてな…」

となんとか濁そうとしているが

「要するに、俺は捨てられたんですね？」

そう聞くと孝弘は

「すまない…」

と言い頭を下げる

「孝弘さんが謝る必要はないですよ。俺もなんとなく気づいていましたし、親の顔も思い出せませんから」

「そうか…なあ、急に言うのもなんだが、もしよかったら僕の養子にならないか？」

と突然の申し出に驚く

「いいんですか？俺みたいなものを養子になんてして」

「もちろん構わないさ。まあ、君が嫌でなければの話だけど」

「じゃあ、ぜひよろしくお願いします」

「そうか、じゃあさっそく色々としなきゃいけないね。あと一応今日で退院できるけど明日までいるかい？それとも今日からうちに来るかい？」

（ふむ、AMSのこともあるからな…もしこの人しか知らないなら他の職員の目にふれる前にいったほうがいいな）

「はい、じゃあよろしくお願いします」

「わかった、じゃあ準備が終わったらよびにくるよ」

そついい孝弘は部屋を出ていった

孝弘 side

僕は零治君の病室をでると妻が待っていてくれた。

「孝弘さん、あの子どうだった？」

と心配そうに聞いてくる

「ああ、零治君は目を覚まして元気だったよ。しかも養子にもなるつて」

そう言うと妻はほつとし、喜んでいた

「でも、首の機械のことは知ってみたいだったよ。そのことを聞くとほんの一瞬だけど動揺していたしね。どうやら彼は記憶を閉ざしてるんではなくて話したくないみたいだ。まあ、それもそうだと思うよ。推測だが首にあんなものを埋められたんだ、きつととても酷いことをされたんだろうね。」

僕がそう話すと妻の表情は暗くなる

「私たちがじゃ、あの首の機械をとってあげることができないのよね……」

「ああ、あそこまで脊髄に近いとね、悔しいけど今の医療技術じゃ絶対に無理だろうね、正直どうやったらあんなことができるか知りたいぐらいだよ。まあなんにせよ、あんな子供にあれほどの非人道的なことをするなんて許せない」

僕はそういつてるといつの間にか爪が食い込むまでこぶしを握っていたらしく手から血が流れでる。そうすると妻は僕の手をそつと握り「大丈夫ですよ。孝弘さんたとえ今、あの機械をとってあげられなくてもあの子に人並みの幸せを与えてあげることができるはずだから」

「ああ、そうだね」

と静かにうなずいた

「それにしても由利香をずっと待たせてしまってるがどうしよう…」
「それなら大丈夫ですよ。さつき由利香に電話をしておきました。
ついでにもしかしたら家族が増えるかもしれないと言ってあげたら、
電話口ですごいはいしゃいでしたよ」
「それはよかった。君は零治君が断わらないとわかってたのかい？」
「ええ、それは一児の子を持つ母親の勘です！」
そう自信満々に言う妻を見て思わず笑みがこぼれた
「さて僕は、色々と手続きをしにいくよ」
そう言うと僕は廊下を歩いていった

side out

零治と孝弘の会話から数時間後、零治は孝弘とその妻、裕子とともに三島家に向かっていた

そして、三島家の前にきて孝弘が家の扉をあけ

「ただいまー」

と言うと奥のほうから足音が近づいてきて

「おかえりー！わたし、いい子にしてまっただよー！」

と元気よく走ってきた女の子を孝弘さんが

「えらいぞ、由利香！」

と言いながら頭を撫でる。どうやら女の子の名前は由利香というらしい。

「ほら、由利香。電話で言った新しく家族になる零治君よ。ちなみに由利香より1つ年上だからお兄さんね」

そう言い、裕子は零治を自分の娘に紹介する。

「わたしの名前は、由利香っていいですよ！」と元気よく挨拶をしてくる

「俺の名は、零治という。よろすしく」

「うんーよろしくね、れいじお兄ちゃん！」

と言うと勢いよく零治に抱きついてくる。それに対し零治は少し照れくさそうにする。

そんなやり取りを孝弘と裕子の2人はみて微笑んでいる。

そして零治もこれからこの温かい家庭がずっと続くと思っていた…
そう、あの事件が起こるまでは…

第8話（後書き）

いろいろとありえねえと思われませんがそこから辺はどうかご都合主義
で通してください。

お願いします。

そして首輪付きやリリウムが入ってくるのはもう少し先になるかと
思います。

第9話(前書き)

今回からESにふれてきます!

そしてちょっとグロ(?) シーン的なものがあったりなかったりします。

第9話

第9話

零治が三嶋家の養子になってから約2年がたちとある休日、家族皆で昼食をとっていた。

「れいじお兄ちゃん、ご飯食べ終わったら一緒に遊びにいこう！」と元気よく言う由利香

「ああ、いいよ。ただし嫌いなトマトをちゃんと食べたらな」

「うう、がんばって食べるもん！」

「あらあら、すっかりお兄ちゃんね」

「由利香が人懐っこいのもあるしね」

二人がその光景を見ながら微笑む。

しかし突如家の外の町内放送から緊急の避難警報が鳴り響く。

「〇〇町の皆様にお知らせします。たった今、各国のミサイルが日本に向かって発射されました！直ちに外に出て政府の役人の非難にしたがってください！」

それを聞くと零治たちは、必要最低限のものを持って急いで外に出る。すると今の放送を聞いたであろう人々が慌てていた。それをスーツを着た政府の役人と思われる人たちが指示をだしている。

「さあ、早くいくよ！」

孝弘はそう言うのと零治の手をしっかりと握り、裕子は由利香の手をしっかりと握り役人の指示にしたがい移動し始める。

「れいじお兄ちゃん、いまなにがおっこてるの？」

不安そうに聞いてくる由利香に対し、あいてる左手で由利香のあいてる右手をしっかりと握り

「大丈夫だよ。父さんや母さん、俺もついてるからね」

そう優しく言う。すると遠くのほうから轟音がきこえる。おそらく

そして零治は気がつくともた病室のような場所にいた。

「ここは？」

そう言いうと近くの男性が零治が起きたことに気づいた

「ここは、どこですか？」

と男性に聞いてみる。

「ここは、昨日起きた“原因不明の爆発”によって独りになってしまったりした子供たちなどを保護する施設だよ」

そう男性が言ったのを聞くと零治はふと理解する。

ようするに日本政府や他の国の政府はミサイルは約一ヶ月前に発表されたISに約半数をそしてその他は各国の軍などが打ち落としたことになり。ミサイルが落ちた事を無かったことにしたのだ。そしてもしこのことを外に漏らそうとすれば消すであろうと、いわばこの施設は本当の真実を知る者の監視場所であるとそしてこの施設に日本各地で起きた“原因不明の爆発”による集められた被害者の人数はたった16人ほどである。そしてその16人は全員子供である、子供ならあの事件のことを上手く言い包められると思ったためであるとうと零治は理解したのだ。

「少しでも無事な人がいてよかったよ。すまないが今忙しくてね、また後で来るよ」

と言い病室を出てた。すると零治は最後の光景を思い出し泣くかと思えたが涙がでてこなかった。

(ははっ、俺の心は本当に狂っているらしいな)

そう自分を嘲笑う。零治は前の世界で、戦争をしていて親しい仲間たちが次の瞬間には絶命してたりする状況に馴れてしまったために心の感覚が少々麻痺しており、とても悲しい気持ちだが泣けないという状態になってしまっている。しかしそれが皮肉にもそのおかげであんな光景をみても精神が崩壊せずにすんでいるのであった。

そして零治が施設に来てから約半年後、他の子供たちとともにある部屋に集められていた。

「今日から君達は新しい施設に移動してもらうことになった。なので今から君達は外の車に乗って移動してもらおう」
男はそう言い子供たちはみな中から外が見えないようになっていいる車に乗せられると出発する。そして車に乗ってから数分、いや数十分あるいはそれより長い時間もかもしれない時間がたち車が止まる。するとドアが開き降ろされ目の前の建物をみると研究所のようなところだった。

そして建物中から数人男が出ると子供たち全員を中に連れて行き、とある部屋に連れてくるとそこには眼鏡をかけた研究員のような薄気味悪い男がいて、子供が全員いるのを確認するとしゃべりはじめる。

「初めまして、僕は、ISの研究をしているキール・マルセスと言う。これから君達には被検体になってもらうよ。」
キールという男がそう言う子供たちは騒ぎ始め、それをみたキールが部屋の隅にいた一人の男に目で合図する。するとがたいのいい男が子供たちに近づき騒いでいる子供の中の一人を掴み見せしめのように殴る。すると子供たちは怯えて静かになった。

「うんうん、僕は静かな子は好きだよ」と薄気味悪く笑いながら言う。

「さて、まずは男の子と女の子に別れてね。そして男の子は僕についてくるように」

そういう子供たちは嫌だと思ったがその言葉に従わなかったらさっきの男の子のようになると思うと、零治と殴られた男の子を含め12人はついていった。そしてまた別の部屋に入るとまたキールが

喋りだす

「みんな最近TVとかで話題になっているISを知っているね？
ただどねそのISはなぜか女性にしか動かせないんだよ、現行の兵器を凌駕するのに女性しか動かせないなんてもつたいないよね。しかし僕はね、どうにかして男性が動かせないかと考えているんだ。そしてもし動かせるようになったら凄いいことなんだ。だからね、君達にはその為に協力をしてもらうんだ。」
クククツと気持ち悪く笑うキール

「ああ、そうだそうだ、君達には拒否権は無いからね？君達は哀れなことに国から捨てられちゃったんだから」
アハハと可笑しいように笑う。

（やつぱり、か。国は口封じのために変態科学者にモルモットとして渡したのか）
と零治は冷静に考えていた。すると笑い終わったキールが零治のこ
とみて

「そういや、そこにいる零治君だったかな？君面白いもの首につけてるよね？」

「っ！」

「どこの誰がそんなものをつけたのかわからないけど、僕はそれに興味があるんだ」

口の両端を上げてにやりと笑うキール

「ちよつと調べさせてもらうよ、大丈夫解剖は絶対もしないし丁寧に扱うから、乱暴に扱って貴重なサンプルが使い物にならなくなつたらいやだもん」

零治は近くにいた大柄の男二人に掴まれ抵抗するが体格差が違いすぎるためにあつさり押さえ込まれる。そして実験室のような場所につれてこられる。するとそこには組みかけのISと呼ばれるものがあつた。

「来てそうそう悪いけどすぐに実験させてもらうよ。さっそくISを動かせるか試してみたいけどまずそれがどうなってるかを知り

たいからね」

そう言うと零治を台に固定して機械からいくつも伸びるコードの中の1つをAMSにとりつなげる。

「すこし苦しいかもしれないけど頑張ってね」

そう言うと零治はネクストを動かすためにつなげたときよりは軽い
が似たような精神負荷をうけ

「がつ！」と苦しそうにする。

「うーん、どうやら脳からの電気信号を首のそれで制御して機械とかに送りだすみたいだね。これは義手や義足のために使われるものだったのかな？それにしても精神負荷がかかるみたいだね。ねえねえ君はなんでこんなものをつけられたんだい？」

「知る、か！」

「そうか、残念だ。まあそれじゃあ仕方ないか、悪いけど君にはその首のものと似たようなものができるまで頑張ってもらおうからよろしくね」

その日から零治は辛い実験の日々を繰り返す。

そして実験を始めてから約1ヶ月半後

「ねえねえ零治君、今日はねISを動かしてもらいたいんだ、君のね首と同じようなものがね試作品だけできたから、まずは君がISを動かせるか試してみたいんだ。もしかしたらいつもより精神に負荷がかかっちゃうかもしれないからがんばってね？」

そう言うと零治をISに乗せISから伸びるコードを首に刺す。すると精神負荷がかかり苦痛そうに表情を歪めた。するとISが起動したのだ。キールはそれを見て

「すごいよ、零治君！」

アハハと愉快そうに笑う

「本当に凄いよ君は！今、IS適正を見たけどA+だよ！さっそく他の子に取り付けてあげなきゃ」
そう言うときールはモニター室を飛び出していった。

そしてその日から零治は生身でもISでも戦闘訓練を強いられ、他の子供は擬似的AMSをつけられ精神負荷に耐えられるようにとされていった。そしてそこから1ヶ月ほどたった。

とある研究室で

「やっぱりすごいな、僕は！まあ大きさが首輪と同じくらいになってしまったが、男性はISが使えるようになり元々IS適正のある女性は1〜2ランク上がるようになる」
と一人で興奮しだすキール

「うーん、でもまだ改良しなきゃな、残念なことに精神負荷に耐え切れなくなった子供たちが多かったし、あと2人しか使えないがないのはつらいな。だけど零治君はすごいね、あの精神負荷にずっと耐えてるんだから。」

そして急に立ち上がり

「あつ、そうだ！前に拾ってきたあのISみたいなのを零治君に動かしてもらおう！あの子なら僕らでもISばい何かとしかわからなかったあれを動かせるかもしれないしね、やっぱり僕は天才だ！」

そう言うとき実験室に向かっていった。

「零治君、君に動かしてもらいたいものがあるんだ」
そう言うとき零治の前にあるものが出された

「前にねそのISばいものを拾ったんだけどね僕ら研究員がどんなに頑張っても解析もできなくて女性にも触らせてみたけどまった

く反応しないんだ、外見からしておそらくISだと思っただ。だから是非、君に動かせるかを試してもらいたいんだよ」「
零治はそのISらしきものをみるとどこかで見た記憶があるのだ、
そして少し考えるとふと思いつく。

(こいつは、まさか…)

零治は自分の勘が正しければ、自分はこのつを動かせるのではないかと。そう思うと零治はそのISらしきものにふれる。するとAMSをつなげてないのにISが起動した。すると機体の情報が零治に流れ込んでくる。

AC・NAME ファンタスマ
fantasma

HEAD・HD・HOGIRE
CORE・CR・HOGIRE
ARMS・03・AALIIYA/A
LEGS・LG・LANCEL

R ARM UNIT・03・MOTORCOBRA
L ARM UNIT・07・MOONLIGHT
R BACK UNIT・EC・0307AB
L BACK UNIT・EC・0307AB
R HANGER UNIT・EB・0600

- COMPLETE SYSTEM CHECK -

システムチェック完了の情報まで流れ込み、それが終わる。

(どうやら、ネクストの出力をほぼ完璧に再現してある。そしてPAも機能するとは驚いた。だがPAは展開しないほうがいいな) そう考えているとキールが

「マジクOOI!最高だよ零治君!」

などと五月蠅いが気にせず。ファンタズマのそれなりに情報をよみとると零治は研究員達の方へ向き右手の03 - MOTORCORAをガラス越しにいる研究員にむけて撃つがガラスは壊せなかった。「おや？今までの恨みをはらそうとしてるのかい？だけど残念だったね、このガラスは対IS用のバリアがはってあるから無理だよ」

とケラケラ笑うが零治は左手の07 - MOONLIGHTを最高出力でガラスの目の前にいた他の研究員2人ごと焼き切ると、警報となる。そしていつも人を馬鹿にしたように笑っているキールが慌てていた。

「な、なんでIS用のバリアを壊せるんだ！？クソッ！」

そう言うのと急いで部屋をでて応援を呼ぶキールそれを逃がさないとして07 - MOONLIGHTで壁を壊していく。

「さて、今までの礼をたっぷりとさせてもらおうぞ」

と言い研究員を殺害しながら追いかけると外に出た。

するとキールはへばっていき転んでしまう。そして零治は近づくと

「貴様は、さんざん俺らのことを好き勝手にしてくれだな！」

「だから、どうした？それで僕を殺して他のやつを救うってか？だったら無理だな！他のやつらは精神負荷に耐えられなかったからな！残りの2人はちよつと手を加えてやってもう無理だ！」

ヒヤヒヤヒヤと狂ったように笑う。それを聞いて零治は

「五月蠅い」

と言いキールに対して03 - MOTORCORAを撃つと片足が吹き飛ぶ

「うがあああああああああああ！！」

僕の、僕の足があああああああああああ！！」
と言つてのた打ち回る

「もういい、貴様は今すぐ殺してやるっ…！」

そう言い03 - MOTORCORAをキールに向けると横から斬りかかれると零治は後ろに避け距離をとり、攻撃してきた相手を

見た。するとそこにはISをまとっているものが2人いた

「ははは！もうお前は終わりだあ！見る、さっき言っていた残りの2人だよもう廃人確定の人形だよ！さあ、お前たちあいつを殺せ！」

そう言うのと2人は零治むかって近接ブレードで切りかかってくる

「下種がつ！」

そう言いキールを睨みながら相手の攻撃を避ける。相手は素人同然の動きで力任せに振るうブレードは決して零治にあたらないだが零治は反撃をしないでいた。たとえ手遅れだとわかってても2人を手にかけたくないと思っっている。すると2人からオープン・チャネルでしゃべってくる。

「オレタチハ、モウタスカラナイ」

「コレイジヨウハ、モウイヤダ」

「ダカラモウ、コロシテ」

それを聞くと零治は

「…わかった、そしてすまない。俺のことは恨んでくれて構わない」

そう言うのと07 - MOONLIGHTで絶対防御を貫き2人を倒す。

そして2人とも切られる前に「アリガトウ」と言い残した。

そして再びキールの元へ近づくと

「クソツ！あの役立たずどもめ！」

そう言うキールに03 - MOTORCOBRAをむけ

「死ね」

そう短く言い引き金を引いた。そして

「こんな場所はまだあるべきではない」

そう言うてある程度の高さまで上昇し、両背のEC - 0307ABを高出力で研究所に向けて撃つと研究所を跡形もなくすべて吹き飛ばした。そして、静かに地上に下りるとファンタズマを解除すると左手に腕輪状になった。そして零治は今までの疲労のせい、膝をつき倒れてしまう。

すると遠くからヘリコプターや車の音が近づいてきて、ヘリコプターが近くに着陸して中から初老の男性が降り零治に近づいてくる。

そして零治はその姿をみながらゆっくりと意識を手放した。

第9話（後書き）

まあ、なんというか、ご都合主義まっしぐらなうえに無理やり感
はんばないですがそこら辺はスルーでお願いします（汗

そしてもうすぐEIS本編に入れそうです。
なので頑張らせていただきます！

第10話(前書き)

今回は短いと思います。

そして次から本格的に本編に介入する予定となっております。

第10話

第10話

とあるヘリコプターの中

零治はゆっくりと目を開け

「また気を失ったのか…」

と静かに呟く。それに気づいた初老の男性は

「おや？もう目を覚ますとは丈夫な子だな。私の名はルーカス・レイレナードという。一応外傷は無かったがどこか痛むところはあるかな？」

「いえ、大丈夫です。俺の名は三嶋 零治です。そして助けられて、ありがとうございます。」

「いや、礼を言うのはこちらだ。生きていてくれてありがとうございます。そして、すまない」

零治はむこうの急な感謝と謝罪にとまどった

「なぜ、そんなことを言うんですか？」

「実はあそこの研究所が非人道できな実験をしているのがほぼ確実にわかっていたんだが、決定的な証拠を入手できずに突入する事ができずにいてな。そして今日になってクラッキングでやっと入手ができ急いで来てみたが、それは遅すぎた。結果、君の手を汚してしまい他の子供を誰一人として救うことができなかった」

「でも、国が関係していますから、仕方ないと思いますよ」

「それでもだ。少し無理してでも早く行くべきだった…すまない」

「いえ、少なくとも俺は許しますよ。なにはどうあれあなたが俺の命の恩人ということに関しては変わらないんですから」

「ありがとう、優しいんだな君は。罪滅ぼしと言ってはなんだが、君を我が社で保護させてもらえないか？」

「保護、ですか？」

「まあ今の君の状況では、私が例えどんな理由を述べようとも、君は私達がああの研究員達のようにISが使える男性として利用すると思うのは承知だ。そのうえで君を保護させてもらいたい」

「確かにそうですね、ですけど俺は普通の生活に戻るのが難しい今、頼るしかないのが事実ですから」

「そんなことはない！君は普通に生活していいんだ、今からでも遅くは無いだ！」

今まで冷静だったルーカスが急に声を大きくして言う。その光景を見て零治は思わず軽く笑ってしまう。

「やっぱり、あなたはいい人ですよ」

零治がそう言うところルーカスは、はっと冷静に戻りと笑う

「ハツハツハツ！私もしてやられたな、こんな子供にのせられてしまったよ」

「では、これからよろしくお願いします」

「ああ、任せてくれ。一応君がISを動かせる事は我が社の職員全員で外部に漏らさないようにするがいいか？」

「そのかたちでお願いします」

そう話しているとヘリが着陸し外に出ると目の前には見覚えのあるマークが入ったでかい建物があつた。

「見てくれこれが我が社、レイレナード社だ。そして、ようこそレイレナード社へ」

それを零治はみて啞然としていた。

（あれ？やっぱり名前を聞いたときから思ったけど、マークまで一緒とは驚きが隠せん）

「ん？どうした、そんなに驚いたか？」

そう言われはつと我にかえる

「え、ええ。あまりの大きさに驚いてたので」

「そうか、だがISが発表されてから業績が落ちてきてな」

「俺も手伝いますよ?」

「ハッハッハッ！気持ちだけ受け取っておこう。ではついて来てくれ」

そういい歩き出すルーカス、そしてその後に零治はついていった。

こうして零治はレイレナード社に入社(?)したのである。

そして、あれから3ヶ月ほどたち零治は社内の人々から可愛がられていた。零治もまんざらではないがどうしても手伝いと思っていた。しかし社内の皆はあの実験の被害者だからと気遣いIS関連の仕事は手伝わせないようにしていた。だが零治からすると恩返しができないのがもどかしかった。そこで零治はルーカスに仕事をどうしても手伝いたいとしつこく頼み込むと、とうとうルーカスは折れてしまい無茶はしないようにと条件付で承諾を出した。

すると零治は自身のISファンタズマを調べることにした、さすがにコジマが害があるかないかはISのみの情報では判断がつかず、精密に調べると、どうやらコジマ粒子は害をなさないようになっていた。そしてブースターやPAはネクストと同じ出力であり背中のEC・O307ABも数値をみるとネクストのとき(Ver・フロムマジック)と変わらずAAも同じだった。

武器のほうは両腕に07・MOONLIGHTを装備した状態で持てるようになっていた。

そして格納されてる武装は32個と多いのである。これはあまりにも危険だろうと思い、PA、AA、ブースター、EC・O307AB、07・MOONLIGHTの出力には制限をかけたのであつ

た。

そして零治はまず開発から手伝おうと思うと、零治は向こうでの知識がある程度使いいろいろと助言をしていく。しかし皆、最初は子供の戯言だと思っていたがその有用性がわかると驚き零治の助言とともに一緒に開発していった。そして零治がレイレナード社で手伝うようになったから徐々に業績が伸び始めたのである。

それから時はたち、零治が高校1年になるころに前から患っていた持病にルーカスが倒れてしまう。それを聞き急いで病院に向かう零治

「爺さん大丈夫か!？」

「ああ、零治か。学校はどうした？」

「爺さんが心配だから早退してきたさ。で、医者はなんだって？」

「病の進行が思ったよりも早くてもう、長くないと言ってた。長くもつて一ヶ月だそうだ」

「…そうか」

「なに、私もうすうす感じてたことだ。それにしても改めて見ると随分と大きくなったなあ」

「あれから何年たってると思ってたんだ？」

と笑いながら言う

「そうだったなあ。なあ、ところで零治」

「ん？なんだい爺さん」

「お前、次の社長を任せていいか？」

「はあ!？なに言ってるんだよ爺さん、俺なんかよりユーリカさんとか大介さんとかいるだろ？」

「ああ、その2人にも社長にならんかと聞いたら零治を指名した

ぞ、他の社員たちにも聞いたら皆お前さんがいって言ったぞ。因みに私もそれを望んでるぞ」

「みんな、買いかぶりすぎだよ、俺のこと」
その言葉をルーカスは聞くと大きな溜息をつく

「はあ、お前は自分のことを過小評価しすぎだ。もっと自身を持って、お前にはそれに見合うだけの能力があるのだから。まあ死にそうなる年寄りの最後の我俣を聞いてはくれんかね？」
それを聞くと零治は拳を強く握り。

「わかったよ、爺さん。だけど爺さんには悪いが、あと1年程待ってくれ。俺はその間にもっとがんばるから、それじゃ駄目か？」

「ああ、それで構わない。こんな年寄りの我俣を押し付けてすまん」

「気にしないでくれ、爺さん」

そのあと零治とルーカスは他愛のない話をして一日をすごしていった。

そして、その日から一週間と数日たつとルーカスはとうとう帰らぬ人となった。

零治は涙を静かに流し見送る。そして自身が言った言葉を果たすために努力をするのであった。

時は過ぎ、翌年の2月、世界中を騒がせる出来事が起きる。

“ 男性初のIS操縦者が表れる ”

第10話（後書き）

やっとIS本編の一手前です。

そして終わり方が微妙なものいつものこと、ということでお願いします（汗）

今回もいろいろと都合主義でおしてます。

一応、零治のISの武装は設定などでだすことにします。

あと因みにでてきたレイレナード社の皆さんはとても心が綺麗な人達なのでご安心してください。

どのくらい綺麗かと言うと、アクアビットの研究員達が「コジマなんて害のあるものを使ってはいけないんだ！」と言っぐらい綺麗です。

そして次も頑張っていきたいと思います。

誰も得しない主人公設定の何か（前書き）

一応、本編突入前なので主人公設定のな

誰も得しない主人公設定的な何か

誰も得しない主人公設定的ななにか

名前：三嶋（久瀬） 零治

原作開始時は高校2年

背の高さは185ぐらい

IS名：ファンタズマ

形みたなの

HEAD・HD・HOGI
CORE・CR・HOGI
ARMS・03・AALIAH/A
LEGS・LG・LANCEL

R BACK UNIT・EC・0307AB
L BACK UNIT・EC・0307AB

をフルスキンではなく都合よくハーフスキンにしたもの

機体武装

ライフル

051ANNR x2

アサルトライフル

063ANAR x2

MR-R102 x2

04 - MARVE x 2
スナイパーライフル
050ANSR
061ABSR
マシンガン
XMG - A030 x 2
03 - MOTORCOBRA x 2
ガトリングガン
GAN01 - SS - WG x 2
ショットガン
MBURUCUYA x 2
SAMPAGUITA x 2
ハンドガン
LARE x 2
グレネード
GRA - TRAVERS x 2
レールガン
RG01 - PITONE
レーザーライフル
ER - O705
ハイレーザーライフル
HLR01 - CANOPUS
HLR09 - BECRUX
パルスガン
EG - O703 x 2
ブレード
KIKU x 2
レーザーブレード
07 - MOONLIGHT x 2
あと天使砲（フロムマジック使用）

他、首輪付きのとかもそのうち追加予定

誰も得しない主人公設定的な何か（後書き）

ぶっちゃけ形はビジュアル使用なのでゲームで参考にしないほうがいいと思います。（汗）

そして天使砲の威力はフロムマジックと同じって考えるととんでもないきが…

あと機体性能は超スペックということをお願いします。

第11話（前書き）

やっと本編突入です。

長かった、なあ。

そういえばほぼどうでもいいことですがアサルトライフルやライフルの連射速度もフロムマジックでOPと同じというのを忘れてました。

第11話

第11話

IS学園の1年1組の教室で真ん中の最前列に織斑一夏という男子が座っている。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRをはじめますよー」

そう言うのは子供が大人の服を無理に着ましたという印象の女性、山田麻耶先生である。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

しかし教室内は変な緊張感から生徒の反応が誰一人として無い。それに対して山田先生はちよつとうるたえてしまう。

「じゃ、じゃあ自己紹介を出席番号順でお願いします」

と言い自己紹介が始まっていく。そんな中、織斑一夏は別のことを考えていた。

（これは…想像以上にきつい…）

と考えていた。それもそのはず、クラスの殆どが女子であるために数少ない男子にみな注目しているのだ。そして一夏はちらりと窓側の女子、六年ぶりの再会である幼馴染の篠ノ乃箒の方へ助けを求めようにして目をやるが、ふいつと窓の外に顔をそらした。

（うう、薄情な…）

そう思い他に助けを求めようとしてもあとにいるのは、後ろにいる男子生徒だけであるが、今の状況では後ろに振り向くことはできなくて悩んでいると

「………くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?!?」

いきなり大声で呼ばれて声が裏返ってしまった。周りからはくすくすと笑い声がする。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってご、ごめんね。お、怒ってる？ゴメンね、ゴメンね！でも、あのね、自己紹介、“あ”から始まって今“お”の織斑くんなんだよね。じ、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……ってどうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？や、約束ですよ。絶対ですよ！」
そう聞くと一夏はしっかりと立って、後ろを振り向く。

(うつ…)

「えつと……お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう言うのと周りの生徒からは、それだけで終わり？もつと色々と喋つてよ！などという期待の視線がつきささる。すると一夏は決心したように深呼吸して思い切って口にした。

「以上です」

そう言うのがたつとずつこけてしまう女子が何人かいた。するとパアンツ！後ろからいきなり叩かれおそるおそる後ろを振り向いてみると、とある人物が目に入り。

「げえつ、関羽!？」

と言うとパアンツ！とまた叩かれる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

一夏の頭を叩きそう言う人物は織斑千冬である。

「山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえ副担任ですから、これくらいはしないと……」

山田先生はそう言いさっきの涙声とは変わり笑顔でこたえた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

千冬がそう言うつと

「キヤーーーーーー！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に会うために沖縄から来ました！」

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

などと黄色い声援が響く

「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。で？挨拶も満足にできるのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は「パンツ」

「織斑先生と呼べ」

「…はい、織斑先生」

「よし、他のものも静かにしろ。次のやつ自己紹介をしろ」
そう言うと一夏の後ろの男子が立ち上がる。

side 首輪付き

どうも、全く出番がなかった首輪付きです。え？あの後どうなったかって？それはまた今度話すとして、俺は約一ヶ月前にこの世界に来て右左もわからず途方に暮れて2日ほど過ごしたらとうとう空腹で倒れたんだ。そのところを織斑千冬に助けてもらい、なんか俺の手首についてるアクセサリーがISというものらしく俺はそれを使うがためにここにいるわけだ。もちろん自分の素性のことは殆ど隠して首の後ろのAMSのことに利用して実験施設から逃げたことにした。そしてなんか織斑千冬が根回ししてくれたみたいで政府のほうに正式に登録された。

それにしても周りの声がかすぎるだろ。お、そう思ってたなら自己紹介の番が回ってきたみたいだな。

「あー、俺の名はオルカ・リンクスだ。一応ISを操る三人目の男子だ。テレビに出てないけど、政府の方にはちゃんと登録してあるからよろしく。趣味は特に無い。まあ、そんなもんで」と俺が言っていると周りがまた騒ぎ始める。あゝめんどくさかった。え？名前が安直すぎる？・hackのオルカもといヤスヒコとユニコーンのバナージの名前を馬鹿にするなよ？

パンツ！

「いつ！」

「お前もまともに自己紹介ができんのか？」

「…すみません」

なぜあの自己紹介ではいけなかったのだろう…

side out

そして自己紹介が進み一人の女子にあたる

sideとある女子

私の名前はリリウム・シェリーと言います。珍しいことに私は生まれたときから前世の記憶があります。名前のリリウムは一緒ですがファミリネームは変わりました。そして前世の世界は戦争が当たり前の世界でした。そしてあの人も死んでしまった悲しい記憶もあります…と暗い話は無しにしましょう。前世のことはいつか語るとします。で、あのオルカ・リンクスと名乗った男子は前世のストレイドのリンクスに瓜二つですね、もしかしてあの人もそうなんでしょうか？後で話してみましよう。それにしてもあの出席簿とても痛そう…私は叩かれないように気をつけなきゃ。あ、どうやら私の番のようですね。

「私の名前はリリウム・シェリーです。趣味は読書で、好きな食

べ物はスイーツ全般です。日本にはつい最近来たばかりなので色々教えてもらえる嬉しいです。一年間よろしくお願いします」
そう私が言い終わり次々と進み全員の自己紹介がちょうど終わると教室のドアが開き制服をきた男子が入ってきました。それは約一週間前にテレビに出てきて、そして私の前世の記憶でとても見覚えのある人でした。

side out

一組の自己紹介が終わると教室のドアが開く、すると男子生徒が入ってくる。

「遅れてすみません、織斑先生」

「大丈夫だ、事前に連絡はもらってある」

「そうですか。ならよかったです」

「ちようどいい、お前も自己紹介しろ」

「わかりました。」

そう言うと男子生徒はクラス皆の方を向いた

side 零治

俺は織斑一夏がISを使えると発表したのを見てから、約2週間後、3月の初めに政府のほうへISが使えることを報告した。そして俺がレイレナード社の社長へと就任するのと同時に発表して欲しいと頼み約一週間前に発表された。そして入学式当日、俺はIS学園の

理事長室で少し話をしたためにSHRに遅れてしまい、最後のほうにきた。どうやら自己紹介が行われているみたいだな、では入らせてもらおう。

そしてドアを開けたて織斑先生に謝罪などを言うとき自己紹介をすることになった。なので真ん中のほうに行きクラスメイトを見渡すと、向こうの世界で見覚えがあるのが2人ほどいて驚いた。そして2人のほうを見ると、向こうも驚いていた。どうやら十中八九あたりだろう。そう思うとき自己紹介を始める。

「始めまして、多分テレビや新聞をみて知っている人はいるだろう。俺の名は三島零治で本当は今年で高校二年になるんだがあまり気にしないで接してくれると助かる。趣味は特に決まったものは無いが暇なときは読書をしている。もし質問があるなら後で聞いてくれ。一年間よろしく頼む」

そう言い終わると

「キヤー！うちのクラスに男子が三人も、さらにみんなイケメン！」

「そして年上キター！」

「神様ありがとう！」

なぜこんな騒ぐんだ？俺の自己紹介に変なところでもあっただろうか？

まあいいか、とりあえず後で見覚えのあるやつには接触を試みるか

side out

零治は自己紹介が終わり一夏の左隣の席に着くがクラスはずっと騒いでいる。するとチャイムが鳴った。

「SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが基本動作は半月で染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事しろ」

そして一時間目が終わり、休み時間

一夏は近くの男子2人に話しかけていた

「な、なあ」

「「ん?」「」

「い、いや、男子が俺たちしかいないから仲良くしようぜって思ってる」

「ああ、そういえばそうだったな。改めて自己紹介させてもらうが、三嶋零治だ年上だとか関係なく接してもらえると助かる。呼び方は好きに呼んでくれ」

「あ、俺の名はオルカ・リンクスだ。オルカでもリンクスでも好きなほうでよろしく」

「おう。俺は織斑一夏だ一夏って呼んでくれ。零治、オルカ」

そう話していると

「…ちよつといいか」

と篤が話しかけてくる

「「「ん?」「」

「誰かに用か?」

「ああ、ちよつとそこの」

と言いながら一夏の方をみる篤

「一夏、どうやらご指名のようだ」

「おう、悪いちよつといつてくる」

そう言つと一夏は篤とともに教室からでていく

(ふむ、では俺も聞いてみるかな)

そう思うと零治はオルカに聞こえる程度に小さく

「首輪付き、リンクス」

そう、ぼそつと呟くとオルカは

「！やつぱり、あんたか」

一瞬驚くと納得したようであった

「久しいな、首輪付き。それにしてもその名は安直すぎやしないか？」

「とつさに思い浮かんだ名前がこれだったから仕方ないだろう。ていうかあんたの名はどうなんだよ」

「俺は苗字は違うが零治というのは本名だぞ。因みにお前はいつごろこつちに来たんだ？」

「一ヶ月ぐらい前かな、あんたは？」

「もう十二年ぐらいかな？」

「12年前！？随分早いな」

「そうでもないさ、で話は変わるがあの後どうなった？」

「成功したよ……」

その言葉を聞くと零治は

「そうか」

と納得したように短く言った。するとチャイムが鳴り一夏達が帰ってくる。

「まあ、つもる話はまた後にしよう」

「ああ、そうするか」

こうして一時間目の休み時間は終わる。

一方リリウムのほうは聞きに行こうかどうしようかと悩んでいたらしいの間にか終わりのチャイムが鳴ってしまったのであった。

(うう、次の休み時間は必ず聞いてみせます！)

と心の中でガッツポーズをとるのであった。

そして二時間目の途中

「織斑くん、何かわからないことがありますか？」
と山田先生が訊いてきた

「あ、えっと…」

「わからないところがあつたあら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

と胸を張りそう言うで一夏が元気に

「先生！」

と言い、山田先生も

「はい、織斑くん！」

とやる気に満ちた返事で返す。

「ほとんど全部わかりません」

「え…。ぜ、全部、ですか…？」

「…織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

と言うとオルカが

「ハハハッ！古い、古い電話帳と、間違えて」

と一夏のこたえがつぼつたらしく笑う。すると

パンツッ！パンツッ！

と一夏とオルカの頭に出席簿が落ちる。

「リンクス静かにしろ。そして織斑、必読と書いてあつただろう

が馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちよつと…」

「やれと言っている」

「…はい。やります」

そしてなんとか授業は進み二時間目の休み時間

「ちよつとよろしくて？」

と金髪の女子が偉そうなたいどで話しかけてくるが一夏たちは気に

せず話している

「ちょっと」

そうまた話しかけるが一夏（一夏は本当に気づいていない）達は話している。

とうとう我慢できなくなったのか、金髪は机をたたき

「無視しないでくださります？」

と言ってきたそれに対し

「へ？」と一夏は言い

「はあ…」と零治は溜息をつく。そしてオルカは

「やれやれ、空気にもなれんか」と言う

すると目の前の金髪はわざとらしく声をあげる。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのに、なんなんですよその態度？」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

（貴族の務めか、レオハルトやジェラルドのほうが良かったですな）

「代表候補生ってなに？」

それを聞いて零治が説明する。

「はあ、一夏。読んで字の如く国家代表の候補生だ。まあエリートみたいなものだ」

そう言うとセシリアはずっこけそうになっていた体を持ち直し

「そう！エリートなのですわ！」

びしっと指をさして言い、続けて

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスが同じなだけでも幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「「「そうか。それはラッキーだ」「」」

「…あなたたち、馬鹿にしていますの？」

（（お前が幸運だつて言ったんじゃないか））

と見事に三人とも息がぴつたりになった瞬間である。

「まったくあなた達は男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい期待していたのに、まったくもって期待はずれですわね」

「俺に期待されても困るんだが」

「確かに一夏に期待するのは間違っているな」

とオルカが言い

「まあ、参考書を古い電話帳と間違えて捨てるぐらいだからな」と零治も言う

「お前ら！そんな馬鹿にしなくてもいいじゃないか！」

そんなコントみたいなことをしているとセシリアが咳払いをし

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたがたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

（こんなやつの優しさを貰うんだつたらバファリンの半分を貰ったほうがずつといいよな）

とオルカはくだらないことを考えている。

「ISのことであれば、まあ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試では唯一教官を倒したエリートの中のエリートですから」

「入試って、あれか？ISを動かして戦うやつなら俺も倒したぞ、教官」と一夏

「ああ、あれか俺も倒したなあ」とオルカ

「残念ながら俺は無かつたぞ」と零治

三人がそう言うと、セシリアは驚いている

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子だけではっておちじゃないのか？」

そう言うときセシリアからはピシツと亀裂の入るような音がした

「あなた！あなたがた2人も教官を倒したって言うの!？」

「うん、まあ。たぶん」

「一夏、たぶんって？」

「いや、だから、たぶん倒した」

「たぶん!？たぶんってどういう意味かしら!？」

「えーと、落ち着けて。な？」

「これが落ち着いていられ」

とそこで三時間目のチャイムが鳴る

「っ…！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって!？」

というセシリアの言葉に対して零治たちは

（（（これは、面倒なことになった）））

と黙っていた。

一方リリウムは

（うう、今度こそはと思ったのに、セシリア・オルコットって言

う人に先を越されて話せなかったです…）

と机の上になだれていたのだった。

第11話（後書き）

やっと本編に入ったんですがたぶんこれからリアルの用事が忙しくなり更新速度が落ちてくるかもしれません。本当に申し訳ないです。

一応、はやめに投稿していくつもりでいるので、どうぞよろしくお願ひします。m(´`´´)m

第12話(前書き)

今回も頑張ったお！

ていつわけどうぞ

第12話

第12話

三時間目の授業

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

と一、二時間目とは変わり、千冬が教壇で説明しようとしている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

そう、ふと思いついたかのように千冬が言い、さらに

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席：まあ、クラス長だな」

と簡単な説明を付け加える。すると女子数名が

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

と一夏を推薦する。

「では候補者は織斑一夏：他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

そう千冬が言っていると

「お、俺！？」

一夏がつい立ち上がってしまう。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな」

そう一夏が言いかけるが千冬の

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権など無

い

という言葉にはつきり切られてしまう。すると一夏は苦し紛れに

「じゃあ、オルカを推薦します！」

と言った。それを聞きオルカは

「さて、一夏。おれを巻き込むな！俺はやらんぞ！」

思わず立ち上がりそう言うが

「リンクス。邪魔だ、席に着け。それと拒否権は無いと言ったはずだ」

と一蹴されてしまう。するとオルカは零治のほうを見るとニヤリと笑い

「じゃあ、零治を推薦します！」

そう発言するのであったが零治は依然として涼しい顔をしている。

「他にはいないか？いないならこの三人の中から選ぶぞ」

千冬がそう言う。セシリアが机をバンツと机をたたき立ち上がる
「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのよ
うな島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」
というのを聞いて

（ほう、よくまあ、あの歳であんだけ長いセリフを咬まずに喋れるな）

と内容のほうは興味無しの戯言と思いつ別のところを感心する零治。

「一夏。お前、猿だつてよ」

「いやいや、オルカのことだろ？」

とオルカと一夏はヒソヒソ話す。

そしてセシリアはさらに言葉を続けて

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそ

れはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で」
そこでカチンというような音がすると

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

と一夏が頭にきて思わず反論してしまう。

「なっ……!?!」

と、セシリアは顔を真っ赤にして怒っている。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの!?!」
そう言うセシリアにたいして零治は軽く溜め息をつき

「はあ、先に日本は文化として後進的などと言って侮辱してきたのはそちらのほうではないか？それなのに自分だけが被害者面とは、まったくもって情けないな。代表候補生の名がきいてあきれる」
そう言い肩をすくめる。するとセシリアはわなわなと肩を震わせ

「決闘ですわ!」

と言い机をパンツと叩くセシリア。

(言い返せなくなったからってそれは無いんじゃない?)と思う
オルカ。

(やれやれ、上手くいかなくなると暴力で解決しようなどとは情けない。まあ、力づくでやるならこちらと同じやり方でやらせてもらうだけだ)と思う零治。

「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」と意気込む一夏。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
い いえ、奴隷にしますわよ」

そう言い敵意をむけた目で睨むセシリアを見て一夏は

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」と言う

「そう？何にせよちょうどいいですね。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですね！」
と威張るセシリア。

「ハンデはどのぐらいつける？」

「夏は男が本気で女子と力比べしたらまずいだろうと思いきや、聞いてく

「あら、早速お願いかしら？」

とセシリアは嘲笑うかのように言った。

「いや、俺がどのぐらいハンデをつけたらいいのかなーと」

そう言うとクラスからドツと爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんたちは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

「しかも、もし男女間で戦争が起きたら男性陣は三日と持たないと言われているんだよ」

と、みんな本気で笑っている。すると零治が口をゆっくり開く

「やれやれ、女性はISが使えて強から偉いとは、くだらんな。

男女間で戦争をしたら確実に負ける？確かに、戦力だけでみれば負けるだろう。まあ、第一に貴様らは戦争と言うもの勘違いしてると思うな。戦争と言うのは、ただ正面からどうとぶつかり合うような、おままごとではない。その君」

と言い、適当な女子を指差し

「君に守りたい家族や友人、親しいものはいるか？」

そう問うと

「は、はい。います」

「では、君が国家代表やトップレベルの實力をもつ専用気持ちのIS操縦者でしょう。だが、もしも君の守りたい人が男性陣に人質としてとられ、助けるには女性陣と敵対して殺さなきゃいけないと

言われたら君は女性陣の勝利のために人質を見捨てるかな？」

「そ、それは…」

と零治の問いに答えることができない女子に構わず喋りだす

「そして戦争というのは、人質をとったり暗殺など当たり前だ、とくに死に物狂いでもがくやつらは、どんなことをするかすらわからない。そして君たちは誰一人として死なずに戦争が終わるとでも思ってるのか？」

そう言う別的女子が

「でも、ISの力をもつてすればできるんじゃない」

と言ってくる。しかし零治はさらに問いかける

「いや無理だな、それはほぼ絶対といっていいほどありえない。

戦争は始まったら死人がでる。たとえ戦地にいなくてもな。そして君たちは最前線にたったとき目の前の相手を殺せるか？」

それを聞くと皆黙ってしまう。

「人類は古来から今日まで多くの戦争があつた。そしてその戦場に立つものは相手を殺し、殺した者の家族や親しい者から死ぬまで恨まれ続ける。たとえ自分は直接手を掛けてなくてもそんな言い訳は通用しない。殺された側の人間は殺した側全員を同じように恨むだろう。そして君たちは殺した側にたったとき、それを背負えるのか？戦争と言うのはそういうものだ」

そう言うところクラスの皆は少し想像したのだろうか、さっきまでの笑っていた雰囲気が消えていて、零治の話に集中している。

「そして現在の女尊男卑は今まで男尊女卑の時代を続けた愚か者のしつぺ返しだろう、だが女尊男卑を男尊女卑の時のようにくだらない理由でこのまま続ければ、やがて人類は壊死するだろうな…つとすまない。話が随分と脱線してしまつたな。まあ、今までの頭の片隅にでも置いておいてくれればいい。だが、君たちが使うISと言うのは条約で禁止されているが、普通に人を殺せてしまつ“兵

器”だ。たとえ物を切るためのカッターだって使うやつが使えば、人殺しの道具になる。つまりISはそういうことなんだ。君たちには、それだけは覚えておいて欲しい。長々すまなかつたな”

そう言うとしばしの沈黙が流れる。そしてその沈黙の中、千冬がきりだす。

「三嶋の言うとおり、ISはあくまでも“兵器”だそのことはしつかり覚えて置け。さて話がうやむやになりそうだったから戻すが、クラス代表の件は織斑、リンクス、三嶋、オルコットの四人で一週間後の月曜。放課後第三アリーナで行う。四人はそれぞれ準備して置くように。それでは授業を始める”

ぱんと手を打って千冬が説明を始めていき三時間目の授業が終わり。休み時間は先ほど一夏たちを馬鹿にしていた女子達が馬鹿にしてすまないなどと。謝罪をしてきたりしていたが一夏やオルカは「別に気にしてないから大丈夫」などと言い零治も「さっきのことを少しでも理解してくれば構わない」などと言っていた。

そして四時間目の授業も無事に終わり。昼休みの時間

「零治、オルカ、飯を食べに行こうぜ」と誘ってくる一夏。

「そうするか」

とオルカが言っていると、リリウムが近づいてきて零治に話しかける。

「あの、三嶋零治さん。ちょっと話をしたいんですがいいですか？」

それを聞くと零治は承諾し、一夏達には

「悪いな、一夏。先に行って食べてくれ”

と言って、リリウムについて行く。そして零治は屋上に来た。そし

て零治が喋りだそうとするとりりウムが

「いきなりすみません。あの、リリウム・ウォルコットと言う人は知っていますか？」

とおそろおそろ訊いてくる。

「ああ、知っているよ。俺が昔に買い物途中に転んでチンピラに絡まれたところを助けて百合の花の髪飾りをあげた子の名前だったな、そのとき俺はレイジ・クゼという名前だったかな」

と零治が言つとりりウムは少し涙目になり訊いてくる

「やっぱり、あのレイジさんなんですよね？」

「そうだ、久しぶりだな。リリウム」

と答えるとリリウムは零治の胸に飛び込み涙を流す。

「また、会えてよかったです。あのとき、あなたが死んで、とても辛かったです！」

そう言いながら零治の制服をぎゅっと掴み喋る

「本当に、本当に辛かったです」

「悪いな」

と静かに言いながら軽く頭を撫でる零治。そして少ししてリリウムは落ち着くと顔を上げると

グウと空腹の音がした。するとリリウムが顔を真っ赤にしてあたふたし始める。

「い、いえ、こ、これはその、あれでして」

身振り手振りして何か言おうとしているのを見て

「飯を食べにいくか」

そう微笑みながら言つと

「うう、はい……」

と顔を真っ赤にしたままで軽く俯き答える

「じゃあ、一夏達の所へいくか」

零治がそう言つと

「えっ？2人でじゃないんですか!？」

と驚くりりウム

「ん？ご飯は皆で食べたほうが美味しいぞ？」

そうさも当たり前のように零治は言うのにたいしてリリウムは零治の脛をゴツツ！と蹴る

「っ！ど、どうして蹴るんだ？」

とあまりの痛さに脛を押さえるしかしリリウムがなぜ怒っているかわからない零治

「さあ、知りません」

そう言いそっぽ向いてしまいうりりウム。

（まさか、まさかここまで鈍感だったとは…）

と怒る反面シヨックをうけるリリウムであった。

そしてこのあと零治は何とかリリウムを説得し、一夏たちとともに昼食をとったのであった。

「ぐぬぬ…」

放課後、そう言いながら机の上にくったりとうなだれる一夏。となりをチラッとみると余裕の表情のオルカ

「ほら、どうした」

と片手に参考書を持ちながら喋る零治。

「い、意味がわからん…」

そう一夏が頭を抱えていると

「ああ、織斑くんたち、まだ教室にいたんですね。よかったです」

「…はい？」

三人とも呼ばれて声が出たほうへ顔を向けると山田先生がいた

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言っ三人に番号が書いてある紙とキーを渡す。

「えつと、俺の部屋は決まっていなじゃなかったですか？前の話だと一週間は自宅通学してもらおうと言う話でしたけど」

と一夏が言つと、零治が

「一夏、そんなことしてたら誘拐されるぞ
肩を軽くすくめそう言つと

「あくなるほど」

と納得する一夏。すると山田先生が説明しだす。

「えつと、まあ、そういうことなので政府特命もあつて寮に入れるのを優先したみたいです。一ヶ月もすれば三人とも個室の方が用意できますので、それまでは相部屋で我慢してください」

「あの、部屋はわかつたんですけど、荷物のほうは一回家に帰らないと準備できない」

「荷物のことなら、私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

と、一夏の言葉をさえぎり千冬が言った。

「ど、どうもありがとうございます…」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。因みに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど…えつと、その、織斑くんたちは今のところ使えません」

そう山田先生が説明すると

「え、なんでですか？」

一夏がそう聞き、不思議そうにしているとオルカが

「一夏、同年代の女子と混浴したい気持ちはわかるが、我慢しろ」と一夏の肩をポンポンと叩きながら言ってくる

「お、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だ、駄目ですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

山田先生の質問に慌てて答える一夏

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それは問題のような……」

そして山田先生がそう言うと、廊下で女子達が

「織斑くん男にしか興味ないのかしら……？」

「それはそれで……いいわね」

「まさか、オルカくんか三嶋くん……！？」

「オル×織、いや三×織、逆もありかも！」

「三嶋くん、オルカくん、織斑くんの三角関係」

「「それだ！」」

「中学時代の交友関係を洗って！　すぐに！　明後日までには裏づけとって！」

などと騒いでいる。そしてオルカと三嶋は

「ま、まさか伝説のゲイヴンがここにいるとは……」

そう言い一夏の肩に乗せてた手をすぐさま放して距離をとり尻を押しさえるオルカ

「人の恋愛の価値観は自由だからいいんじゃないか？」

と先ほどの位置よりも２メートルほど離れたところで言う零治

「ち、違っつて俺はノーマルだ！」

そんなやり取りをみて山田先生は

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで失礼しますね。織斑くんたち、道草をせずにはちゃんと寮に帰るんですよ」

そう言うと千冬と共に教室を出て行くのをみると零治たちも部屋へ向うことにした。

「えーと、1025か。オルカと零治の部屋は何号室だ？」

「1026で一夏の隣だな」と言う零治

「あつ、俺も1026だぞ」と続けるオルカ

「いいな、俺も一緒の部屋になりたかったな」

一夏がそう言うと

「俺の尻が危なくなるからやだな」

とオルカと零治が同時に言う

「だから違うつて！そういう意味じゃねえよ！」

三人はそんなやり取りをしているといつの間にか部屋の前に来ていた。

「おつ、1025はここか。じゃあ俺はここだから、また後でな。夕飯のときに誘いに行くよ」

「ああ、わかった待っている」

零治はそう言いオルカと共に自分の部屋へ入っていきしばらくすると隣のものすごい音がする。そして零治たちのところに夕飯を誘いに一夏が来てドアを開けるとポロポロの姿の一夏がいた。そして夕飯はリリウムも呼び零治、オルカ、リリウム、一夏、箒の5人でとり、こうして一日が終わる。

そして翌日の放課後

「頼む、零治、オルカ。俺にISの使い方を教えてくれ！」

と一夏が零治、オルカ、リリウムの三人で話をしているところに助けを求めるように言ってくる。

どうやら凶暴な幼馴染と剣道をやった腕が落ちているから鍛えなおすと言われ命の危険を感じ取り零治たちのところに逃げ込んできたのである。零治は若干同情するが

「悪いな、教えてもいいんだが、クラス代表戦の後じゃなきゃ手の内を明かすことになってしまうからな」

と丁重に断る零治

「そ、そんなあ……」

ガクツとうなだれる一夏。すると後ろから

「一夏、情けないぞ」

と言いながら追いかけてきた箒。

「一夏さん、いきなりISの操縦をするのも大切ですが、生身で鍛えておくのも大切なことですよ」「

とリリウムが一夏を説得する。

「まあ、確かにいきなり専門外のことを付け焼刃でやるよりも、そっちのほうがいいかもしれないぞ?」

と付け加えるオルカ

「だから、せっかく幼馴染の箒さんが手伝ってくれるなら力を借りるべきです」

そうリリウムが言うと

「そうだな。みんなが、そういうなら頑張ってみるよ」

とやる気になった一夏。それをみてリリウムは箒に目で軽く合図を送ると箒はコクツと頷き一夏と剣道場に戻っていった。

そして零治はリリウムに少し手伝ってもらい、オルカは個人で訓練していった。

翌週の月曜。クラス代表決定戦

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ?」

「……………」

「目をそらすな」

一夏は箒と特訓していたがISのことを教えるのをすっかり忘れてしまっていた。それについていろいろと2人で話していると一夏

のISが届く。そしてさっそく装着しピットゲートに進む。

「行ってくる」

そう一夏が、篤、零治、オルカ、リリウムの方に向けて言うと

「あ…ああ。勝ってこい」

「一夏、お前の可能性をみせてみる」

「ま、気張れよ」

「頑張ってください」

と上から順に篤、零治、オルカ、リリウムの順に言うと、一夏はセシリアの方へ向かっていった。すると零治とオルカは第三アリーのAピットから出て行くこととする。

「零治さん、オルカさん。どこに行くんですか？」

とリリウムが聞いてくる。

「いや、相手の手の内がわからないほうが楽しいかと思ってな」

と零治

「俺も同じ理由だ」とオルカ

2人はそう言うとAピットから出て行った。

30分ちよつと時間がたち。一夏対セシリアの戦いが終わった。結果は一夏がギリギリのところまで負けである。

そして15分後に零治対セシリアの試合が行われることになっているので零治は再びAピットに来た。

「一夏、お疲れ。次は俺だな」

「ああ、零治も頑張れよ」

そして開始5分前

「では装着するか」

零治は自身のISを呼ぶ。

「来い、フアンタズマ」

すると零治を一瞬光が包むとその姿を現した

「す、すげえ」

「夏が驚いて言う」と

「ああ、まるで天使みたいだな」

そう箒がかえす。

「では、いつてくるか」

零治はそう言うとピットゲートを出て行った。

第12話（後書き）

ISのラウラがVTシステムで暴走するときに

「力が欲しいか」という台詞が

プロジェクトアームズのジャバウォックの

「力が欲しいか」という台詞とかぶるの自分だけだろつかと思うところ

そして次はとうとう戦闘シーンだ！

なので頑張ります。

よろしく願います。

第13話(前書き)

今回は短いです

第13話

第13話

零治がピットゲートをでていくと同時に反対側からセシリアがでてきた。

「あら、あなたも逃げずに来ましたのね」と腕を組みながら喋るセシリア。

「まあな。それより連戦でいいのか？ 負けたときに続けて戦ったからと言いつかれては困るからな」
「そうセシリアを軽く挑発する。」

「お気遣いはいりませんわ。代表候補生である、わたくしはあなたたちのような、男性が二人、三人とかかかってきたところでわたくしは負けませんので」

「そうか」

零治は短く答えると試合開始のブザーがなる。すると真つ先にセシリアがスターライトmk?を零治に撃つたが零治はそれを難なく回避する。そしてセシリアもまた狙いを定めて何度も撃ってくるが零治には掠りもせずにいる。

「どうした、代表候補生とはそんなものか？」
と余裕の表情で回避しながら言う。

「あら、あなたはさっきから避けてばかりですけど反撃はされないのかしら。それとも避けるのが大変で反撃できないのかしら」
「そう挑発をして返すが、セシリアは相手がいくら回避に専念しているとはいえ自身の射撃が一度も当たらないのには少しイライラしていた。すると零治はやっと反撃にでた。」

まずは左手に アサルトライフル、04 - MARVEをだしセシリアに対して撃つ。しかしセシリアも伊達に代表候補を名乗っているわけではなく、零治の射撃を回避していく。だが得意げに回避すると突如弾丸が直撃し、ひるむ。セシリアは零治の方をみると零治の右手にはレールガンRG01 - PITIONEが握られておりセシリアが体制を立て直そうとしている間にも零治の射撃は襲ってきてシールドエネルギーが削られていく。

「どうした、いい的だぞ。お前」
「くっ！」

セシリアが苦い表情をする。だがセシリアもただ撃たれるだけではなくなんとか体制を持ち直すと

「あなたのことを少し侮っていましたわ。ここから本気でいかせてもらいますわ！」

そう言つとセシリアはブルー・ティアーズのビット兵器を四つ出すと、それが零治にむけて攻撃してくる。

「さあ、わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲で踊りなさい！」

しかし零治は先ほどと変わらず余裕の表情で避けていく。そして何回か避けていくと

(…やはりな)
と何かに気づいた様子である。

「あら、また避けてばかりですか。さっきのように攻撃はしてきませんか？ さあ、あなたにはこのブルー・ティアーズを攻略することができませんか？」

そうセシリアが言つと

「バカバカしい」
と呆れる零治

「なんですって？」

「貴様の弱点はズいぶんとわかりやすい。故に俺から見たら貴様は只的だ。まと相手に攻略も何も無いだろう」

そう言い嘲笑う。

「なら、わたくしに勝ってみせまして！」

そう言い再びブルー・ティアーズを差し向けるセシリア。すると左手の武器をレーザーライフルER-0705に変えてビット兵器を撃ち落とし右手のRG01-PITONEでセシリアに当てていく零治

「貴様はビット兵器を使うとき制御に意識を集中していてそれ以外の攻撃が出来ない。しかもさつきより動きが鈍っているぞ」

「…！」

セシリアは自身の弱点を的確に指摘され少し苦い顔をする。そしてさらにビットを撃ち落していく零治。ビットを全部破壊してセシリアに突っ込む。するとセシリアがニヤリと笑う。

「かかりましたわ」

そう言うときスカート状のアーマーの突起が外れて動く。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」
するとミサイルが発射され零治に襲い掛かり爆発する。

「どうです？あなたが的だと言って侮った結果ですよ」
そう勝ち誇ったように言うセシリア。

「いや、やはり只の的だ」

と煙の中から声がし、そして煙が晴れると、そこには…ほぼ無傷の零治がいた。周りには薄っすらと緑色の膜が一瞬見えて、消えた。

「終わりだ」

そう言うとき零治は両手のER-0705とRG01-PITONEをしまい、イグニッション・ブースト瞬間加速を使い両手のレーザーブレード07-MONLIGHTで切り裂いた。するとセシリアのブルー・ティアーズのシールドエネルギーが0になり試合が終了した。

「お前は何のために戦う？お前の果たすべき貴族の務めとやらはなんだ、男を見下すことなのか？自分が果たすべき務めをもう一度見直し答えを見つけるべきだ。少なくとも俺はそう思う」

零治はそう言うときビットゲートにいったん戻り次のオルカとの戦い

に備える。

そして十五分後。

零治とオルカがアリーナの中央で向かいあっている

「お前と戦うのはラインアーク以来か」

そう懐かしそうにいう零治

「そうだな、あのときはあんたらの茶番につき合わされただけだけどな」

と皮肉に返すオルカ

「じゃあ、今度は本気で戦うか」

そう言つて下に降りる。オルカもその意図を理解したらしく下に降りる。

「PICなどはいじつておけQBを使ったら一瞬で壁に激突するぞ」

「わかつてる」

と注意する零治に答えるオルカ。二人は自身のISの設定を少々いじっている。

「終わったか？」

「ああ、終わったよ」

オルカがそう言つとちょうどよく試合開始の合図が鳴る。

すると最初に仕掛けたのはオルカである。

オルカのISストレイドが右手のアサルトライフルMR-R102と左手のマシガンXMG-A030で撃ってくる。零治はそれをQBを使い避けライフル051ANNRとアサルトライフル063ANNARで応戦する。オルカもQBを使いながら零治に再び攻撃し

ていく。

そして次第に二人の攻防は激しさを増し観客達の目を釘付けにする。

「す、すげえ…」

と大きく口をあけて驚いている一夏。

「ああ、どうやらオルコットのときは本気じゃなかったらしいな」と篤も隣で見ていると驚いている。

「やはりオルカさんも強いですね」

と、平然と言うリリウム

「はああ…すごいですね。三島さんとリンクスくんは」

山田先生もあの二人の動きにはとても驚いているようだった

「ああ、そうだな。この学園でトップレベルだろう」

(二人のあの動きはなんなんだ!？どちらも尋常じゃない)

と表面上は冷静に見せても内心ではかなり驚いている。

そしてそんなやり取りをしていると戦局が大きく動いた。今まで二人とも手で持っている武器で削りあっていたが、オルカが右背のグレネードGOTOを零治の一瞬をつき撃つ。すると零治は、直撃はしなかったもののダメージ大きく受けよろめいた。そこにオルカは零治に対して追撃をしに突っ込んでくる。零治はそれを好奇にして両背のレーザーのEC-0307ABを撃つ。するとオルカはとつさにQBで避けるが半分ほど当たってしまった。オルカはすぐさま体制を立て直し零治を見ると両手の武器で再び攻撃を再開する。そして零治も同じように両手の武器で攻撃を再開した。

「ふむ、今のですとめる事ができたと思っただがな」

涼しい表情で言う零治

「誰がそう簡単にやられるか」

そして再び撃ち合ってから少しするとオルカのシールドエネルギーは0になり零治も残り二桁ギリギリのところまで削り勝ったのだ。

「やつぱり、あんたは強いな」

「お前もな、そっちの弾丸があと一発でも貰ってたら負けてたのはこちらだ」

そう言い合つと二人ともピットへ帰還した。

（俺、あの2人と戦うんだよな。勝てるかな）

一夏は2人の戦いが終わるとそう思っていた。

そしてその後はオルカ対セシリアであり。勝敗はオルカの勝ちであり、勝負の途中オルカも零治と似たようなことをセシリアに言っていた。その後の一夏対オルカ、零治対一夏は両方とも一夏の負けでクラス代表決定戦が終わった。

セシリア side

セシリアはシャワーを浴びながら今日のことを思い返していた。

織斑一夏、セシリアは自身が勝つたのに腑に落ちないでいた。セシリアは思う。その原因はきっと彼の目だろうと、他のものに媚びない目であった。

（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった…）

セシリアの記憶には自身の父親が弱々しい態度でいたことを思い出す。そしてISが発表されてからはそれが更に著しくなったセシリアの父親。それとはまったく逆の目をしていた一夏。いや、一夏だけではなくほかの二人もそうだったと思うセシリア。

そして他の二人を思い出すと「何のために戦う？自身が果たさなければいけない貴族の務めは何か？」その問いかけが蘇ってくるセシリア。

（自身が果たすべき貴族の務め…）

そう思うとセシリアは母親を思い出す。セシリアの母親は女尊男卑の前からいくつもの会社を経営し、成功を収めていった人だった。厳しかったが、憧れの人だった。だがもういない。三年前の大規模な事故で両親が二人とも他界してしまう。そして残されたのは莫大な遺産。それを金の亡者から守るために必死に努力をした。そしてやっとの思いで国家代表候補生に選ばれ両親の遺産を守ることができた。だがいつからだろうか、自身は相手のことをよく知らずに自分の勝手な思い込みによって格下だと決めつけていくようになったのは。セシリアはもう一度、自分の憧れていた母親を思い出す。すると自身の母親は相手を一方的に見下してなどいなかったことを思い出す。

（母は、相手の評価できるところはちゃんと認めていました。なのに、今のわたくしは…）

そう思うとセシリアは、今まで自身がしてきたことは自身が憧れていた母の背中とは全く違うことに気づく。

（今までのわたくしは空っぽのままでしたのね）

そうセシリアはわかると

（きつと今からでも遅くはないはずですね。見付けてみせます。

わたくしの答えを）

そう決意するのであった。

side out

翌日、朝のSHR

「では、一年一組の代表は織斑一夏さんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

と嬉しそうに喋る山田先生

「先生、質問です」と一夏が聞く

「はい、織斑くん」

「俺は昨日全敗したのですが、なんでクラス代表に？全勝した零治がなるんじゃないんですか？」

「それは」

と山田先生が説明しようとする

「それは、俺が辞退したからだ」

そう言う零治

「俺は、一応あくまでも社長というものになっていて、いつ緊急の呼び出しが来るかわからんからな」と、続けていった。

「因みに、俺はISの男性操縦者というのが発覚したのが遅かったためにIS学園に入れることを優先して企業からちゃんとしたバックアップをうけてないからな、それに比べ一夏は倉持研究所からうけているから一番データを取りやすくなっているだろ、だからだ」
そう言うオルカ

「じゃあオルコットさんじゃ駄目なのか？」

と聞く一夏

「いえ、わたくしも辞退させていただきましたわ。理由は実力が全てなどと安直すぎる考えではいけないと思ひまして辞退させていただきましたわ。なので一夏さんよろしくお願ひしますわ」
そう言うつと

「では、クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

千冬がそう言い、織斑一夏がクラス代表に決定された。

第13話（後書き）

相変わらず戦闘描写が下手くそですいません（汗
本当に難しいなあ…

そついやA C f aでアルテリアカーパス襲撃のブリーフィングで
てくるノブリスってレオハルトの時のアセンというのを今更気づい
た自分

第14話(前書き)

とりあえず次回はきつとみんな大好き酢豚ちゃんが登場します。

そして今回も駄文で申し訳ないです。

第14話

第14話

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、三嶋、リンクス、オルコット。試しに飛んでみせろ」
千冬がそう言うのと一夏以外の三人はすぐに展開するが一夏は展開ができずにいた。

「早くしろ。他の三人は展開し終わってるぞ。熟練した操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

一夏はそう千冬にせかされると右腕を突き出し集中して心の中で

(来い、白式)

と呟くと展開に成功した。すると千冬から飛べと指示が出る。四人はそれを聞くと急上昇するが一夏だけはまだ慣れて無い様で上昇速度は三人よりも遅かった。すると千冬から

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」とお叱りの言葉をつける一夏。するとオルカが

「一夏、イメージは所詮イメージだ。やりやすいようにやればいい」

そうアドバイスをする。

「そう言われても、大体空を飛ぶ感覚が上手くつかめないんだよ。だいたいなんで浮いてるんだこれ？」

一夏のその言葉に対して零治が

「半重力力翼と流動波干渉の話になるがそれでもいいなら説明してやるぞ」

ニヤリと笑いそう言うのに対して一夏はすぐさま「いやいい、俺の頭ではは理解できない」そう断る。

そのやり取りをみてセシリアは微笑むと一夏は

「どうした、なんか楽しいことでもあったのか？」とセシリアに尋ねた。

「いえ、とても仲がいいのですねと思ひまして」

「そうか？今のはなんか遊ばれてた気がするけど」

そう答えてガクツと肩を落とす一夏。

「そういえば一夏さんは零治さんやオルカさんと放課後訓練していらっしやるのですよね？」

とふいにセシリアが聞いてくる。

「ああ、そうだけど。どうしてだ？」

「もしよければ、わたくしも御一緒したいと思ひまして」

「いや俺も零治達も大丈夫だろうけどいいのか、そっちの練習のを遅らせたりしないか？」

「いえ、それは大丈夫ですわ。あの戦いの後、代表候補と驕っていた自分が馬鹿らしく思ひまして、一から改めることにしましたのです。でももしよければと思ひまして」

そう言うとその会話を聞いていた零治とオルカが「いいんじゃないか」とすぐに言ってきた。

そしてそんなやりとりをしてるといきなり

「一夏！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

と篤が山田先生からインカムを奪い怒鳴っている。そして千冬が指示を出す。

「四人とも地表から十センチのところ急に降下と完全停止をやってみる」

それを聞く四人。

「では、零治さん、オルカさん、一夏さん。お先に」

そう言いセシリアは地上に向かう。それを見て零治も

「では、俺も先に行かせてもらおう」

と言い指示を完璧にこなす。その2人を見て一夏は

「二人ともすごいな」

と感心している。そしてオルカも

「じゃあ次、俺行くわ。一夏、地面に激突するなよ」

そう言い残しオルカも指示通りに十センチのところ止まる。

そして一夏も同じようにやろうとする。するとものすごい衝撃音と共に地面に突っ込んでいた。

「馬鹿者。地面に激突しろとは誰も言ってないぞ。しかもグラウンドに穴を開けてどうする」

千冬が呆れたように言う。すると箒が

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えただろう。大体だな一夏、お前と言うやつは昔から」

そう腕を組みながら言っている

「やつぱり激突しやがったな。で、大丈夫か？頭とかに怪我は…ああ、頭は手遅れだったな」

オルカがやれやれといった感じでそう言う。「手遅れじゃねえよ！」と返している一夏。

「…ISを装備していて怪我をするはずないだろう…」

と自分が一夏に話しかけているのをさえぎられて機嫌がよくないのか少しとげとげしく言う。

「篠ノ之さん、例え怪我をしなくても衝撃を完璧には消せませんのよ」

箒の発言に対してそう言うセシリア。すると箒は黙ってしまう。

そして一夏が立ち直ると千冬が

「四人とも武装を展開しろ」

そう言うalmaz一夏が展開する。

「遅い、0.5秒で出せるようにしろ」

と厳しいことを言われ次にセシリア

「さすが代表候補生。だがそのポーズは横に向かって撃つ気か？正面に展開できるようにしろ」

これもまた厳しい評価をだされ、セシリアは返事をする。そして零治とオルカはほぼ同時に出す。

「ふむ、特に言うことはない」と及第点を貰う。

「三嶋、リンクス、オルコット。近接用装備を展開しろ」

そう言われると零治とオルカは両腕についているレーザーブレードをしまい零治は射突ブレードもといとつつきのKIKUを装備し、オルカもとつつきのMUDANを装備する。だがセシリアだけはなかなか出せずにいる

「まだか？」と千冬にせかされる。するとセシリアは

「インターセプター！」

とほぼヤケクソ気味に叫び武器を呼び出す。

「…何秒かかっている。だから三嶋やリンクスに近接武器でやられるんだ」

と注意されガクツと肩を落とし落ち込んでいるセシリアであった。

すると授業終了のチャイムが鳴る

「今日の授業はここまでだ。織斑グランドを片付けておけよ」

と言うと授業が終わる。すると一夏が零治とオルカのほうを捨てられた子犬のような目で助けを求めてくる。すると零治とオルカは一夏のほうを向き親指をグツと立てると更衣室の方にむかって歩き出していった。

そして夕食後の自由時間

「織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「…………おめでとう…………」

クラッカーが鳴りクラスメイトたちが盛り上がっている。

そんななか零治やオルカ、リリウムの三人は騒ぎの中心ではないところで飲み物を口にして喋っている。するとセシリアが近づいてくる。

「あら、シエリーさんたちはあの中に入られないのですか？」

と聞いてくるセシリア

「私は賑やかなのは好きですが、あれはなんと言うかちょっと
そう言い、零治も

「いや、騒がしいのは嫌いじゃないが流石にあれほどになるとちよつとな」

と苦笑いしながら返しオルカも

「右に同じ」

と返すのであった。

「それはさておきまして、前のクラス代表戦のときに言われたことなんです、まだ自分がどのようにすべきかなどと決められてませんの」

そう言い話をきりだすセシリア。

「いいんじゃないかそんなに急がなくても、まだ若いんだ時間はある」

と零治は言った。

「ふふ、そのように言ってくれると思っていましたわ。ですのでわたくしは自信をもって言える答えをきつと見つけてみせますわ」
セシリアは自信満々にそう宣言する。

「そうか、せいぜい頑張れ」

とオルカは短く返すがどこか期待しているような感じに言う

「では、いつか聞かせてもらえる日まで楽しみに待たしてもらおう」

そう零治は微笑みながら言う。そんなやりとりをしていると

「はいはい、新聞部二年の黛薫子です。話題の男子三名に特

別インタビューをしに来ました〜！」

と女子がやってきてまず一夏にインタビューする。

「クラス代表になった感想を、どうぞ！」

そう言いながらボイスレコーダーを一夏に向ける黛薫子。

「えーと…まあ、なんとというか、頑張ります」

「えー。もつといいコメントを言つてよ」

「自分不器用ですから」

「うわ、前時代的！まあ適当に捏造させてもらつよ」

と堂々と捏造発言をして次にオルカに対してコメントを貰いに行った。

「はい、男子二人目リンクスくん！いろいろ謎に包まれていて知りたいけど、今はなんでもいいんで是非一言コメントを！」

「じゃあ、俺に挑むやつはマツハで蜂の巣にしてやんよ」

「いい！そういうの待つてたんだよ！」

と言いはしやぎながらメモしていく黛薫子。そして次に零治に対してボイスレコーダーを向ける

「男子三人目の三嶋くん！レイレナード社の社長でもあり男性操縦者！社長としてのコメントを貰いたいけどそれはまた今度にさせてもらつよ。今は学園の生徒、一個人としてのコメントをちょうだい！」

「ふむ…では、誰であろうと、俺を越えることなど不可能だ。はどうだろうか」

「いいね！そういうのしびれる！じゃあ最後にセシリアちゃんも」

「そうですね、わたくしの名にかけまして頑張らせていただきますわ」

「うーん、かつこいいんだけどパンチが効いてないというか…そうだ！織斑くんに惚れたからでいいよね」

「なっ、違います一夏さんには惚れてませんわ！」

「そつか、一夏くんには惚れてないんだ」

と意味ありげに言う黛薰子。

「じゃあ、とりあえず四人とも並んでね。写真撮るから」

そう言いい夏、零治、セシリア、オルカの順に並ぶ

「あ、あの撮った写真はいただけますよね？」

と聞くセシリア

「そりゃもちろん四人ともあげるから心配しないでね。それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと…」

一夏が困惑していると零治とオルカが

「74・375」

そう答えると「せいかい」と返ってきてデジカメのシャッターが切られる。しかし写真にはいつの間にか他の生徒が大量に入り込んでいた。そしてリリウムはちゃっかり一夏と零治の間に入り零治の腕を掴み勝ち誇ったような顔をしている。

「いつのまにはいったんだリリウム？」

零治はあの一瞬でよくはいれたなと感心している

「さあ、いつでしょう？」

と微笑みながら言うリリウム

そして周りは男子の中に一人だけ写るセシリアに

「抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

などと女子がキャツキャツ騒いでいる。

そしてこの騒ぎは夜の十時過ぎまで続き幕を閉じた。

第14話（後書き）

最近、A C f aでアステリズムを使ってみたがジュリアスはよくあんなに上手く動けるよなと関心します。

第15話(前書き)

最近、気温の変化が激しいけど殆ど室内にいる作者は大丈夫! って
自慢できないことなんですけどね...orz

今回はみんなのアイドル酢豚ちゃん登場!
因みに作者は酢豚ちゃん結構好きです

第15話

第15話

一夏のクラス代表就任パーティーの翌日の朝

「織斑くんたちおはよー。転校生の噂、聞いた？」
零治たちが席に着くとクラスメイトに話しかけられる。

「転校生？この時期に？」

（あれか、男性操縦者に接触するためにきたのか）

零治は一夏がクラスメイトに答えてるときにそう考えていた。

「なんか中国の代表候補生らしいよ」

「へー、どんなやつだろうな」

一夏は中国というのに何か関心があるのか少なくとも興味がわいていた。

「さあな、まあ少しは気をつけることだな」

と零治が少し警戒するように促す。

「えっ？なんでだ？」

そう一夏がぼかんとして聞いてくる。

「お前は、自分の立場がわかってないのか…」

少し呆れたように言う零治。

「要するに男性操縦者である一夏さんたちになんらかの接触をするために来たかもしれないというわけです」

リリウムが零治のかわりに説明すると一夏は納得した。

「まあそういうことだ。とりあえずは来月のクラス対抗戦のことを考えておけ」

零治がそう言った。

「そうだな、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困るぞ一夏。男たるものそのような弱気でどう

する」

一夏の発言に対していつの間にか幕がずいっと割って入ってくるとクラスメイトが次々に

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

「織斑くんフリーパスのためにも頑張ってね！」

「代表が専用機持ちはいまのところうちのクラスと四組だけだから余裕だよ」

などと言ってくるのにたいして一夏は適当に「おう」と相槌をうつていると

「その情報、古いよ」

教室の入口のほうから突然声がする。

「二組のクラス代表も専用気持ちになったからそう簡単には勝たせないよ」

腕を組みながらそう言う女子。するとその女子をみて一夏が言った。

「もしかしてお前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告にきたってわけ」

不適に笑いながら言うが

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

とせつかくの登場を一夏に台無しにされてしまう。

「んなっ…！？なんてこと言うのよあんたは！」

さつきとは口調が変わる鈴。すると後ろから声がかかる。

「おい」

「なによ！？」

鈴は呼ばれた相手にとっさに強く返事をしてしまうとバシッ！と爽快な音が鈴の頭に落ちる。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん…」

鈴はまるで熊でも見たかのようにしている。

「織斑先生と呼べ。そして入口を塞ぐな」

「す、すみません…」

さっきまでの威勢は嘘のように静かになっている鈴。

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

そう少し威勢を張るものの

「さつさと戻れ」

「は、はいっ！」

と千冬に一蹴されてしまい脱兎のごとく二組に戻っていく鈴。そんな光景をみて零治とオルカは

(こいつはまた面倒なことになりそうだ…)

そう心の中で呟いた。

「さて、シエリー」

「はい、なんでしょうか織斑先生」

千冬がリリウムを呼ぶ。

「お前の専用機が今日届くそうだ。放課後にもチェックしておけ」

「わかりました」

それを聞くとクラスメイトたちは「いいな」など羨ましそうに言っている。

「リリウムは専用機あったのか」

零治は若干驚きリリウムに聞いた

「はい、私の親が勤めているBFFという企業のテストパイロットをやっていますから」

「よりによってBFFとはまあ、なんとも」

BFFというのを聞いて零治は苦笑いしながら言う。

「私もそう思いますが、こちらのBFFの社員はなぜかみな心が綺麗みたいです」

「こつちの会社もそうだよ。そういえばBFFとは企業提携してたよな」

「はい、なので今日の放課後に、その、専用機の調整を少し見てもらっていいですか？」

「ああ、構わない。俺でよければ手伝おう」
零治がそう言うとりリウムは思わず顔が綻んでいた。

そして午前中の授業が終わり昼休み、零治は一夏たちと学食に行く。

「待ってたわよ、一夏！」

とラーメンを持ちながら立っている鈴がいた

「鈴、そこにいると食券出せないし、通行の邪魔になるぞ」

一夏はまたも鈴の登場をスルーした。

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

鈴は朝のときもスルーされて少し落ち込んでいるようである

「ラーメンのびるぞ」

一夏はすかさず注意をすると

「わ、わかってるわよ！大体、アンタを待ってたんでしょうが！

早く来なさいよ！」

とヤケクソ気味にいう鈴。

「ちょうど一年ぶりか？元気だったか？」

「元気だったわよ。あんたこそ、たまには怪我病気をしなさいよ」

「どういう希望だよ……」

そうやりとりをしていると注文の品ができて席に着く

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさんは元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそニュースで見たときびっくりしたじゃない」

などと鈴と一夏が話していると

「一夏、そろそろどういふ関係か説明してほしいのだが、まさか付き合ってるのか!？」

疎外感からか筈が少し棘をふくんだ声で聞いてくる。

「べ、べべべ、別に」

「いや、全然違うぞ。ただの幼なじみだよ」

と鈴が何か言いかけたが一夏がすぱっと切ると鈴が無言で一夏を睨んでいる。

「？何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

鈴が一夏に怒るが一夏は理由がまったくわからず頭の上に？マークを浮かべている。

「ほら鈴、こっちが前に話した筈だ。小学校の頃、俺が通っていた道場の娘」

「ふうん、そうなんだ…初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

鈴と筈が挨拶を交わす。

「ねえねえ一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「まあ、成り行きでな」

「あ、あのさあ。アンタのISの操縦、見てあげてもいいけど？」
そう鈴が唐突に話を切り出す。

「そりゃ助か」

一夏が助かると言おうとしたときダンツ！とテーブルが叩かれる。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

とものすごい勢いで言う筈。

「あたしは一夏に言ってるの。関係ない人は引っ込んでよ」

「か、関係ならあるぞ。一夏にどうしても頼まれてるのだ」

鈴と筈が言い争っているとき零治は二人をこれ以上ほうっておくと厄介なことになると思い

「まあ、二人とも落ち着け」

と、いったん止める

「凰、お前は二組のクラス代表だろう。まだクラス対抗戦が終わってないんだ。ここで一緒に練習をするということは互いに手の内を明かすことになる。しかも一夏は初心者だ、代表候補のお前に手

の内をばらしてしまつたら、もはや勝負にならないから、せめて終わるまで待てないか？」

零治はそう言いこの場を鎮めようとする。鈴は少し考えると

「まあ、そう言われるとそうね」

そう言い納得する。

「で、あんたは誰？なんで一夏以外に男がここにいんのよ？」

「ふむ、一応それなりに有名だとは思つたんだが」

と零治が言つと鈴はじろじろと零治をみて

「ああっ！アンタ、レイレナード社の社長じゃない！」

と思わず大声を出してしまう鈴。

「ああ、そのとりだ。初見となる、三嶋零治だ。ここでは社長とかそういうのは気にしないでもらえると助かる」

「そう、あたしは凰鈴音よ。よろしく」

お互いに自己紹介をする零治と鈴。

「そういえば鈴、親父さん元気にしてるか？」

と一夏がふと思ひ出したかのように鈴に聞いた。

「あ……。うん、元気 だと思つ」

鈴は言葉を濁すようにすると急に表情が陰りだす。それを零治はチラッとみると

「さて、一夏。もうそろそろ授業の準備をしないと織斑先生にどやされるぞ」

そう話しを切り出した。

「やべ！もうそんな時間か」

と、あわてだす一夏につられて聞き耳を立てていた周りの生徒たちも、いそいで片付けを始める。

「悪いな鈴。積もる話もまた後でな」

そう言つと一夏はすまんと軽く謝り教室に向かつていきセシリアやオルカ、リリウムも他の生徒とともに移動しだし、零治も教室へ向かおうとする。

「ねえ、アンタ。今の私のために言ってくれたの？」

鈴が唐突に零治に聞いてくる。

「何のことだ？俺は、いつもどやされている一夏のために言っただけだが」

「そっか、ありがと」

「礼を言われる覚えはないんだがな。それよりも鳳お前も、早く教室に行ったほうがいいぞ」

「そうね。あっ、あとあたしのことは鈴でいいわよ」

「そっか、では俺のことも零治でかまわん。ではな」

そう言い零治は教室に入ってしまった。

そして放課後第三アリーナ

零治はピットのほうでリリウムの専用機の調整の手伝いをしていて、オルカ、一夏、セシリア、箒はグラウンドのほうで練習をしている。

「零治さん、普通のISでもQBをすることってできるんでしょうか？」

「できなくもないだろうがPICやら何やらをいじらなければいけないから少し面倒だぞ」

「では、BFFとレイレナードが共同して作ったブースターをスカート部分につけてみたらどうでしょう」

「そうだな試しにやってみるか」
そう言うとりりウムの専用機、名は向こうと同じでアンビエントという。それに粒子変換などして付け加えいく。

「PICの調整をしっかりとしろよ。でないと壁に衝突することになるぞ。なんなら前にオルカと戦ったときのデータを参考にすること？」

「そうですね、じゃあお借りします」

リリウムはそう言うとき零治が出してくれたデータをもとに調整して

いきなんとか完成する。

「試しに動かしてみるか？」

「はい。そうしてみます」

するとリリウムはISを装着する。リリウムのISはアンロックユニットが盾に似たような形が二つありそこに自信をレーダーから身を隠すためのECM発生装置とミサイル、そして先ほど追加したブースターが付いており、スカートの部分には左右の横にブースターが1つずつ、後ろの腰のところになつており全体的に見るとリリウム自信が小柄なためISが少しごつくみえる。

「では、さっそくいきます」

リリウムはそう言うのと擬似的なQBを確認する。昔のように動いてみるが前より体に負担がかかる。

（やっぱり、AMSがなければ乱用するのは難しいですね）

そう思いながらも確認していく。そして疑似QBが問題ないと確認すると次に武装の確認をしていきなにこともなく無事に終わるとピットゲートに戻る。

「どうだった？こっちもデータを見た限りでは問題はないが」

「そうですね、データ上では問題ないですが乱用すると体に負担がかかりますね」

そう言いながらISを解除して地面に付くと先ほどの疑似QBの反動だろうか、足元が一瞬ふらつき転びそうになる。すると零治がとっさに抱きかかえるように支えた。

「つと、大丈夫か？」

「え、ええ。大丈夫です」

「ん？どうした、顔が赤いぞ。本当に大丈夫か？」

「ふえ？だ、大丈夫です」

と慌てて必死に言うリリウム

「そうか、あまり無理はするなよ。少し休んでおけ」

「は、はい」

「では、俺はちょっと一夏たちの所へ行ってくる」

「…えっ？」

「どうやら向こうが少してこずっているようだからな」
そう言うと零治はISを展開して一夏達のところへ向かった。リリウムはそれを見送るとガクツとうなだれていたのであった。

こうして放課後の練習が終わり零治たちは部屋に戻る。そして夕食が終わり八時過ぎ。

零治は職員室でとある用事をすませて部屋にむかって歩いている。そして角を曲がるとボストンバックを持って走ってくる鈴とぶつかり二人とも転んでしまう。

「っ痛！なんなのよもう！」

「すまん、こちらの不注意だったな」
まず謝っておく零治

「なんだ、アンタか」

鈴はぶつかったのが零治だと気づく

「ああ、鈴か」

そう言い鈴を見ると目が赤く少し腫れてるのを見ると泣いていたの
だろうと気づく

「どうした、なにかあったのか？」

「なんでもないわよ」

と言い俯く鈴だが今にも泣き出しそうな声である。

「なんでもないなら、なぜ泣きそうなんだ？」

そう言うと鈴は

「だ、だつてえ」

と再び涙を流し始める。

（さて、これでは周囲から見ると俺が泣かしたように見えるんじゃないのか？）

「まあ、なんだ。オルカもいるが、よければ俺の部屋で茶ぐらいはだそう。それで落ち着け。こんなところで泣いているのもあれだろう」

「…うん」

零治の言葉に対してそう言い頷く鈴。

「ほら、立てるか」

そう言うと鈴は無言で頷き立つ。すると零治たちは部屋へ行きドアを開ける。するとオルカがベットの所で寝そべっていて零治の方を見る

「わー。しゃっちょさんが女の子を泣かしたヨ。しかも部屋にまで連れて来たヨ。あれか押し倒したのか」
と微妙な日本語でしゃべってくる。

「へんな言い方をするな。そしてあからさまに面白がって誤解をうむような言葉を発するな」

「きやー、怖いヨ」

「その口を閉じなければ、足をまったく動かないように地面に固定して上半身にV O Bをつけるぞ」

「すまん。俺が悪かった」

オルカが謝ると零治はお茶を入れて椅子に座っている鈴に渡す。

「すまんな、緑茶しかないが我慢してくれ」

零治は鈴にお茶を渡し鈴は「ありがと」と言い受け取ると一口飲む。そしてどうやら落ち着いたのか泣き止んでいた。

「どうだ、少しは落ち着いたか？」

「うん。大丈夫」

鈴が大丈夫と言うのを聞くと「そうか」と短く答え自分も茶を飲む。そして少し沈黙が続くと

「ねえ、理由聞かないの？」

と鈴が聞いてくる

「そうだな。さっきは、ああ言ったがよく考えれば人に話したく

ない理由もあるだろうと思ってな」

「そつか、じゃあ言えば聞いてくれるの」

「ああ、聞いて相談に乗るまでだがな」

「なあ、お前が泣いている理由って、さっき隣の一夏の部屋でものすごい音がしたのも関係あるの？」

とオルカが聞いてくる。

「多分そつかな。さっきさ、一夏の部屋で喧嘩しちゃって」

鈴が話し始めると二人は静かに理由を聞く。そして要約すると

鈴が一夏に中国に帰るときに日本で言う“私の作った味噌汁を毎日”の味噌汁の部分を酢豚に代えて言ったのだが一夏は毎日ただ単に酢豚をご馳走してくれると思っていたというのだ。

「なんていうか、なあ…」とオルカ

「ああ…」とそれに肯定するかのように零治

「なんなのよ！」と二人の微妙な反応に少し怒る鈴

「いや、な。あの鈍感にそんな言い回しをしたら…なあ？」

とオルカは言い、それに続いて零治も

「まあ、例え味噌汁のほうで言ったとしても気づかなさそうだけどな」

そう言い軽く肩をすくめる零治。

「うう。そんなこと言ってもそのときはそれで精一杯だったのよ」と落ち込む鈴。

「まあ、俺やオルカがどうしろだとは言えないがもう一度話し合ってみたほうがいいとおもっぞ」

「そうね。そうしてみるわ。じゃあ今日はありがとう色々話したら少し楽になったわ」

「そつか。まあ、愚痴ぐらいだったら俺もオルカもまた聞いてやる」

「そう。じゃあそのときにはお願いね」

そう言うと鈴はボストンバックを持って零治たちの部屋をでて自分

の部屋に帰っていった。

第15話（後書き）

次はやつとクラス対抗戦だ！

そういえばフロムがガンダムUCのゲームを作るとか言ってたがどうなるんだろうか？

第16話(前書き)

今回はいつもより無駄に長いですがよろしくお願いします。

第16話

第16話

一夏と鈴が喧嘩をしてから数週間がたち五月になるが二人はいまだに仲直りができずにすごしていて零治たち（主に零治）が鈴から愚痴などを聞くのがほぼ日課になりかけていた。

そして来週から対抗戦が始まるので、零治は自分で愚痴を聞くなどと引き受けたがせめて対抗戦が終わる前後には仲直りをして欲しいと切実に願っていた。

そして放課後、実質最後の訓練をしようと零治たちは第三アリーナのAピットにきてドアを開ける。

「待ってたわよ、一夏！」

鈴が腕をくんでピットにいるのである。零治はそれを見ると

（ふむ、やっと仲直りをするのか。長かったな）

などと今までのことを感傷していると、いつの間にか鈴と一夏が言い争っていてだんだんと雲行きが怪しくなっていく零治が現実に戻り耳を傾けると

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアంతタよ！」

鈴が怒っておりそれに対して一夏は

「うるさい、貧乳」

と口にするが、その言葉は鈴に対して、いや、全国の胸の大きさに悩んでいる女性をすべて敵にまわす発言であった。するととても大きな轟音がピット内に鳴り響きまわりをみると壁に直径三十センチほどのクレーターができていた

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

と一夏はあわてて誤るが

「今の『は』!?今の『も』よ!」

一夏の謝罪は今の鈴には逆効果だったらしく更に怒らせてしまう

「もう、いいわ。全力で叩きのめしてあげる」

鈴は最後に一夏をキツと睨みピットを出て行った。零治とオルカはその後姿をみて

((今日もか…これは、面倒なことになった))

と思うのであった。そして零治とオルカはその日の夕食が終わった後の自由時間は鈴の相談(愚痴)を聞くのであった。

試合当日、第二アリーナ第一試合 一夏対鈴である。

二人は空中で向かい合っている。そして試合開始のブザーが鳴ると鈴が近接武器で先制攻撃をしかけそれを一夏は雪片二型で応戦するそして一夏が距離をとろうとすると鈴の肩アーマーがスライドして中心が光った瞬間一夏は見えない衝撃によって吹き飛ばされる。

そしてそれをピットからリアルタイムモニターで見ていた篤が

「なんだあれは……?」

と呟き、それに答えたのはセシリア。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成して、余剰で生じる衝撃自体を砲弾化して撃ち出す。ブルー・ティアーズと同じ第三代型兵器ですわ」

「砲身が見えないんじゃない?」

そう言い篤が少しうろたえている。

「なんだ、発射口が見えるなら避けれるじゃないか」

と余裕の表情で答える零治に篤とセシリア、近くにいる山田先生も驚いている。そして千冬もその言葉に興味をもったのか少し耳を傾けている。

「な、なぜそんな簡単に言えるのだ？」
そう篤が質問してくる。

「ん？そんな単純なことを説明するのか」
零治はめんどくさそうに軽く肩をすくめる。すると零治の変わりに
リリウムが説明をはじめめる。

「まあ、殆どの人もそうだと思いますが、鈴さんは射撃をする
ときに自分が撃つ場所を無意識的に見ています。そして発射口が見え
てるということは撃ってくる場所がわかります。さらにあの衝撃砲
の弾道は直線にしか飛びません。さらに撃つ瞬間には中心が光ると
いうことはタイミングもそれでわかりますし、さらに相手の目線や
空気の歪みなども合せて見ればそれなりの操縦者なら避けるのには
そんなに苦労はしないかと思われます」
とリリウムが言う。零治は「そういうことだ」と言った

それを聞いた篤はそんなことが人間にできるものかと思うがセシリ
アは零治と戦ったことを思い出すと零治やオル力ならできらるらう
と思った。

「だが一夏は初心者だぞ、そんなこと出来るはずがないだろう」
と篤が言うのにオル力が

「まあ、確かにそうだな。だが初心者でも勝ちようはあるぞ。あ
いつは確か瞬時加速が使えたたる？それを上手く利用して雪片二型
のあの攻撃を入れれば勝てるぞ」

そう言った。そしてそんなやりとりをしてるとモニターの一夏たち
のほうは

「鈴。本気でいくからな」

一夏はそう言う。鈴に向かって瞬時加速を使い一太刀浴びせようと
すると突如ものすごい衝撃がアリーナに走りステージ中央に土煙が
舞い上がりその中になにかいるのである。一夏は何事かと思ってい
ると鈴からプライベート・チャンネルで

《試合は中止よ！すぐにピットに戻って！》

と告げられると一夏のISのハイパーセンサーが中央の熱源、所属不明のISからロックされていると警告される。

《一夏、早く!》

鈴が再び一夏に逃げるように言う

「お前はどうするんだよ!？」

「あたしが時間を稼ぐからアンタはその間に逃げなさいよ!」

「女を置いて逃げれるかよ!」

「馬鹿!アンタのほうが弱いんだからしょうがないでしょうが!第一あたしも最後までじゃなくて時間稼ぎをするだけよ。すぐに学園の先生たちがやってきて自体を収拾」

鈴がそう言いかけてると突如、敵のISからビームが放たれる。

「あぶねえ!?!」

一夏そう叫び鈴を抱えて避ける。

「セシリアより高出力のビーム兵器かよ…!」

自分たちがさつきまでいた場所を見ると一夏は相手の攻撃の威力に驚いていた。

「ちよ、ちよっと一夏。アンタどこ触って」

「!来るぞ!」

鈴がそう言つて軽くジタバタもがいていが敵の攻撃がくると一夏はすぐさま避ける。そしてだんだんと土煙がはれていき敵のISが見えてきて、一夏はその姿をみると驚いた。

「なんなんだこいつ…」

そうそのISの姿は全身装甲という異形なものであった。

「お前、何者だよ」

「……………」

一夏は相手に問うたが無反応である。

《織斑くん!鳳さん!今すぐに脱出してください!すぐに先生たちがISで制圧に行きます!》

山田先生は突如通信に割り込んで一夏たちに脱出の命令をしたが

「いや、先生たちが来るまでは俺たちで食い止めます」

と命令に従わず時間稼ぎをしないとはいだすのであった。

「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったら」

山田先生がそう言いかけるととき敵ISが一夏たちのほうへ突進してきて最後まで言葉が聞き取れなかった。

「一夏、向こうはやる気満々みたいね。あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。アンタの武器ってそれしかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあいくか」
そう言うと二人とも敵に向かっていった。

一方山田先生たちのほうは

「聞いてますか！？織斑くん！鳳さん！二人とも聞いてますか！？」

プライベート・チャネルは叫ぶ必要性がないが必死に叫んでいる山田先生。

「本人たちがやると言ってるのだから、やらせてみてもいいだろう」

千冬は山田先生とは反対に静かに話す。

「お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？生徒さんたちが、織斑くんと鳳さんが危ないんですよ！？」

そうやり取りをしているときに零治は箒が出て行くの横目でチラッと見た。

《オルカ気づいているか？》

《ああ、出て行ったな》

とオルカもそのことに気づいているようであった。そして二人とも箒が起こしそうな行動もなくなっただが見当がついた。

《俺はあの侵入してきたイレギュラーを排除する》

《わかった。俺はあの考え無しのアホを連れ戻す》

オルカは零治に言われると筈を探しに気づかれないようにさっさとでていった。そうやりとりしてると

「先生！わたくしたちにISの使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

セシリアが千冬に対してそう自ら申告する。

「そうしたいところだが、これを見る」

千冬がそう言うと第二アリーナの情報を出すとそこに映し出されていたのは

「扉が全てロックされていて、遮断シールドがレベル4設定…？まさかあのISの仕様ですよ！？」

「そのようだ。これでは非難も救援に向かうこともできないな」千冬が冷静のように言うがよく見ると手が苛立ちを隠せずに画面をせわしなく叩いていた。零治はその情報を見てある程度推測する。

（あのIS自信がこちらの遮断シールドを全てロックしているのか。だが今は三年の専門家たちがクラッキングを行っているが全く進んでいない…ウイルスか？いや、ウイルスごときでは流石にここまで時間がかからない。そうするとやはりIS自信がやっているとなるが、そんなことをやりながら戦闘をすることができるのか？片方はあくまでも代表候補生だ。その攻撃をかすりもせず避けて反撃するなど普通の人間ならできないな。てことは他に協力者がいてそちらがアリーナのシステムを乗っ取っているのだろうな）
そう軽く推測すると

「織斑先生が行きますのでISの使用許可を」

千冬にそう言う零治

「三嶋。お前は人の話を聞いていなかったのか？」

「いえ、遮断シールドをぶち破ります」

「なんだと？お前のISはそういうことができるのか？」

「はい。できます」

「……………」

千冬は零治のその淡々と答える言葉に少し驚きちよっとの間沈黙す

る。まあそれもそう思うだろう。零治のISにはあの敵と同じ威力の出せる武器が備わっているということなのだから。

「…わかった。まかせる」

千冬は考えた結果そう言ったのである。零治はそれを聞くとアリーナの方へ向かっていった。

そして零治は第二アリーナのAピットの前ままでいくと周りでシステムクラックをしていた生徒たちに離れるように言いISを展開すると両手の07-MOONLIGHTの出力を調整してシールドを焼き切ると一夏たちのところへ向かった。

そのころ一夏は鈴とともに謎のISに挑むが攻撃が殆どあたらずエネルギー残量がどんどん減っていく。しかし一夏は戦っているうちに相手に妙な不信任感を抱いていた

「なあ、鈴。あいつの動き妙に機械じみていないか？本当に人が乗ってるのか？」

「なに言ってるの、無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

鈴は、一夏が言ったことを否定するが一夏はどうしても人が乗っているとは思えなかった。

「仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？無人機だったら勝てるって言うの？」

「ああ、それなら全力の雪片二型が使えるからな」

そう自信満々に話していると敵のISが一夏たちに向けて攻撃を仕掛ける。

一夏と鈴はとつさに避けていくが相手の攻撃は激しさを増す一方であり鈴が直撃コースの攻撃をぎりぎりでかわすが無理に避けたせいでバランスを崩してしまう。すると敵は鈴に完璧に狙いを定めて撃とうとしている。

「鈴！」

と一夏が叫ぶが敵は無慈悲にもビームを撃つ。鈴はもう駄目だと目を瞑るが体に軽い衝撃がはしり引つ張られる感覚がする。鈴はゆっくり目を開けると零治の右腕に抱えられているのがわかった。

「すまないな、遅れてしまった」

「なんでここにいるのよ!？」

そして零治をもう一度みると零治の左腕が少し火傷しており若干血が出ている。

「アンタ、その腕:!!」

「なに、只のかすり傷だ。戦闘に問題はない」

零治はそう言い敵から少し距離をとる

「もう放すが大丈夫か？」

そう聞き鈴が短く頷くと零治は鈴を放す。

「俺は今からあのイレギュラーを倒しに行く。鈴、お前は一夏と一緒に下がっている」

「アンタ、ちょっと何言って」

零治は鈴が何か言い終わる前に敵に向かっていく。

「零治!そいつは無人機かもしれない!」

一夏は零治が敵に向かっていくのを見てオープン・チャンネルでそう叫んだ。

「なるほど。では遠慮なく壊させてもらおう」

零治はそう言うとともにさらに近づいていく。そして相手は近づかせまいと迎撃をするがそれを難なく潜り抜けて近づいていく。

その光景をみた鈴は

「なんなのよ、あいつ……」

と自分達があんなにも苦労していた相手に対して簡単に接近をしているのに驚く。

そして零治はある程度近づき隙を見るとQBを使い左手の07・MOONLIGHTを振るい敵ISの右腕を焼き切る。そして敵は左手で零治を殴るがそれは空をきりその隙に右手の07・MOONL

I G H Tで左腕も焼き切り、そのまま流れるようにして敵I Sのコアごと切り裂くと敵I Sは完全に沈黙した。

それを見ていた一夏たちは終わったと思いきや零治の方へ向かおうとすると突如敵にロックされているという警告が零治のハイパーセンサーから知らされる。

「一夏、鈴。こちらにくるな！」

そう言うとう空から零治にめがけてビームが撃たれるが零治はそれを避け上空をみるとさっき倒した相手と同じ敵がいた。

「やはりもう一体いたか」

零治がそう言っていると敵I Sが零治にむけて射撃をしてくる。

「やれやれ、貴様ら無人機には有人機故の強さと言うものを教えてやるう」

そう言い応戦しようとする

「一夏あつ！」

と箒の大声がスピーカーを伝わって響きわたり中継室の方を見ると審判とナレーターがのびていた。おそらく箒がやったのであろう。

箒の行動に零治も一瞬呆気にとられ少し苛立ちを覚える

(チツ。空気にもなれんか…！)

「男なら…男なら、そのくらい敵に勝てなくてなんとする！お前の「黙れ」がっ！」

最後になんか言おうとした箒だがオルカが箒に一発入れて気絶させる。

「箒！オルカ、お前っ！」

と一夏は叫んでいる。

そして敵I Sは中継室のほうへ向けて攻撃をしようとチャージをしていた。

「させるか。消えろ、イレギュラー！」

そう言い二段QBで一気に距離を詰めてチャージをしている腕ごとコアを07-MOONLIGHTで切るがチャージ中のエネルギーが暴発して爆発に巻き込まれてしまう。

「「零治！」」

と一夏や鈴、オルカも叫ぶ。そして煙がはれると左腕を負傷しているが致命傷は負ってなかった零治の姿があった。

「織斑先生、こちらは終わりました」

零治は千冬にそう通信する。

「ごくろうだった。こちらシステムのコントロールは取り戻した。お前は早く怪我の手当てをしる。いいな？」

「わかりました」

そう言い通信を切って一夏たちとピットに戻ると医療班が待機しており零治はすぐさま連れて行かれる。

こうして正体不明のISの襲撃は終わり、約二時間後零治が保健室で休んでいるとドアが開き一夏、セシリア、鈴、リリウム、そして一時間ほどで起きた筈の4人が入ってくる。

「零治もう大丈夫なのか!？」

と言い寄ってくる一夏

「まあ、少し落ち着け一夏」

「あ、ああ。悪い」

するとまたすぐにドアが開くと千冬、山田先生、オルカの三人が入ってくる。

「三嶋、腕は大丈夫か？」

「はい、見た目の割にはそこまで酷くないらしいので一週間もすれば完治だそうです」

「そうか」

千冬は零治の怪我の具合を聞くとほっと安心する。

そしてオルカが千冬と山田先生の陰から出るのを一夏はみると

「オルカ、お前。さっきなんで筈を殴ったんだ」

静かに言うもののかなり怒気の含まれている声だった。

「そんなの黙らせる必要があったからだ、なにかおかしいか？」
オルカは一夏の怒りを軽く受け流しさも当たり前のように答える。

「だから、殴る必要はなかったらうって言ってるんだよ！」

一夏はオルカに対して怒鳴った。

「じゃあ、普通に言ったところで辞めたか？中継室の審判とナレターを気絶させたんだぞ。非難させるでもなく自分がやりたいことのために中継室の二人を危険にさらしたんだ。もしかしたら俺までが気絶させられるかもしれないな。しかもその行為により中継室が敵の攻撃の標的にされ、あの時叫ばなければ零治もそこまでの怪我にはならなかったかもしれないんだぞ」

「だ、だけど、もっと別のいいやり方があったかもしれないじゃないか」

オルカは一夏のだだをこねるような言葉に苛立ちがだんだんと抑えきれなくなつて舌打ちをする。

「ああ？その別のいい方法ってなんだよ、言ってみろよ」

「そ、それは……」

一夏は答えようにもまったく思いつかずに答えられない状態である。「お前な、今回は人が死ぬかもしれない状況だぞ？それをわかつて言ってるのか？たった一人の身勝手な行動により人が死ぬだぞ。それが分かっていいのか？言っただよ！」

普段のオルカからは考えられないほどの怒りが発せられていて零治、リリウム、千冬以外は皆今のオルカに対して少し怯えていて山田先生に関しては若干涙目である。

「チツ、胸糞悪い。俺は部屋に戻る」

オルカはそう言い出て行ったがそれでも保健室はまるで通夜のように静まり返っていた。

すると零治が

「織斑先生、もし俺に他に用事が無いのであれば俺も部屋に戻つてもいいですか？」

と話を切り出した。

「いや、三嶋には話すことがある。他はもう部屋に戻れ。あと今回の件はあまり口に出さないようにしろ。いいな？」

千冬がそう言うのと千冬、山田先生、零治以外が保健室から出て行き、保健室の周りにも誰もいないのを千冬が確認すると零治の方を見る。

「で、話ってなんですか？」

「ああ。お前のISはなぜあそこまでの出力が出せるんだ？数値を簡易的に調べたが異常だったからな」

千冬の質問は零治にとって予め聞かれるだろうと思っていたことであつた

「あれは我が社の試作品を出力をオーバーロードさせて無理に使っただけですよ。なのでもう使い物にならなくなっちゃいました。なんなら後でその試作品のデータを渡しますが」

零治は淡々と答える。もちろん嘘であるがそう言われると千冬もこれ以上追及ができない。

「そうだな、明日にでも提出してもらおう」

「話ってそれだけですか？」

「いや、今のもそうだが。今回の襲撃の件についてお前の考えを聞きたくてな」

「なぜです？俺なんかに聞いても意味ないんじゃないですか？」

「なに、一企業の社長の意見も聞きたくてな」

「そうですね…」

そう言うのと零治は少し考えるような仕草をとる。

(ふむ、当たり前のことを言っていけばいいか)

零治はそう考えると喋りだす

「そうですね。今回の襲撃は戦力の偵察に専用機の奪取、あわよくば男性のIS操縦者の確保。そうでなければ愉快犯かと思えます」

「ほう、なぜそう思うんだ？」

「それは、まずはなっから殺すことを目的としていれば最初の奇襲で確実に一人殺すことができました。なのにそれをせずに派手に登場するだけでした。そしてもう1つの愉快犯の考えはわかりません。あと今回の敵のISの無人機に関してはおそらくどこかしらの企業が作ったわけではないと思います」

そう言うのと千冬の眉がほんの僅かだが動いた。

「もし企業が作ったとしたらそれに対して特許をとろうかと動きます。さらにあのISたちは捨て駒同然に扱われているのを見るとおそらく企業は貴重なISコアを無駄遣いしないはずですよ。もしISのコアが篠ノ之束以外の人間が造れるなら、それこそ世界に向けて自慢をするでしょう、自分は篠ノ之束と同等の天才だと」
そう言うのと少しの間沈黙が流れる。

「まあ、俺の考えはそんな感じですかね」

「…そうか。わざわざすまん」

「いえ、大丈夫です。では俺も部屋に戻っていいですか？」

「ああ。構わない」

零治はそう言い保健室のドアをあけ外にでようとするとピタリと足を止める。

「ああ、あとオルカから聞いたんですが、学園全体の扉が完璧にロックされていたのに篠ノ之箒が通ったところだけ偶然にも開いたのは何故でしょうか？」

そう言い残すと保健室をあとにした。

そして廊下を歩いていき自分の部屋がある通路に出ると鈴が壁にもたれかかっているのが零治の目に入る。

「どうした、部屋に帰らないのか？」

「いや、アンタを待ってたのよ」

「俺を？何故だ…？」

「その、言うのが遅くなったけど、ごめん。あたしのせいであなたの腕に怪我させちゃった…」

そう言うて謝る鈴。

「あたしがもつと慎重に動いていれば」

「そう自分を責めすぎるな」

零治は言葉をさえぎりそう言う

「でも…」

「なに、友の命を救えたと思えば安いものさ。そしてあまり落ち込むな、お前らしくないぞ」

「なによ、人が心配してるのに！」

「ふっ。やはりそう元気があるほうが似合うよ」

そう軽く笑いながら言う

「っう〜！」

軽く俯き少し頬を赤く染める。

「ん？どうした？」

「な、なんでもないわよ」

「そうか、ならいいが。まあそれよりも一夏との約束のことや仲直りはどうするんだ？」

「そう言っても今日はさすがに…」

「ふむ、それもそうか」

「まあ、明日ぐらいにでも仲直りはするわよ。でも約束のことはもうどうでもいいかな〜って。あんたと話しているうちに、いちいち過去のことにこだわらすぎるのがアホらしく思えちゃったわけよ」

「そうか、それがお前の出した答えなら俺はどっこの言っつもりは無い。まあ頑張れよ」

零治はそう言うと鈴の頭を軽くポンポンと撫でる。

「き、急に頭を撫でるんじゃないわよ！」

「おお、それは悪かったな」

零治は軽く笑いながら言う

「ね、ねえ！」

「ん？」

鈴が再び呼んだのに対し軽く振り向く。

「また、あんたの部屋に遊びに行つていい？」

と聞いてくる鈴。

「ああ、構わない。来たいときに来ればいいさ」

軽く微笑みながら答えると部屋に向かったのであった。

そして零治は部屋に着き入りオルカに話しかけた。

「さつきは妙にらしくなかったじゃないか」

「ああ、そうかもしれないな」

「いったいどうしたんだ？」

「いや、あいつらはISが本当に人を殺せる道具だというのを解かっているさ過ぎる。しかもあの状況がどんな状況だったかも本当に解っていないと思ったただだよ」

「…そうだな。ここの教員の大半もISは人を殺せる道具と言うのをちゃんと理解してないようだからな」

「このままいくと、いずれは本当に人が死ぬかもしれないぜ」

「ああ。俺もそう思う」

「そして篠ノ之束と言う人間はなんのためにISを作ったんだろうなって思っている」

「さあな。篠ノ之束は確かに技術者としては天才だ。だが人としては歪んでると思うな。ISは宇宙に行くためと言ってるが実際は宇宙のことを考えてないだろう。どこの企業も兵器として扱っている。このままではいずれあの世界と同じことが起きるかもしれないな」

「それだけは勘弁してほしいな」

オルカがそう言うのと二人とも自分達が昔いた場所を思い出していた。

「この世界は俺たちがいた世界とは別の意味で命が軽いな」

零治はそう口にする。零治達がいた世界も戦争が当たり前で戦場で戦うものは企業の駒でしかなく軽い命と思われているとは別にこの世界では軽いと言ったのだ。

「確かにな。あの世界も歪んでいたけど、こっちも十分に歪んでいるよ」

オルカはそう言いあの世界で言われたことをふと思い出していた。

「だが俺たちでは正直、世界を変えることなどできないだろう」

零治がそう告げる

「だからってなんもしないのかよ？」

「なにもしないとは言っていない。なに、やれることはやるさ」「オルカはそう言われると」「そうだな」と言い返したのであった。

こうして長い一日は幕を下ろした。

第16話（後書き）

やっと一巻が終わりました（汗

最近友達からネットゲのAVAを勧められたんでやってみましたがF
PS初心者の作者は殆どフルボッコされるといふ…orz
まさに乙樽の「戦場に迷い込んだのか？素人が…」という台詞がぴ
つたりの状態といふ

そして次は日常回となりますのでよろしくお願いします。

第17話(前書き)

今回は日常編です。

第17話

第17話

六月の初めの日曜日。

零治は前日の土曜午後から日曜の午前中にかけてレイレナード社に顔を出したていた。

そして用事が終わると浅間大介という男性に途中まで送ってもらうことにする零治。

「わざわざ送ってもらってすみません」

「いやいや、僕は構わないよ。それにしても皆久しぶりに零治君が顔を出したら喜んでいたね」

「そうですね。でも研究員のはしゃぎようは流石に」

そう言い苦笑いする零治

「ははは。それほど嬉しいってことだよ」

「そういうことにしておきます」

「それより、学園生活はどうだい？」

「いろいろ大変だけど、楽しいですよ」

「それはよかった。学生の青春は一度きりだからね」

そんなやりとりをしていると零治が

「大介さん。この辺で大丈夫です」

と止めてもらうように言った。

「いいのかい？モノレールの駅まで距離あるよ？」

「いえ、せつかくなので少し散歩をしようかと思いましたが」

「そっか、そう言うなら仕方ないね」

大介は零治に言つと車を邪魔にならないように車を止めて零治を降ろす。

「じゃあ、僕はこれで」

「はい、ありがとうございました」

零治がそう言つと車は去っていきそれを見送ると携帯で時間を確認する。

「ふむ、12時ちよつと前か。昼食を摂れるところを軽く探すか」
そう言つと零治は歩き出した。

一夏はあの襲撃の日オルカに対して自分の言つてることが只の我侭であると思つと次の日にオルカに謝りにいき謝るとオルカは「殴つた俺も悪いんだ。気にするな」と言つて仲直りをした。

そして今日一夏は自分の家の様子を見に行つたついでに友人の五反田弾という友人のところに来ていて久しぶりに会う友人と楽しい時間をすごしていて12時頃になると弾の定食屋の食堂で昼をご馳走になるために表から食堂に入り昼飯を食べることにする。

「やっぱり羨ましいよなー」

弾がそう一夏に言つ。

「お前、さつきからそう言つてるけど、こつちはかなりきついぞ。幼馴染と他の男子がいなかったらと思うと……」

「そういやお前以外にも男がいたんだっけ」

「ああ。あと二人ほどいるぜ。一人はオルカつてやつでもう一人は」

そう言つてると食堂の入り口から一人のスーツを着た男性が入ってくる。一夏はその男性がふと目に入り

「零治つて言っただけだ。ほら今、入り口に入ってきた人にそつくり、な……あれ？」

一夏はその男性をまじまじ見るとそれはとても見覚えのある人物であつた。

「零治……!?!」

そう言うとスーツを着た男は一夏の方を見て。

「おや、一夏じゃないか。奇遇だな」

「お前、どうしてここにいるんだ？」

「どうしてと言われるても昼ごはんを食べるためだが。あと席が結構埋まっているから同席してもいいか？」

「ああ。いいぜ」

そんなやりとりをしていると弾が

「一夏、この人がお前以外の男子か？」

「ああ、そうだ。零治って言うんだ。零治、こいつは俺の友達の弾だ」

「そうか。初めまして、俺は三嶋零治が一夏のクラスメイトだよらしく」

「おう。俺は五反田弾だ。一夏とは中学からの友達だ」

お互いに自己紹介をしていると。弾の妹の蘭が

「お、お兄」

「ん、どうした？」

「その人、前テレビで出てたレイレナード社の社長さんじゃないの」

弾はそう言われるとどうやら思い出したようであった。

「あっ！」

「ああ、そういえば零治って社長だったな」

「一夏。そういうことは先に言えよ！」

と弾は先ほどより若干緊張しだしていた。

「ふむ、俺のことはこういう所では社長の肩書きは無しに一個人として接してくれ。俺もそのほうが嬉しいからな」

「ほら、零治もそう言ってるんだしさ」

「いや、お前はもう少し考えたほうがいいと思うが」

「そうか？」

そう言っていると零治が頼んだ野菜炒めが持ってこられていただきますと一言と食べ始める。

「でよう一夏。誰だっけ鈴以外に再会した幼馴染って」

「ああ、筈な」

「ホウキ…？誰ですか？」

「ん？俺のファースト幼馴染。まあ誰も知らない中、同じ部屋で助かったぜ」

「お、同じ部屋！？」

とその言葉を聞くと急に取り乱す蘭

「ど、どうした？落ち着け」

「そっだぞ落ち着け」

一夏に続いて弾もそう言っていると蘭に鋭い目付きで睨まれると小さくなる

「い、一夏さん？同じ部屋ってことは寝食をともに…？」

「まあ、そうなるかな。でも先月までで今は違つとけどな」

蘭はそう聞くと弾にアイコンタクトを送ると弾は汗をだらだら流している。

「…。決めました。私、来年IS学園を受験します」

「あ、IS学園は推薦とかなしで筆記だぞ」

と弾が言ってるが

「お兄と違つて、私は筆記で余裕です」

「いや、でも…な、なあ、一夏！あそこつて実技あるよな！？」

「ん？ああ、IS起動試験というのがあつて、適性が全くないやつはそれで落とされるらしい」

一夏がそう言つと蘭は無言でポケットから紙を取り出し弾に渡し弾はそれを開く。

「げえっ！？IS簡易適性試験…判定A…」

それをみて啞然とする弾。

「問題はすでに解決済みです」

「勝手に学校を変えるとか、いいのか、じーちゃん！」

「蘭が自分で決めたんだ。どうこう言つ筋合いじゃねえわな」

「いやだつて…れ、零治さんからもなんか社会の厳しさみたいのを言つてくれ」

「いや、他の人の家庭の事情に首を突っ込むのは悪いだろ。まあ、なんならウチの企業がサポートしてあげようか？」

「あら、いいわね。大企業のサポートが受けられるなんてにこやかにそう言っ出てきたのは弾の母親である」

「母さん！零治さん、冗談だよな」

「ああ、半分以上は冗談だ」

「全部じゃないのかよ！」

そう言いガクツと肩を落とす弾であった。

そして昼食が終わると零治は半ば一夏に強引に連れてかれるように一夏たちと遊びに行くことになった。

一方学園にいるオルカはISの整備室で自信のISを調整していた。

「整備するのってこんなに大変だったけ」

そう愚痴を言いながら零治が向こうの世界での武器をこっちの会社で作ったのを試射などをするために色々といじっている。

零治から送られた武器は背中武器のチェインガンXCG - B050、分裂型ミサイルSALINE05、プラズマキャノンSULTANそしてグレネードキャノンYAMAGAの四つである。オルカはXCG - B050とYAMAGAの試射は問題なく終わり残りはSALINE05プラズマキャノンSULTANである。

「ミサイルとかFCSの数値を一番気にしなきゃいけない気がするしプラズマに関しては燃費を報告しろとか…めんどくさ！」
そう言い大の字に寝そべる

とある女子生徒side

名は更識簪という女子生徒である。彼女は自分の専用機、打鉄二式

の機体を完成させるために整備室きたが自分より先に来ている人物がいるのに気づきその人物を見る。

(…あれって、皆が噂してる男子…確かオルカって名前だった?)
そんなことを思っている。

「めんどくさ!」

とオルカは言っただの字になるのを見てると目が合う

side out

オルカは大の字に寝転がっていると先ほど入り口から入ってきた簪と目が合う。

(だれ?なんでこっちみてるの?)

オルカは不思議そうに思うが、周りから見れば面倒だとそれなりに響く声で言っただの字に寝転がるのであれば殆どの人間はみるだろう。

「ん?なんか用か?」

突然にオルカが話しかけると簪は少しビックリする

「…別に、特に…用事は、無いけど」

「そうか…」

そして再び目が合ったまま沈黙が流れる

(なんだこの空気は!?)

(…どうしよう、この空気…)

と二人ともさっさと整備に戻ればいいのにこの微妙な空気に身動きをとれずにいた。

(どうするか…そうだ!自己紹介でもすればなんとかなる!)

オルカは頭の上に電球が光ったようになるのと口を開いた

「なあ、アンタの名前は?」

いきなりの言葉に少し驚くが

「簪。…更識、簪」

「俺はオルカ・リンクスだ。それにしても更識か、どこかで聞いたことあるな…」

オルカがそう言うのと簪はまた自分の姉、更識盾無。あの何においても完璧な姉と比べられると思いい心が少し苦しくなった。

「ああ、思い出した。四組のクラス代表だっけ？間違えてたらすまん」

だがオルカはこの学園のほぼ全ての人間は知っているだろう生徒会長の更識盾。その妹と言わなかった。そのことに少し驚いている簪。

「…あつてる」

「そうか、ならよかった」

簪は本当に更識の名を知らないのかと不思議に思い聞くのが怖いのがオルカに更識と言う名を知らないか質問してみることにしたのだ。

「ね、ねえ」

「ん？」

「他に、聞き覚え…ないの？」

「なにが？」

「な、名前…」

「いやだから四組のクラス代表のじゃなくてか？」

「それ、以外で…例えば、生徒会長…とか」

「生徒会長？誰だそれ？」

「…本当に、知らないの？」

「ああ、第一更識なんてそれなりに珍しい苗字だったら忘れないと思うけどな」

そう聞くと簪は少しほっとする。

「で、更識もISを整備しに来たのか？」

「うん…自分の専用機を、組むために」

「へえ、すごいんだな」

「すごくなんか、ないよ…」

オルカは素直に関心するが簪は表情を少し曇らせてそう言った。

「そうか？お前が言うならそうかもかもしれないが、俺からみれば充分すごいと思うのけどな」

簪は今まで何をやっても更識盾無の妹なら当たり前と思われていたが、目の前にいる男。だが目の前にいるオルカがそういうのを無しで凄いと喋ってくれたのが正直に言えば嬉しかったのであった。

「リンクスくんは、何をしてるの？」

「零治の会社の試作武器のテストみたいなこと」

「零治って…一組の三嶋、零治のこと？確か、レイレナード社の社長…」

「そう、そいつの頼みでやってるんだ」

「じゃあ…リンクスくんも、レイレナード社の、人なの…？」

「いや、違うぞ。俺は今のところはどこにも属してないぞ」

「じゃあ、なんで…？」

「なんでと言われても…まあ、色々あるんだよ。あとさ、初対面で悪いんだけど…よければ手伝ってくれると助かるんだが」

オルカのいきなりの発言に驚く簪。

「わ、私…自分の専用機、やらなきゃ、いけないから」

「まあ、そうだよな。ごめん、いきなり」

「別に…大丈夫」

「そっか、俺はもう作業に戻るわ。悪いな時間とって、あと頑張れよ」

「…うん。ありが、と。そっちも、頑張つて…」

簪はそう言いつと自分の専用機を完成させにいき、オルカは再び作業を始めるのであった。

そして時間が過ぎ、夕食の時間になる。

リリウムは零治を夕食に誘おうと部屋の前に来ると鈴と鉢合わせになる。

「あ、鈴さん」

「リリウムじゃない。どうしたの？」

「鈴さんこそどうしたんですか？一夏さんなら隣の部屋ですよ」

「用があるのは一夏じゃなくて零治よ。夕食を誘いに来たのよ」

「あら、奇遇ですね」

「へえ、アンタも」

そう言つと二人とも

（まさか鈴さんは今まで相談をしに来てただけだと思つてましたが、まさか一夏さんではなく零治さんを最初に誘いに来ると言うことはやはり…）

（前からよく話すからそうじゃないかと思つていたけど、まさかリリウムもあいつのこと…）

と似たようなことを思つリリウムと鈴。そして二人とも同じ結論に至り。

（（ある意味で敵！））

と同時に心の中で言つと二人の間に火花が散り始めた。

「「ふふふ…」」

二人とも不気味に笑い出す。すると廊下の奥のほうから零治が来る。

「ん？鈴とリリウムじゃないか」

「あ！あんたいいとこに來たわね。今から夕食を食べに行くわよ」

「なつ！零治さん私と行きましょう！」

と二人とも零治に言つと鈴とリリウムの間で再び火花が散る。零治はなんなんだと思つてみると

「零治、夕食に行こうぜ」

一夏がそう言い出てくる

「俺も行くぞ」

とオルカもどこからかぬつと出てくる。

「そうだな。鈴、リリウム。先に行ってるぞ」

そう言い一夏たちとさっさと歩き出す。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ」

「ま、待つてください」

鈴とリリウムは急いでその後を追いかけて行き食堂に入る。

「ねえ、それって本当!？」

「マジ、マジ。超マジだよ!」

「それって織斑くんだけなの？三嶋くんやリンクスくんは？」

「三嶋くんたちはわからないけど織斑くんのは確かだよ!」

そう話している女子達の中の一人が零治たちに気づくと近づいてきて

「ねえねえ、織斑くんたちのあの噂ってほん むぐっ!」

何かを話そうとした瞬間別の女子に口を塞がれる

「あはは、なんでもないよ。本当になんでもないから!」

そう言い残すと走り去っていく。

「なんだったんだ?」

一夏が目の前の出来事に理解できずに頭の上に?をつけている。

「気にしても仕方ないだろう。それより早く夕食を食べてしまおう」

零治が一夏にそう促すと席に着き五人で食事をすることにした。

その間も周りが少々騒がしかったが気にせず食事を終えてそれぞれの部屋に戻り一日が終わる。

そして次の日、朝のSHR。

「みなさん、今日はなんと転校生を紹介します!しかも二人です!」

山田先生の発言にクラスはざわめき始める。

(この時期に転入とはきな臭いな…)

零治はそう考えていると教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた二人を零治は見ると片方は男の制服を着た人物
もう一人は眼帯をしたした人物であった。

(…男?)

と男子の制服を着た人物を見て色々と疑問を持ち、もう一人の方を
見る。

(歩き方が軍人みたいだな…)

今までの経験を活かして見ると軍人のように見えた。そして二人を
もう一度見ると

(はあ…これは、なんともまあ、面倒なことになりそうだな…)

と心の中で溜息を吐き、そう思うのであった。

第17話（後書き）

やっとシャルとラウラの登場です。

そしてACVの発売が待ち遠しい最近です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7031y/>

IS 何回か転生(?)する人の物語

2011年12月11日21時25分発行